二〇二四年度
第五回　泥流地帯作文コンクール作品集

募集期間　二〇二四年六月～九月
応募資格　特になし
応募作品数　47作品（うち2作品は短文投稿の部）

＜選考委員＞
三浦綾子記念文学館　館長　田中　綾
三浦文学案内人　近藤　弘子
上富良野町教育委員会　教育長　鈴木　真弓
上富良野町郷土をさぐる会　会長　和田　昭彦
（選考委員長）『泥流地帯』映画化を進める会　会長　青野　範子

主催　『泥流地帯』映画化を進める会
協力　三浦綾子記念文学館
上富良野町教育委員会

目　次

＜はじめに＞ ……1

＜優秀作品選考審査結果＞ ……2

＜一般の部＞

■泥流地帯・補　／　堀川一彦 ……4

■苦難に思うこと　／（P.N）水木ひろみ ……5

■『泥流地帯』を再読して　／（P.N）佐伯真依 ……5

■届かなかった言葉　／（P.N）桜小町 ……6

■『泥流地帯』を読んで思うこと　／　林文子 ……8

■人事を尽くして天命を待つ　／（P.N）ＳＡＫＵ ……9

■「泥流地帯」を読んで　／　伊藤裕司 ……10

■試練が来るたびに　／　鵜ノ澤暢子 ……10

■兄弟の神話　／　菊池健 ……12

■生まれる前から知っている　／　高田智子 ……13

■日常の幸せとは…　／（P.N）津香砂 ……14

■正義の心を持て　／（P.N）新堂慶奈 ……14

■三浦綾子さんからの手紙　／　上田真弓 ……15

■若かりし頃の『泥流地帯』　／（P.N）みうまる ……20

■佐枝を通じて見えるもの　／（P.N）玖枝美奈登 ……21

■泥流地帯、続泥流地帯を再び手にして　／（P.N）北鶴子 ……23

■「泥流地帯」から感じたこと　／　菅野法之 ……27

■一筋の光　／（P.N）パンダ ……27

■手にも触れねば　／（P.N）吉村うにうに ……28

■「正しさ」とは何か　／（P.N）藤井寧子 ……32

■いくつだったか　／（P.N）黒木猫 ……35

■三浦綾子先生への手紙　／（P.N）青山　恵 ……38

■絵画から広がりゆく「泥流地帯」　／（P.N）すい ……40

■『泥流地帯』に学ぶ―大正から令和へ
（開拓者が百年後に託したこと）　／　松野　富子 ……44

■未来を暗示した「泥流地帯」「続泥流地帯」／（P.N）くうりん ……47

■凡人、石を穿つ　／（P.N）ぽっちゃり八兵衛 ……48

■今なお新鮮に　／（P.N）置時計 ……52

■節子と耕作　／（P.N）ニモ ……54

■「泥流地帯」読後―喪失から希望へ―／（P.N）メランポディウム ……61

■いまに居る、或るまで　／（P.N）佐々木 戸桃 ……62

■フィルム「十勝岳大爆発」（株式会社マツダ映画社所蔵）
に関する覚書　／　岩男　香織 ……64

＜児童生徒の部＞
■泥流を知ってもらうために ／（P.N）ごりら ……72
■節子の復讐 ／（P.N）ひじり ……72
■泥流地帯の感想 ／（P.N）あお ……73
■悲惨なぶんぽーさんと一緒のレオン・ひ・ケネディ／
（P.N）ぶんぽーさん ……74
■拓一に対して思ったこと ／（P.N）あみろ ……75
■泥流地帯を読んで感じたこと ／（P.N）あゆ ……75
■ジャンケン殴打 ／（P.N）豊褒 ……76
■泥流地帯の当時の様子と読んでみた後の私の考え ／
（P.N）まなり ……78
■上富良野の過去 ／ 瀧本 希望 ……79
■拓一と福子の恋愛物語 ／（P.N）ふくこ ……79
■僕の泥流地帯 ／（P.N）動かす と痛い ……80
■自分の考えについて ／（P.N）ZETA Zachary ……81
■泥流地帯から学んだこと ／（P.N）田中 ……81
＜つぶやきの部＞ ……82
＜資料編 史実としての『泥流地帯』＞ ……83

表紙写真

被災直後、大正十五年五月末ごろの上富良野市街地の様子（現中町二丁目付近）

※表紙の画像は、ＡＩによる彩色加工を施しています

■はじめに

『泥流地帯』作文コンクールは、新型コロナウイルスが猛威を振るい始めた二〇二〇年、自宅で過ごす機会が多くなったことを機に三浦綾子文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』の原作小説を多くの人に読んでいただけることを願い、企画がスタートしました。

児童生徒の皆さんはもちろん、大人になり「読書感想文」など書く機会がなくなってしまった皆様にも、読後の感想を文字にすることで得られる新たな気づきや面白さ、そしてそれを他の読者、三浦文学ファンと共有できる喜びを思い出し、楽しんでいただこうと、対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い何でもアリの募集を行っています。

一時的な企画として始まったこのコンクールも、過去四回の開催でいずれも予想を大きく上回る数のご応募をいただき、今回主催者もびっくりの第五回目を迎え、全国から短文投稿の部を含め47編のご応募をいただいたところです。

どの応募作品も三浦文学愛、泥流地帯愛にあふれ、さまざまな視点から深くていねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないか、との期待から、ご応募いただいた皆様のご理解とご協力のもと、例年どおり作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただく機会となることを心から願っています。

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などをご用意しています。皆さんも映画作りに参画してみませんか？

ふるさと納税で
もらえる！
泥流地帯文庫型
スマホケース
※各機種対応

公式Xで
情報発信中

映画化
プロジェクト
webページ

優秀作品選考結果

※今回(第五回)より「一般の部」「児童生徒の部」のみを審査・表彰対象としています

一般の部

最優秀賞　節子と耕作　（P.N）ニモ

【選評】▽本編の読後誰もが思い願うであろう耕作と節子の優しく丁寧な暮らしと、作品を深く読み込み十二分な登場人物理解のもと描かれる若者の葛藤と成長は、二次創作でありながら本編と見紛うリアリティに溢れている▽主人公が今を生きていたら――共に悩み、考え支え合うことの大切さを問いかけている▽この夫婦の性質がとても良くわかる新しい小説を読ませてもらった感じがしました

【受賞コメント】
人生で一番、出会えてよかったと思っている大好きな小説、泥流地帯の作文コンクールで最優秀賞をいただけたこと、本当に嬉しく感無量です。皆様の作品が読めるのを心から楽しみにしております！ ありがとうございます

優秀賞　泥流地帯、続泥流地帯を再び手にして　（P.N）北　鶴子

【選評】▽泥流地帯を読み返し、ご自身の記憶との対比等、物語に近い時代を知っていらっしゃる方だからこその重みを感じました▽作品を通じて、率直な思いをあらわしている▽作品から4つのテーマを取り出し未開地を開拓した両親の苦労に思いを馳せ、善人拓一の生き方に自分の生き方を対比させ近づきたいと思い、泥流に襲われた田畑を再興させた先人達の不屈の精神に触れ、最後に女性の生き方に対して深く掘り下げ持論を述べている

優秀賞　絵画から広がりゆく「泥流地帯」　（P.N）すい

【選評】▽文庫版のカバー画の作者・糸園和三郎に言及した、おそらく初めての論ではないだろうか。カバー画や装幀についての手順、また、糸園の絵画『土塊』のモチーフや背景を調査したことで、小説『泥流地帯』の奥行きが拡がった。また、総合芸術家としての装丁家の役割にもスポットがあてられた。ひじょうに意義深い作文である▽こういう視点もあるのかと驚き、この表紙となった絵画を見に行きたくなりました。

佳作　「正しさ」とは何か　（P.N）藤井　寧子

【選評】▽放送部顧問として生徒に『泥流地帯』朗読指導をするなかで、登場人物一人ひとりの背景に錨を下ろし、いっそう理解を深めたよう。さらに、かかわった生徒への指導とも結び付け、三浦文学の(実学的な)有効性を再発見したようだ。多岐にわたる教員の仕事を、文学作品を補助線にし、より高めていこうとする意志・意欲が伝わり、範としたい文章であった▽中学校からミッションスクールで学び、母校で教員を務める応募者は、一番作者に近い存在で三浦文学に接してきた方だと思う▽「叱られても、叱られなくてもやらなきゃあならんことはやるもんだ」という言葉。自分も改めて身に沁みました

佳作　三浦綾子先生への手紙　（P.N）青山　恵

【選評】▽作品の中で「なぜこんなに、正しい人ばかりが苦難を虐げられるのか、生きるということは何の報いも望まないことなのか」と言う点に疑問を感じ、病弱で不遇の死を遂げた母を想い、だれの心の中にも泥流はあるのではないか。苦難や試練を与えられたとき、人はどう生きるべきかを投稿者は三浦文学の中より学んでいる▽自然災害を通じて、今一度振り返りと未来を描いている

児童生徒の部

最優秀賞　泥流地帯の当時の様子と読んでみた後の私の考え

（P.N）まなり（上富良野高）

【選評】▽大正末期から昭和初期という『泥流地帯』の舞台となった「当時」の社会状況に着目し、現在との隔たりを丁寧に考察しています。「格差」や「差別」といった、現代でも解消されていない問題に関心を持ったことは、今後の学びにも役立つものでしょう。最後に小説の魅力にふれている点も頼もしく感じました▽泥流地帯に書かれている社会の理不尽な出来事に対して、若者らしい純真な意見を述べ、困難を乗り越え今日の復興を遂げた郷土を受け継いで生きたいという決意が述べられていた▽泥流地帯に込められたメッセージをしっかり受け止められて、とても素敵だなと感じました。是非若い方にすすめてもらいたいです▽過去(時代)のことではあるが、しっかりと事例を通して学び、自分の意見が述べられている

優秀賞　泥流地帯から学んだこと

（P.N）田中（上富良野高）

【選評】▽拓一の行動力と比べて、自分は今まで「自発的に頑張るということをしてきませんでした」という気づきから、今後の自分のあり方を考え深めています。セリフを読み味わい、『泥流地帯』からメッセージを受け取ろう、という前向きな姿勢にも好感を持ちました▽拓一の生き方に共鳴して生き方を学び、人生において大切なことは何かを学んだ▽泥流地帯を読んだ感想をとても良くまとめ、そして素直な目で見ている様子がとても好ましく感じました

佳作　拓一に対して思ったこと

（P.N）あみろ（上富良野高）

【選評】▽ふだんの話し言葉で、友達に語りかけるように書いてくれたことが、この作文の長所です。「かっこいい」拓一を身近に感じ、兄のように思ってくれたことで、『泥流地帯』自体がぐっと身近に迫ってきます。何度も読み味わってほしいと願っています▽数いる登場人物の中で拓一にだけ注目して、拓一の様に先を見据え行動できる様になりたいと言っている▽特に拓一に対しての感想について述べられていましたが、耕作についてどう思ったのかなど続きが読みたくなる作品でした

一般の部

泥流地帯・補

堀川　一彦

三浦綾子先生は、お若い頃実のお兄様がやっておられました『お店』で、毎朝各戸に『牛乳配送』をされていたそうである。（『少年と江差追分』三浦綾子より。）

毎朝のように『牛乳配送』をしていると（三浦先生ご自身は、この毎朝の仕事が、別段苦にはならなかったと『御文章』にございました。）

あるあたりで、これ又毎朝のように『新聞配達。』をしていると少年に『でくわす。』ようになった。

なんとなく、毎朝（仕事の途中で）会っていたりしますと、妙に気になりだしたりして、でくわさない日などは反対に「あれ。あの人風邪でもひいて今日『新聞配達』の（お仕事。）休まれたのかしらん」などと、妙に「気をつかったりする。」もので、なんとなく毎朝『牛乳配達。』の途上「この辺りで。」必ず対面（すれ違っていた男の子（少年。）のことが（こちらもまだ少女時代の事であったし「気になったりする。」ものである。

それでも「この文章の作者『少年と江差追分。』三浦綾子先生は、「けっして、この少年にこちらから『声。』をかけようとはせず（くりかえすまでもなく「ドキドキ。」あそこ辺りであうもんだから。かなりの意識をされていた旨三浦先生の『御文章。』には「つづられていた。」

こちらからは、「けっして『声。』をかけることもない。」日々が続いたあと、しばらく（本当）にこの毎朝みかけます『新聞配達』の少年と「あわない日々」もつづくことになる。

そうなるともう「本日は（たぶん）風邪で『新聞配達』をお休みしたんだろうというわけにもいかず、ちょうどこの少年が住んでいる『実家』をつきとめ、そちらに単身「うかがうことになった。」少年の家には『不幸。』があり、それで少年は、毎朝の『新聞配達』を「やめ。」そしてしばらくしてこの少年の住んでいた『家』も引越される事となった。

あるいはこの少年に「少なからず。」などという大胆な表現は「けっしてなさらない少女時代の三浦先生（どうも〝実話〟のようであります。）

少年が、なんにもいわず（つまり、毎朝みかけていた（やはり）『牛乳配達。』の少女に（きこえるかきこえないか或いはまったくの偶然か、ハッキリと今風で言う「好きと。」「嫌い。」もいわず『学校。』のクラスメートに若き日の少女三浦先生は『相談。』をした所、友人は「ませた子らしいのである。」「ニッコリ」と笑って「その少年、あなたのことが好きなんだわ。」なんて「いわれた。」（はたして〝そう〟だったのか。）

とにかく三浦先生の後年の御文章『少年と江差追分。』にもただ少年が『江差追分。』「おしょろ・たかしま・およびもないが、せめてうたすつ、いそやまで。」が三浦先生（少女。）の耳にも入ってきて、後年「あれは、もうこの土地を離れるから私へのメッセージ（伝言。）別れの歌であったのかしらんという「記述」でおわられている。

『泥流地帯。』『続・泥流地帯。』も（この度映画化をされるのですか。

極めて残酷な事態。（大正15年、上富良野村を襲った未曽有の泥流災害。（『公募ガイド』より。）ではございましょうが。）三浦先生は、けしてその『史実』が『ひとごとではなく。』又、史実等を充二分に検証をされた上で「けっして安易にも御自分のお考えだとか主観等を入れようとはしない。（前段までの御文章、これも三浦先生の今日いう安易な恋愛物語（恋心）の一つであるなどとは「いうことのできないまさに『ギリギリ。』の所までご自分の感情等を『制御をせられました。』三浦綾子の大作であると感じ入ります『次第』でございます。

苦難に思うこと

（ペンネーム）　水木ひろみ

三十年程前から三浦綾子先生の作品を好きになり、「道ありき」「氷点」「塩狩峠」等を読み始めました。その中に「泥流地帯」「続泥流地帯」もありました。

三浦綾子さんの作品はどの作品も〝神は愛なり〟という信条のもと、苦難にあっても、ひるまずまっすぐに強く生きていく主人公、周りの人達、読みながらいつも自分の状況を重ね、反省したり感動しながら読んでいました。小説の舞台をたどり、北海道に行き、三浦綾子記念文学館へ行ったこともあり、宿泊していた旭川ユースホステルでは三浦先生の作品について何人かの人達と話しこんだ事もありました。

泥流地帯も祖父母の代からものすごく苦労して開拓してきた仕事、貧困の中でも一生懸命、家族と生きてきた人達、そこに十勝岳の大爆発が起こり、泥流が全て、家族の命も夢もささやかな幸せも流してしまった。あまりに過酷で厳しい物語、その中でも拓一、耕作兄弟は次々に辛い事が起こっても、出来る限りの復興を誓い、前を向いて生きていく、とても心うたれる物語でした。

ここ最近の日本でも、地震や洪水、土砂崩れも起こり、尊いたくさんの命が失なわれる災害もニュースで目にすることが多々あります。家族も家も全てを失った絶望の中でも、小さな事にも喜びを感じ、またやり直す力はどこからくるのか、並大抵ではないと思います。

真っ直ぐに誠実に生きてきた心優しく正しい人間に次々に災難が襲いかかる、できたら、人生平等であって欲しいとは誰しも思うことですが、それを嘆かず、自分の境遇の中で誠一杯生きる、それは今を生きる私達にとっても、大切なことだと思います。

拓一は、泥の中でも蓮のように美しい花を咲かせる美しい心を持った人だと読みながらずっと思っていました。拓一、耕作の物語を映画やドラマで観れたらとても嬉しく思います。

『泥流地帯』を再読して

（ペンネーム）　佐伯　真依

私にとって一番影響を受けた小説家は、三浦綾子さんです。

10代後半で綾子さんの小説に出逢って以来、『氷点』『続・氷点』『ひつじが丘』……と、むさぼるように作品を読みました。

生きる上で大切なことは何か、人としてこうありたいという姿に触れ、多くを教わり、実践したいと強く思うようになりました。

心の中で思うことは簡単ですが、行動に移すのは大変です。けれども、綾子さんの小説で教わった数々と、（こうありたい）という気持ちで、少しずつでも、理想の自分に近づけるよう行動していきたいと願い続けています。

今回、『泥流地帯』を久しぶりに読みました。改めて自然の脅威に圧倒され、耕作や拓一、市三郎、良子たちの健気に生きる姿に、胸を熱くしました。

「真心は届くべ。誰にも見えん所でも、真心こめて生きるこった」（文庫本 P.108）

（叱られても、いいことはするもんなんだ）（文庫本 P.143）

「カラスは日追鳥とも言うんだぞ、知ってるか」
「俺たち、菊川先生に習ったぞ。人間もカラスを見習えってな。物事を明るく考えたり、明るい光りを求めて生きていけってな」（文庫本P.150）
「いいか、人間を金のあるなしで見分けるな。情のあるなしで見分けれ」（文庫本P.229）

心に留めておきたい言葉もたくさん教わりました。

登場人物の一人一人の生きざまや優しさを思い、彼らの前で恥ずかしくないような自分になりたいと、強く思いました。

当時の、農業を営む方々の厳しい生活、兵役、女性の自立が難しい等の、個人の力ではどうにもならないことの多い社会。

そんな世の中においても、懸命に真摯に生きようとする耕作たちの姿に、勇気づけられずにはいられません。

これからの日々の様々な場面で、ふとした瞬間に、彼らを思うことでしょう。心に残るたくさんの言葉を思い出しながら、生きる力に変えることでしょう。

三浦綾子さんとかけがえのない作品、登場人物に感謝の気持ちでいっぱいです。

届かなかった言葉

（ペンネーム）　桜小町

これは詩にまつわる兄・拓一と弟・耕作の、ある一夜を想像で描いた物語です。

耕作は今日の授業で生徒たちに詩を書かせてみた。綴り方を好きになってもらうためのきっかけとして取り組んだので、出来についてはあまり期待していなかった。しかし一つ一つの詩をじっくり読んでいくと、一つ一つの命が宿っているのだと耕作は感じていた。そんな感慨にふけっていたためか、気が付けばもう三時を過ぎていた。耕作はまだ読みきれていない詩を風呂敷に包むと、慌てて家へと急いだ。

一時間ほど畠の手伝いをして夕飯を済ませると、耕作は再び生徒たちの詩を読みはじめた。すると拓一がひょいと顔を出し覗き込む。

「なあんだ。今日は絵じゃないのか。」

そう言うと、少しつまらなそうにして大の字に寝ころんだ。拓一は昔から絵を描くのが上手く、生徒たちの絵を見るのをいつも楽しみにしているのである。絵の他には興味がなさそうに天を仰ぐ拓一の態度に、耕作はなんだか残念な気持ちになった。それと同時に、詩も絵に負けないくらい不思議な魅力があることを拓一にも知ってもらいたいと思った。耕作はある生徒の詩を拓一の顔前に差し出して言う。

「今日は詩ってものを書かせてみたんだ。兄ちゃん、これ読んでみてくれ。」

拓一はよいせっと軽く体を起こすと、じっと詩を読んでいた。しばらくすると

「詩って嘘つけないんだな…。」

と寂しげに呟いた。耕作が渡したのはあの坂森五郎の詩である。拓一はもちろん五郎に会ったことはない。しかし、この詩から五郎の暮らしぶりや心の内が垣間見え、何か感じるものがあったのだろう。もしかしたら、拓一も自分と同じように、母がいない家庭で育った現実や、父が死んでしまった事実を改めて噛みしめているのではないかと耕作は思った。そんなことを考えていたら

「うちの兄ちゃんとも仲よくするべな。」

と五郎に言ってやりたくなった。でも今はまだ早い。もう少し心を開いてくれたら伝えてみようか、と耕作は微笑を浮かべた。

「お前、何にやにやしてんだ？」

訝しげな拓一の声に、耕作はふと我に返った。そして慌てて取り繕うように会話を返した。

「いや、まあ。詩もなかなかいいもんだろ。そうだ、兄ちゃんも福子に詩を書いてみないか？」

思いもせぬ言葉に拓一は明らかにたじろいでいた。耕作自身も勢いだったとはいえ、思い切ったことを言ってしまったと驚いていた。

実は以前にも同じような出来事があった。福子へ風呂敷包みを届けて欲しいと、福子の母から頼まれた時である。拓一は福子のために、竹

筒に金を貯めている。それを唯一知っている耕作は、拓一に話をして福子に手紙でも書かないかと勧めた。しかし、拓一は書かなかった。男が女に手紙を書くのは不良だと言ったのだ。しかし想っているだけでは気持ちは伝わらない。耕作は自分からのまた聞きではなく、拓一の言葉で拓一の気持ちを福子へ届ける必要があると感じていた。耕作はさらに言葉を続ける。

「さっき言ったよな、詩は嘘つけないって。だから詩は正直者の書くものだと思う。兄ちゃん、今度こそ福子に書いてやるんだ。」

もともと手紙も不良のすることだとは思っていない耕作にとって、このような言い方は強引な気がした。だが真っ直ぐに生きる拓一を動かすにはこれぐらい言わないといけないとも思った。すると耕作の気持ちが通じたのか拓一は「やってみっか。耕作、書き方教えてくれ。」

と真剣な眼差しになっていた。

耕作は長く書く必要はなく、とにかく書いてみることが大切だと教えた。しかしそれが難しい。福子のことを思い浮かべて鉛筆を動かそうとするたびに、拓一はこそばゆい気持ちになっていた。想いを相手へ伝えるとはこんなにも心乱されるものかとはじめて知った。どれ程の時間が経ったのだろうか。拓一はようやく一編の詩を書きあげた。

冬の夜
まっくらな　冬の夜
ランプの光がてらす　白いほほ
すきま風がふれる　赤いほほ
雪の庭にのこる　小さなくぼみ
どれもこれも　あたたかい

読み返した拓一は

「やっぱり不良だ…。」

と紙を丸めようとした。手紙と同じように、言葉にするという、相手へ自分の気持ちを押し付けるやり方はやはり男らしくないと思った。拓一は、自分は黙って福子を想っているだけでいいのだと改めて思った。そこに妹の良子がやって来た。実は兄たちが何をしているのかずっと気になっていたのだ。そして、捨てるならそれを見せてほしいとねだった。拓一は良子の純真な好奇心に負け、少ししわがついた紙を丁寧に伸ばして渡した。恋の詩だとは思いもしない良子は、無邪気な笑顔を見せて喜ぶ。

「兄ちゃん、すごいね。これ、もしかして母ちゃんのこと?」

その問いに、拓一は違うとは言えなかった。母の顔も忘れて育つ良子は、母のことならばどんな些細なことでも知りたいのだ。

「そうだぞ。母ちゃんはあったかいんだ。そうだ。それ、良子にやるよ。」

拓一は精いっぱいの笑顔を作り返すと、良子はありがとうと紙を小さく、小さく、折りたたんだ。そして人形の底にある穴にぎゅっとしまい込んだ。その人形は前に拓一が彫ったもので、福子に似た顔をしているのだった。

一方、耕作もまた悩んでいた。拓一に詩を書くように勧めた時、

「耕作も節子って子に書いたらどうだ?」

と拓一に言われたのである。拓一は、耕作が節子のことを好いていると思っているのだろうか。判然としなかったが、耕作から詩を書こうと言い出した以上、自分だけ書かないというのも卑怯な気がした。それに自分でも詩を書いてみれば、授業の参考になるかもしれないとも思った。こうして耕作は節子への詩を考え始めた。やはり、読んでみるのと書いてみるのとでは全然違った。書き上げた詩は生徒たちのような豊かさはなく、どこか説明臭く感じた。

石ころ
石ころが足元に一つあった
思わずしゃがんで拾っていた
手のひらの中で力強く握りしめる
石ころを遠くに飛ばした
ぼくの心も遠くに飛ばした
あの日のことをずっと忘れない

節子のことを思い出すとやはり幼い頃に石をぶつけてしまった、あの日の光景が目に浮かんでしまう。そして

「おれが嫁にもらってやる。」

と言った言葉も一緒に焼き付いている。しかし大人になるにつれて耕作にも世の中というものが分かってきた。耕作は百姓の家で節子は料

理屋の娘。そして耕作より一歳年上である。そこにはどうあがいても越えられない泥の壁があるのだ。好きと言う気持ちだけでは食ってはいけない。やり切れぬまま、耕作はもう一度自分の詩を読み返した。するとあろうことか今度は節子ではなく、福子が浮かんできた。福子は耕作が中学受験をすると決まった翌日に、持っているときっといいことがあると白い小石をくれたのだ。何度も返そうとしたが、白い小石はまだ耕作の腰の巾着に入っている。ふと取り出してみると、その白さは福子のほほのようで愛おしかった。だが福子は兄である拓一が好きな人だ。自分は、福子と拓一の間に入ってはいけない。そこにもやはり越えられない泥の壁があるのだ。

「おれは一体、何を書きたかったんだ？誰を想って書いたんだ…？」

考えれば考えるほど耕作はどろどろとした底なし沼に飲み込まれていくような気色がした。その時、祖母のキワの声が部屋に響く。

「ほうら、そろそろ寝んべな。」

耕作は詩を素早く折りたたむと、誰にも見られない場所を探した。悩んだ末に、白い小石と一緒に腰の巾着にしまい込んだ。ここなら絶対に安全だ。

こうして耕作と拓一は、互いにどのような詩を書いたのか知ることは無かった。そしてその想いは福子にも節子にも届くことはなく、それぞれの心の奥底へと沈殿していったのだった。

『泥流地帯』を読んで思うこと

林　文子

韓流ドラマだ、と思った。主人公の小さい頃から物語は始まり、年頃になると恋に悩む。そこに北海道の大地が雄大に、そして厳しくたちはだかる。寒さにも負けず生きるエネルギーを主人公らは大地から受け取るかのようだ。

親に売られた福子の言葉が悲しい。「ねぇ、耕ちゃん、わたしねえ、毎日いやな目にあってるのよ。こんな商売を長くつづけていたら、いつかきっと悪い病気にかかるんだって」「そしてね、体が腐って、頭もおかしくなって、死んで行くんだって」「ほんとうよ、耕ちゃん。でもね、わたし、体が腐っても、どこが腐っても、心だけは腐らせたくないの。心だけは…」このセリフのあと、「ご飯はたくさん食べてるの？」ときかれ、「食べてるわ。お魚だって、卵だって、元気のつくものはたくさん食べさせてくれるわ」と答える福子。ひもじくなくても、死にたい程のひどいことが世の中にはある。詩人、金子みすゞも夫から梅毒をうつされ、その当時医師にもかかれず、「朝ふきそうじをしただけで、(数日)ねこんだ」ということが母親への手紙でかかれたという。不治の病が、売春宿に蔓延していた。そこへ夫が行きみすゞにうつしたという。料理屋で売春を毎日させられていた福子。心のとてもきれいな娘で、そのきよらかさは、つらい目にあえばあう程そのやさしさが深まっていく。

主人公耕作の兄の拓一は、とても男らしく誠実な人物。弟思いで、中学に行かせてやろうとする。不誠実な人間を作者が描けば描くほど、対比される。女郎屋を営む父のことを娘の節子はこう言う。「父さんって、金のある人間にはぺこぺこして、金のない人を虫けらみたいに見るの」この深城という男が、主人公の一家とは正反対の人種としてかかれている。

時折、作者のかく、貧困の描写は、読んでいると辛くなってくる。しかし、あまりにまじめに生きる主人公一家に心ひかれ、最後まで読了した。

太陽を拝む主人公の祖母は、拓一が「太陽からばっちゃんが見えっか。」と笑うと、「見えんどもええ。真心は届くべ。誰にも見えん所でも、真心こめて生きるこった。」という。

人を啓発させる書だった。

人事を尽くして天命を待つ

（ペンネーム）　ＳＡＫＵ

人事を尽くして天命を待つ。意味は言えるが、納得できない。自分の経験がお粗末だから、後ろめたくなる。どこまでやると人事を尽くすと言えるのか。天命を待つに値する人事とは何か。お天道様は見ている。どこまで見ているのか。善悪の全て見通せるのか。全ての人間の持つ醜悪さに、染まらず倦まず、間合いを忘れず、忠を忘れず義を枉げず、生き方を貫く氷の純粋さはあるのか。果てのない問い。その問いに、生き方だけで答えた若者。泥流地帯連作の拓一様、その人である。拓一だけが成し遂げている。お天道様に背を向けず、呼びかけもせず、人事を尽くして天命を待つ。拓一ひとり天命を待てり。

火山の噴火が齎した未曽有の災害。死を死に切った土。生命の兆しすら見えない泥。拓一様は、田圃の再生に挑んだ。死んだ田圃であるから蘇生である。刺さる巨木を除き、沈む汚泥をさらう。人力人力人力。毎日毎日、土を信じ、死せる田圃に通う。苗など植えて根付くのか。まして穂保。挙句に収穫など。無限に繰り返される無償の行為。拓一様は労働を欠かすことはしない。娯楽をせず、蓄える。幼馴染の福子を身請けするために。どこにも責務はない。あるのは時間労力可能性のあらゆる費消。無尽蔵の無駄。コスパタイパは論外。拓一様は若者なのに。

人事とは、できることの繰り返しと積み重ねである。拓一様は語らずに動く。死んだ田圃を信じることに迷いがない。田圃の蘇生。できないと云う前提がない。生きているときの景色が鮮明だから。そこに近づけていく。福子の身請けも、できないと云う前提がない。一足飛びすら考えない。金が要る。途方もないほど要る。そこまで貯蓄することの不可能を考えない。僅かな蓄えを繰り返す。

人事には結果が付いてくる。実りがあるか否か。尽くされた人事は、否を否定せず受け容れる。実れば歓喜。否なら絶望。実りは奇跡。全ての結果を受け入れる、その向こう側に人事はある。拓一様には、実りの成否はどちらでも良い。達観でも諦観でもない。無心。結果を求めないのではない。結果がなじまない。実れば歓喜。否なら絶望。片方のみを切望する生き方がなじまない。自らの行いが、どう結果するのか。本当にどちらでも良い。天に捧げる行いと云うものは、芳しい泥臭さ、挙句の果ての人事なのだろうと思う。

残酷なまでの事実は存在する。やる前から結果が見え切っていること。思考停止する以前。経験の軽重を問わず、絶対的に無理無理、注ぐ人力は無駄無駄。拓一様が手掛けてしまったことは、人の手からは余りに遠い世界。死んだ田圃の再生。福子の身請け。家族を含め、周りからの言葉は、労いではなく、叫びであり祈りである。どうか諦めてくれ。巻き込まないでくれ。自分を大切にしてくれ。

拓一様はつぶやく。多数決に答えず、遠くの景色への澄み切ったつぶやき。

続・泥流地帯（新潮文庫版）二三一頁に、こうある。

「しかし、俺はね。自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということはね、これは大した宝かも知れんと思っている」

惚れるわ。拓一様。

「泥流地帯」を読んで

伊藤　裕司

まず、「泥流地帯」というタイトルにひかれました。泥流というと、大雨や洪水を連想しがちですが、十勝岳の噴火による山津波と知り、おどろきました。

物語の中で詳細に語られる、主人公の心情や成長といった心のドラマも、十勝岳の噴火という大きな自然災害の前には、小事にすぎないという印象さえ感じられました。

たしかに、日本は「地震・火山大国」です。先日も、御嶽山噴火から十年の式典をやっていましたが火山による災害は決して他人事ではありません。

たとえば、ここ十年で九州の火山活動が活発化しているといいます。二〇一五年の口永良部島の噴火の他、桜島や阿蘇山も噴火活動が高まっているらしい。

それに加え、八月におきた日向灘の地震です。幸い南海トラフ地震とはなりませんでしたが、九州の地震、火山の活発化は、巨大地震の予兆とも思われます。

とはいえ、前述した水害も忘れてはならないでしょう。八月に西日本をおそった台風をみれば、明白です。

私は気象に興味があり、色々調べていますが、私の予想では、この秋から冬、北海道で大雨災害の恐れがあります。

それは、この夏の猛烈な暑さがのこる大気に、北から寒気が急に南下し、低気圧が急速に発達するおそれがあるからです。

具体的には、十月の後半、日本海の低気圧が発達しながら、北海道西方に接近、暴風・大雨・高波となる。洪水は「泥流地帯」をもたらすおそれがあります。

「泥流地帯」というタイトルが暗示するものは重い。この作品は、今日の日本に対して重要なテーマを提示しているといえるのではないでしょうか。

試練が来るたびに

鵜ノ澤　暢子

三浦綾子さんの作品は高校生の時に「氷点」を読んだことがあります。カトリック系の女子高に通っていまして夏休みに読んで感想文を書くように言われたのです。まだ女子高生の私にはそれはただの不倫の物語に思えました。「先生はなぜまだ高校生の私たちに不倫の本を読ませたのだろう」と憤慨したのを覚えています。でも成人して再び読んでみるとそれがただの不倫の物語ではないことに気づきました。もっと深い話だったのです。

「泥流地帯」は「続泥流地帯」と合わせると千ページを超える大作です。私はこれらを二回ずつ読みました。文章に迫力があり退屈することなく夢中になって一気に読みました。

「泥流地帯」は上富良野に暮らす貧しいが善良な農家の家族石村家を描いた作品です。祖父母と姉の富、長男の拓一に次男の耕作、妹の良子の六人家族です。父の義平は冬山造材で木の下敷きになる事故で死に、母の佐江は髪結い修行のために家を出て札幌に暮らしています。対立して市街で売春宿を営む深城という男がいます。金持で有名ですが貧しい家の娘を買ってあこぎなことをしているのです。金貸しのようなこともしているらしいのです。深城に

は父とは性格のおよそ似ていない節子という美しい娘がいます。

石村家の人々は皆心根がよく善良な農家の人々ですが貧しい農家暮らしで母も家を出ていて幼い拓一も耕作も皆淋しい思いをして育ちます。

拓一は優しくて働き者、耕作はやはり善良で頭がいいのですが、貧しい暮らしのために成績が優秀なのに中学に進学することをためらっていました。それでも担任の菊川先生に中学進学をすすめられて祖父と兄に相談したところ「中学に行け」と言ってもらえます。

それで耕作は中学の試験を受けてトップで合格するのですが姉の富が結婚したいのにお金がなくて耕作の中学卒業まで結婚をしない決意なのを知って、姉のために泣く泣く中学進学をあきらめます。中学進学には結構なお金がかかるのです。勉学の才能があるのに残念なことです。耕作が中学進学をあきらめるシーンはかわいそうで胸が熱くなりました。

耕作は同級生の福子が気に入っています。おとなしくて優しい福子を魅力的に思っているのです。兄の拓一も福子のことが好きなようです。でもそんな福子は酒飲みでばくち打ちの父親の借金のカタに深城の売春宿深雪楼に売られてしまいます。福子も性格のいい女の子で何も悪いこともしていないのになぜそんな目にあわなければいけなかったのでしょう。それがこの小説のテーマでもあります。

真面目で善良な人間がなぜ苦難にあうのか、という疑問であります。

頭のいい耕作は代用教員になり、拓一も働き者の立派な青年になります。

しかしこのあと十勝岳の大爆発と言う大惨事が起こります。泥流が何もかもを飲み込んでいきました。高台に様子を見に行った耕作と拓一の目の前で祖父母と妹の良子が逃げ遅れて泥流に飲み込まれました。拓一は祖父母らを助けるために自ら泥流に飛び込みます。耕作に「母ちゃんに孝行せ」と言い残して。

母の佐江は間もなく上富良野に帰ってくる予定でした。

健気に生きてきた善良な人々が泥流に飲まれてたくさん死にました。火口場で働いていた姉の富も死に、祖父母も良子ものちに遺体で見つかりました。拓一は奇跡的に生きていました。あこぎな商売で稼いでる深城は死にませんでした。

どうして罪のない者が次々に試練にあうのでしょう。

母の佐江はキリスト教を信仰しています。三浦綾子さんもクリスチャンですからキリスト教の教えについても書かれています。

私は仏教徒ですが正しいことをしていても難は襲ってくると教わりました。その難がくるたびに信仰で乗り越えてより強い人間になっていくのだと。

拓一も耕作も困っている人がいれば助ける慈悲を持っています。仏教の教えも同じです。

キリスト教の教えにも仏教の教えにも共通しているところがたくさんあるとこの小説を読んで感じました。

私事ですが、現在末期の直腸がんで抗がん剤治療中です。先日腸閉塞になり緊急手術でストーマ(人工肛門)になりました。

私も自分が正しい者かどうかはわかりませんが真面目に信仰をしてきてなぜこんなにつらい目に合うのか、と最初は思いました。でもたくさんの試練を乗り越えることで人の痛みが分かり深い人間になれるのでは、と今では思っています。今は同じくがん闘病者を励ましたいです。仏教徒ですがキリスト教の教えに興味があります。敬虔なクリスチャンの友人も何人かいます。みんな愛情にあふれる素晴らしい人々です。「泥流地帯」を読んで彼らとお互いの信仰について宗教の垣根を超えて語り合い、理解し合いたいと思いました。

物語は最後まで書かれていませんが個人的には拓一と福子、耕作と節子が結婚出来たらいいのに、と思っています。

「泥流地帯」壮大で素晴らしい作品でした。三浦綾子さんの他の作品も読んでみたいと思いました。

兄弟の神話

菊池　健

映画評論家の淀川長治さんが、西部劇の生みの親ジョン・フォード監督の言葉「アメリカがどんな人間を持っていたかを知らしめるため、西部劇を作っているのだ」をある文章で引用していたのを覚えている。インタビューを極端に嫌ったジョン・フォードであり、典拠が何だったのかはっきりしないが、米国の映画配給会社の東京支社社員として、同監督の「駅馬車」の宣伝に活躍。本国では駄作とされたこの作品を日本から世界的な名作に押し上げたとして、評価される淀川さんだから、もしかしたら、直接、本人から聞き出した言葉かもしれない。

粗野ではあっても決して卑ではない生き方を貫く男たちを、西部劇では嫌と言うほど見せつけられる。男どもに大事にされる女性たちも、決してひ弱ではなく驚くほどの逞しさを見せてくれる。時代の制約はあったとしても、だ。

ジョン・フォードの凄みは、初期作品では敵役に過ぎなかったネイティブアメリカンを主人公に、その立場から見た西部劇「シャイアン」を撮って見せたところだろう。映画を単なるエンターテインメントとして終わらせなかったところに唸らされる。

明治以降の日本国内のフロンティアは、西部ならぬ蝦夷地、北海道だった。本土で没落した士族、食い詰めた農民が次々に入植して行く。洪水や台風の被害を被った農村から分村してのこともあった。長男が跡を継いだ農家からはみ出す次男三男が、独立を夢見てのこともあったろう。三浦綾子の「泥流地帯」は、福島県から入植した祖父母を始祖とする石村一族と、かれらが属する地域の物語である。

結末まで、この小説のタイトルの意味は不明のままだった。読み進めている間、身近に感じて来た登場人物たちの多くが、泥流の中に命を落とす。しかしながら、悲劇に終わる結末までの彼らの生き方を、もう一度読み直そうとする自分に気付く。

ジョン・フォードの言葉を借りるなら「日本がいかなる人間を持っていたかを示すための小説」が、北海道の大地を舞台に展開されたのだと思う。泥流の中から這い上がり、立ち上がるであろう石村一家の兄弟二人は、神話の中の神々のようだ。

「泥流地帯」は、この災害に溢れた列島においては、既に忘れられた草分けの先祖たちの苦闘を、生々しく想像させる物語ではないのかと思わせる。富良野を襲った泥流と同様に、火山災害、水害、地震が日本の国土に残した爪痕を私たちは見ることが出来る。しかし、中にはその上に営々と沃土を重ねて、災禍があったことを忘れさせるような場所もある。いや、そんな場所の方が多いだろう。

私たちは今、そうやって作られたはずの耕地が原野に戻って行く姿を眼にしている。少子高齢化は限界集落を生み、遂には廃村に至る。「国土の均衡ある発展」はただの掛け声となって、歴史の谷間に谺となって響くだけだ。そんな嘆きを書き付けていると、テレビのニュースは、スーパーマーケットの売り場から米が消えていると伝えている。

解説者は様々な原因を並べているが、作付面積を減らす減反政策を長年続けて来た結果、米の生産量が減少したことが最大の原因であることは、火を見るより明らかだろう

ロシアのウクライナ侵攻で世界の小麦価格が急騰した際、大騒ぎしたことをもう忘れているかの如きうろたえぶりだが、新米が出回りスーパーの棚が米で埋まれば、また嘘のように静かになるのだろう。

物語の半ば、主人公の石村兄弟は従弟たちと百姓の貧しさと金持ちの暮らしについて語り合う。これを聞いた叔父はそれが社会主義の考え方であり、国をひっくり返すものだと怒る。石村兄弟の弟、耕作は「国ってのは、叔父さん。土地があって、そこに人がいて、それだけだべ」と呟く。そして、言葉には出さないが、一つの土地に集まった人々がみんな幸せになることを目的とするのが国でなければならないと思うのだ。

兄弟の拠って立つ土地は沃土から荒地に戻ってしまった。作者は彼らの姓になんと象徴的な

名前を付けたことか。泥流で埋もれてしまった石の村、石村。そこから再び立ち上がる兄は拓一、そして弟は耕作。弟が耕すのは土ばかりではない。土地を引き継ぐ者たち、子供たちの心をも、小学校の代用教員として耕すのだ。

石村兄弟のような人々が、きっと私たちの身近にもいたはずなのだと思う。「私たちはかつてこんな人間を持っていた」と誇れる物語を文字で読みたいし、映像で観たいと思う。

生まれる前から知っている

高田　智子

自然災害には、自然の側から見えれば、人間の道徳とは無関係の、圧倒的な正しさがある。人間の都合を凌駕した自然本来の姿で、誤解を恐れず言えば、それは起こるべくして起こる「善」にすら見えてくる。（少なくとも、人災よりは「善」である。）三浦綾子の『泥流地帯』は、そのことを突き付けてくる。

本作は、農家を襲う天災という重いテーマを扱っているが、作者は最初、自身が体験したことではないとして、執筆に前向きではなかったという。私はこの作者の姿勢がとても信用できる。作家は、実体験しか書いてはいけないとは思わないが、未曽有の災害をテーマにする場合、やはり当事者性に如くものはないからだ。作者は、この難題を乗り越えた。災害を、安全な場所から眺めるような書き方をしていないのだ。かといって、登場人物の心情をベタベタと感傷的に書いて、同情を誘うようでもない。内面の描写は最小限にし、ただ起こったことを淡々と、どこか突き放したように記していく。その抑制的な筆致が、かえって災害の悲惨さを物語っている。

数年前、夫の郷里でもある広島で、土砂が畑に流れ込み、それを掻き出すボランティアに行った。泥はすでに干上がって固まり、大きな一枚岩のようになっており、スコップで小突いてもびくともしない。それを鍬などで引っ掻いてひび割れを作り、そこにスコップを差し込んで持ち上げていく。気の遠くなる作業だった。どんな慰めの言葉も励ましの言葉も上滑りしてしまう気がして、何か気の利いたことを言おうとすること自体が、小賢しいことに思えて、黙っている方がましだと思った。私はただ黙々と手を動かすことしかできなかった。荒れ狂う自然が、人間から言葉を奪ってしまったかのようだった。

私は本作を読むと、身体が反応してしまうので、体調のよい時しか読めない。ここで語られていることは、過去の記録ではなく、未来から差し込んでくる予言のようにも読める。あるいは、私が生まれる前から魂がこの災害を記憶していたのではないか、とも。自分が体験してもいないことを、分かる、というのはおこがましいことだが、たしかにこの光景を知っている。読者にそう思わせる時点で、作者は成功している。

『泥流地帯』を読むことは、災害への想像力で自分自身を育てることだ。

日常の幸せとは・・・

（ペンネーム）　津香砂

私の生まれた、北海道の中富良野は、三浦綾子さんの「泥流地帯」の近くで、上富良野村の災害も他人事ではなく、近年、地震や台風におびやかされる現実で、本を読んでいると、三浦さんの作品が色あせないシグナルを発しています。

貧しくても、助けあって生きている、心優しい農家の家族は、汗にまみれて、働いても働いても、生活が豊かになれず、現代社会の格差社会そのもののような気がしました。

父の借金のために女郎として売られた娘と、金持ちなのに、心が不安定な二人の娘の対比がとてもはがゆい気持ちにさせられました。

10年ぶりに、母に逢うことを楽しみにしていた妹や、人の為に30年間働き詰めの祖父母や、嫁家でこき使われていた姉を、一瞬で飲み込んだ泥流。日常のささやかな幸せを無駄に奪ってしまう災害には、本当に胸がしめつけられます。

作中、子供の詩が出てきて、私自身も旭川の3カ月しか行かなかった小学校の担任に毎日書かされた日々に、子供って詩の天才だなと今なら想えてきます。

明日は、必ずやってくる保証がない人生に、心豊かに、日々を後悔しないで生きなさいと綾子さんに言われている気がしました。周りの人達にも優しい気持ちで、接していきたい。あたり前の日常はないのだと痛感させられる本でした。

正義の心を持て

（ペンネーム）　新堂　慶奈

私たちは社会の中で生きている。社会というのは人間が生活している世界ということだ。皆その社会の中でよりよく生きていこうともがいている。『泥流地帯』は社会における人間関係の縮図である。

教師と生徒、家族、同級生、親戚など、社会のあらゆる人間関係がつまっている。主人公がまわりに嫌味を言われたり、差別をうけながらも負けずに生きていく所は勇気をもらえた。私も一人の社会人として仕事をしているが、勤め先の人間関係に悩むことが多々ある。他人の言動に傷ついて悩んでしまう。生きている限り悩みはつきものであるが、解決できないこともあるだろう。

人生において誰でもそうだろうと思うのだが、何げない一言が、言われた方の人間のしっかりとした傷になってしまっている。しかも、ずっと記憶に残っている。しかも、ずっと記憶に残っている。今でも忘れず残っていてたまに思い出してしまう。これは辛すぎることだ。

大切なのは、人の心を傷つけないように生きていくことだと思う。しかし、人を傷つけないで生きることは難しい。もし、傷つけてしまっても、その人が反省して気づいてくれたらありが

たい。そこに正義を感じる。そのあと、同じようなことを二度としないで欲しい。それが人間を幸福にすると思う。『泥流地帯』は改めて、考えさせられる素敵な本であった。

三浦綾子さんからの手紙

上田　真弓

私が『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んだのは22歳の時、会社に就職した年だ。若い頃に三浦綾子さんの小説に熱中し、その年、大学生４年生だった時に読んだ『天北原野』に深く感動したのだが、小説のテーマとその答えに疑問を持ち、三浦綾子さんに手紙を書いた。今では信じられないことだが、三浦綾子さんの本のいくつかには自宅の住所が書いてあったのだ。もちろんその当時でも自宅の住所を本に載せる作家などまずいなかったので、読者の声に真摯に答えようとする三浦綾子さんの姿勢に感銘を受けた。私はその住所に手紙を送ったのだ。そして三浦綾子さんから便箋三枚の丁寧な手紙が届き、そこに『泥流地帯』『続泥流地帯』にそのことを書いたので、ぜひ読んでくださいと書いてあったのだ。

私はずっと日記をつけているので、『天北原野』を読み終えた日の日記、三浦綾子さんから手紙が届いた日の日記、三浦綾子さんの手紙、『泥流地帯』『続泥流地帯』を読み終えた日の日記を、ここにそのまま書きたい。自分で書いたものだが、その時の感動が伝わってくる。しかし小説に感動しながらも、私が疑問に思った小説のテーマの解答に、私は納得がいかなったこともよく伝わってくる。それほど難しいテーマに三浦綾子さんは取り組んだのだ。

どこかに提出する感想文なら、疑問を書いて納得しないまま終わるような文にはしないだろうが、これは日記だ。正直な気持ちを書いている。すっきりしないまま書き終わっている。それがその時の私の正直な気持ちなのだ。

面識もない一読者である私に丁寧にお答えくださった三浦綾子さんからの手紙は、私の生涯の宝物だ。大事に日記帳に挟んで、たまに読み返している。

１９８２年1月14日

三浦綾子の『天北原野』を読み終わった。とても素晴らしかった。しかし、これはなかなか感想の書きづらい小説である。今、頭の中で整理しているが、どのあたりから書いたらよいか、よく分からない。でも、努力してみよう。

まず第一に、作者三浦綾子のストーリーの構成、展開のずば抜けた、驚くべき才能に驚愕した。よくこれほどの物語を思いつき、考え、まとめることができたものだ。これほど素晴らしいストーリー展開を持った小説は滅多にない。まるでシェイクスピアの作品のようにおもしろく、ひきつけて離さない。今までも三浦綾子さんの作品は『氷点』『ひつじが丘』『塩狩峠』などだいぶ読んできたが、これほどストーリーが変化に

富み、これほど多くの人物が登場するものはなかったように思う。貴乃を完治に奪われてしまった孝介が、十年後に立派になって再び現れ、完治の妹のあき子と結婚するあたりは『嵐が丘』そっくりなので、嬉しい反面少し残念であったが、その残念な気持ちなど、しばらくするうちに吹っ飛んでしまった。『嵐が丘』的な展開は『天北原野』の始まりであった。あき子がイワンの子、京三を生み、その後、孝介の子、澄男を生むが、孝介と貴乃の思いなどに悩み自殺・・などなど、ストーリーは目まぐるしく進んでゆく。僕が非常な注意を持って見ていたのは、母親そっくりの、貴乃の娘、弥江である。弥江が大きくなり、貴乃の生き写しの女性として、物語はどんどん進むであろうと期待していた。しかし、戦争というあまりにも人間を人間と思わない状況が、弥江を一瞬のうちに消してしまった。様々な出来事、喜怒哀楽すべての出来事・思いをのせて進んできた物語は、戦争という出来事によって、すべて悲しみのうちに幕を閉じることになってしまった。これは僕のまったく予期しない終結であったが、これ以上の最後を望めない、物語としては最高の終結のように思える。

　解説によると、三浦綾子は「善人がなぜ故なき苦難にあうのか。多くの人が持つこの疑問を、北国に生きたひとりの女性の、起伏の多い生涯の中で問い直してみたい」と述べたそうであるが、「善人がなぜ故なき苦難にあうのか」という

この言葉は、この小説のすべてを語っているように思う。もちろん作者が言ったことだから当然であるが・・。

　しかし読んでいて少し疑問に感じたのは、作者が完治を完全な悪人として描いていないことである。確かに憎むべき人物であるが、所々に人間らしい優しさ、人をひきつけるものを見せる。完全な悪人はいない、ということを言いたかったのであろうか。

　ところで、三浦綾子の小説は外国語に訳されているのだろうか？　必ず世界中、特にキリスト教を母体とした国の人達に愛読されるに違いない。あまりにも低姿勢な日本女性に少し抵抗を感じるかもしれないが、ストーリーのおもしろさ、人間関係、愛といった三浦綾子独特の魅力が、世界の人達の共感を呼ぶに違いない。ぜひ翻訳されてほしいものだ。また、読んでいて強く思ったのは、ぜひこの作品を一流の監督に映画化してほしいということである。しかし、今の日本の映画界では無理であろうという絶望感にとらわれて仕方ない。できてみてがっかりするのがおちである。黒澤明ほどの監督がいればいいのにと悔しい。人間関係、愛を巧みに描き、最後の戦争、船の沈没、悲しみを人々に強く訴えることのできる映画は、今の日本の映画界では無理であろう。黒澤明が今更このような映画を作りそうもないし、実に残念だ。

　ところで、先ほどの「善人がなぜ故なき苦難にあうのか」という問いに対して、この作品では

確たる解答が得られていないようである。貴乃の父、兼作が所々に登場しては作者の代弁者であるようなことを語るが、最後に貴乃にこう語る。「大昔ある国にな、信心深い金持ちがいたんだとよ。その金持ちはな、突然の災難で十人もの子供を、ある日一ぺんに死なせたってことだ。おまけに財産の家畜も、何千頭も一ぺんに死なせたってえことだ。その時、その信心深い金持ちは何て言ったと思う？『神与え、神取り去り給う。神の名はほむべきかな』ってな。ちっとも神を恨まんかったそうだ」

　作者三浦綾子としては、これを解答にしたかったのであろう。しかし、どうも説得力に欠けるようだ。兼作があまりストーリーに深く関係しなかったために、この言葉に重みが足りないのかもしれない。

　この言葉は旧約聖書のヨブ記のことである。さっそく調べたら、一章に出ていた。旧約聖書にはあまりなじみがないので『聖書物語』という本でヨブ記について調べると、次のようなことが書かれている。

　「ヨブ記では、正しいことをすれば、その報いでこの世でよい結果をうるという素朴で現世的な論理は、ヨブと友人との論争によって退けられている。ヨブは神を恐れ、神の命令にそむかぬ人間であった。しかも現世においてそれが報いられないどころか、かえって悲惨の限りともいうべき目にあう。最後に神が直接ヨブに語りかけ、人間の浅知恵で、正しいことのみを行

なったとする傲慢さの指摘が行われる。すなわち、正邪の判定は人間の能力をこえたものであって、その力は神にしかないことになる。ここでは絶対者に対して限りなく謙虚になることのみが信仰の道であることが説かれ、その時、人間は初めて神の業の大きさを知ることができる」

限りなく謙虚な人間として貴乃を描いたのであろう。しかし、あまりにも多くの問題を含むヨブ記である。確たる信仰があれば問題はないのかもしれないが、僕のようなクリスチャンと呼べるかどうかも分からない人間には、あまりにも問題が大きく、かつ多すぎる。

貴乃が孝介と結ばれず、完治に無理矢理犯され、仕方なく結婚したこと、あき子がイワンの子を生んだこと、そして自殺したこと、船がソ連の魚雷で沈没し、弥江、千代、澄男、サダが死んだのも、「神与え、神取り去り給う」なのであろうか。『天北原野』の主題からヨブ記の解釈、さらには旧約聖書・新約聖書の解釈、そして神、キリスト教へと問題は広がるばかりである。

三浦綾子の作品はいつもしっかりしたテーマに向かって突き進んでゆくが、この『天北原野』を読んで、疑問を抱かずにいられない。

この感想を書いているうちに、この小説の主題という大きな問題にぶつかった。これは三浦綾子さんに手紙を出して聞いてみよう。

最後に締めくくりとしてもう一度。実に素晴らしい小説であった。三浦綾子って素晴らしいなあ。

1982年2月1日

三浦綾子さんから手紙が来た！　うれしい！

朝（と言っても昼近く）、ソファの上で寝ていたら、お母さんが「手紙が来たよ」と言って持ってきた。お母さんが「みうら・・」と言って差出人の名を読むので、「えっ！　三浦綾子！」と言って飛び起きた。

14日に三浦綾子さんの『天北原野』を読み終わり、その日の日記にも書いたが、大変感動したにも関わらず、いくつか疑問を抱いてしまった。そして三浦綾子さんに手紙を書いたのである。その内容はだいたい次のようなことである。

「善人がなぜ故なき苦難にあうのか。多くの人が持つこの疑問を、北国に生きた一人の女性の起伏の多い生涯の中で問い直してみたい、ということでこの小説を書かれたそうですが、その解答として、貴乃の父、兼作の言葉があるのだと思います。つまり、ヨブ記を引用して、『神与え、神取り去り給う』。これが三浦綾子さんの言いたかった答えであり、この言葉にこの小説の主題があると思います。しかし、解説を書いている尾崎秀樹氏によると、『生きてるってことは結局は人を傷つけていることになる。人を一度も傷つけずに生きてる人間なんて、ありはしないからね』という孝介の言葉に主題がある、ということですが、これは少し違うと思います。もしそれが主題なら、とても恐ろしい小説になってしまったと思うのです。それともうひとつ、信仰の薄い私にとっては非常に難しい問題なのですが、ソ連の魚雷で船が沈没して、弥江・千代・澄男・サダたちが死んでしまったのも、神の意思によるものなのでしょうか。私にはとても分かりません。教会からも少しずつ離れ、信仰を失いつつある私です。どうかアドバイスを下さい」

というようなことを書いたのである。もちろん小説にえらく感動したこと、いつも三浦綾子さんの活躍を祈っていること、大変に共感していることなども書いた。そしてきょう来た返事には次のように書かれていた。

お手紙ありがとうございました。

『天北原野』に大そう感動して下さいました由、こちらこそうれしく感謝でございます。お読み下さる方の真のお幸せを祈り上げつつ日夜頑張っております。今後ともよろしくご愛読くださいませ。

『天北原野』についてのご質問もありがとうございます。実は、初めは私の実の母を書きたかったのですが、それはやめて、あのような小説を書きました。貴乃という一人の女性を描い

て、苦難に満ちた人生を描いてみたかったわけです。ですから、あなたの受け取り方は、まちがっておりません。

尾崎秀樹先生は、苦難を人間の傷つけ合う姿に見て、あのように解説下さったのでしょう。人を傷つける人間、傷つけまいとしても傷つけてしまう人間、そうした人間観を先生は鋭く抱かれたのかもしれません。

人を傷つけるところに様々な人間苦が生じるわけですから・・。あなたは兼作の言葉を土台に苦難への対応を、尾崎先生は原因を見られていると言えるように思います。

あなたの言われる苦難、特にヨブに類する苦難については『泥流地帯』『続泥流地帯』でより明確に的を絞って書いてみました。是非ご一読下さい。

この世には不可解な苦難がたくさんあります。すべて神の仕打ちとは言えませんが、人間の思いを越えた神の統治を信じたいと思います。

とにかく教会生活、信仰生活をどうかどうかお続け下さい。特に教会を続けることは大切です。

あなたの上にいよいよ神の御祝福が豊かにありますよう祈り上げつつ、簡単ですが一言ご返事まで。ただ今体が不調のため、このご返事の筆記は秘書に頼ってしまいました。悪しからずお許し下さいませ。

終わりに心をこめてサインをいたします。

一九八二、一、二六

三浦綾子

上田真弓様

1982年5月30日

16日から読んでいた三浦綾子の『泥流地帯』を読み終えた。二週間もかかってしまった。平日は仕事で疲れて、とても読む気が起こらない。というか、読んでもあまり身に入らないようなので、読まないことにしている。それに仕事から帰ってきてから寝るまでの時間が限られていて、やることがたくさんあるからとても読めない。というわけで、読書はもっぱら土曜と日曜だけ。喫茶店に行ったり、寮の談話室に行ったり、なるべく気が散らない所で読む。

さてこの『泥流地帯』であるが、以前『天北原野』を読んでひどく感動すると共に大きな疑問を抱いたので、作者の三浦綾子さんに手紙を書いた。正しい人間がなぜ苦しまなければいけないのか？という疑問である。『天北原野』はこのテーマに沿って書かれていたが、どうもその解答が曖昧であった。ヨブの苦難を出し、その苦しみにより自分が高められ、神の愛を更に深く知ることができる、ということを言っているようであった。なるほど、これは一つの解答である。しかし、そうすると、もう一つ大きな疑問が生じる。多くの親しい者に死なれ苦しむ人間は、その苦難によって更に成長するかもしれない。しかし、死んだ人間はどうなるというのだ。報われないではないか。「人間の思いを越えた神の統治を信じたい」と三浦綾子さんは書いてきて下さったが、どうも納得がいかない。「その主題について『泥流地帯』『続泥流地帯』に書いてみましたので、ぜひご一読下さい」と書いてきて下さった。というわけでこの『泥流地帯』を読んだのである。しかし疑問は深まるばかりである。確かに最後にその解答らしき言葉はある。

「なあ兄ちゃん。まじめに生きている者が、どうしてひどい目にあって死ぬんだべな。こんなむごたらしい死に方をするなんて・・。まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ。じっちゃんだって、ばっちゃんだって、おれとおんなじ気持ちだべ。恐らく馬鹿臭いとは思わんべ。生れ変わったら、遊んで暮らそうとか、生ま狡く暮らそうなどとは思わんべな」

という兄弟の会話が最後にあるが、どうも僕の求めている解答とは違うようだ。非常に難しい問題であるが、これだ！という解答がほしい。

さて、この小説のストーリー展開であるが、途中までは非常におもしろかったと思う。しかし、肝心の十勝岳噴火による泥流でストーリーが一変してからが、どうも物足りない。あまりにも速くてあっけない。もっと突っ込んで耕作

の苦悩を描いてほしかった。更に、
1、お母さんの存在が薄かった。母のいない耕作たちの淋しさをもっと描いてほしかった。
2、福子の苦悩・辛さ・淋しさをもっと描いてほしかった。
3、節子という女性がよく分からない。金持ちの裕福な子ではあるが、明るく、性格の良い女の子として描いていたと思っていたが、家出して東京に行ったり、久しぶりに会った耕作に「生きていたの？」と言って笑い、くるりと背を向けて駆けて行った節子の心境がよく分からない。分かるようで分からない。非常に興味をひかれる存在であっただけに、もっとうまく突っ込んで描いてほしかった。
などの問題点があるが、しかし、なかなかおもしろくて良い小説であったと思う。
どうも後半があまりにも速く進んでしまったので『続泥流地帯』に期待したいものだ。それにしても、あの大きな疑問が尾を引く。なぜ正しい人が苦しむのか？ 死んだ人たちがあまりにもかわいそうではないか。この中に神の愛を見つけるというのは、今の僕にはできそうにない。
それにしても、読書の時間をもっとほしいものだ。社会人はつらいなあ～。

1982年8月31日

22日から読んでいた三浦綾子の『続泥流地帯』を読み終わった。5月30日に『泥流地帯』を読み終わったが、続編を読み始めるのに三か月も経ってしまった。この続編は書かれるべくして書かれたものである。正編の方があまりにも中途半端な終わり方だったので、当然続くべくして書かれたものと言える。読んでいて確かにおもしろくはあったが、これといった盛り上がりもなく、あまり満足感は得られなかった。
何と言っても問題となるのはこの小説の主題であり、「正しい人がなぜ苦しむのか？」ということである。以前『天北原野』を読んでこのことを深く考え、三浦綾子さんに手紙を書き、便箋に三枚もの返事をもらった。その中で、ぜひ『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで下さいと言っておられたので読むことにしたのであるが、やはり疑問は残る。つまり、自分の親兄弟や親しい人が死んで、本人が大いに苦しみ、やがてそれが大きな力となって力強く生きるというのは分かる。しかし、死んでしまった人達はどうなるというのか。まるで報われないではないか。
その解答を求めて『泥流地帯』を読んだのであるが、納得がいかず、この続編に大いに期待をかけたのだが、やはり納得がいかない。確かに最後にヨブの苦難の話を持ってきて、その解答を試みているようにも思えるのだが、どうも納得しない。神は愛なり、という言葉を出しているが、どうも説得力に欠ける。ヨブの物語にしたって、実のところ合点がいかない。ヨブはあれほどの苦難にあいながらも神をほめたたえた。それはそれで非常に立派だと思う。しかし、死んだ子供たちはどうなるというのだ。大きな疑問は残るが、とにかく、有意義な小説であったと思う。

若かりし頃の『泥流地帯』

（ペンネーム）　みうまる

高校二年の冬、友人と雪道を並んで歩きながら進路について話をしていた。

「まあ、とりあえず学校が勧める専門学校でも受験してみようと思う」

友人の言葉に一瞬、言葉を返すことができなかった。

同じ幼稚園に通い、小学校、中学校とほぼ毎日一緒に通った友だった。小学生だった時は、ランドセルを背負い並んで歩きながら、漫画家や宇宙飛行士、プロのスポーツ選手や発明家になりたいといったことを子どもらしい無邪気さで語りあったものだった。高校生になってからは別々の学校に通っていた。お互い「巨大ロボをつくる」といった夢を堂々と語れるほど幼くはなかった。

交差点で別れてからも、『学校が勧める専門学校』の一言が頭からはなれなかった。流れてしまった時を痛感させられた。あんなにも将来の夢を語りあったあの日から、いつの間に、なぜ、こんなに遠ざかってしまったのだろう。見るものすべてが輝いてみえた幼い頃とは違うのか。ギュッ、ギュッと雪を踏みしめる足元を見ながら家路についた。

それからダラダラと過ごす日が続いた。何をやっても手につかない。

「最近ため息ばかりついてるね」

心配そうな顔をして母が笑いかけてくる。

夢や目標をもち、それを実現するため努力すればよい。後で後悔しないよう、悔しければ、今、がんばればよい。確かに、そうだ。「だが……」とつぶやく自分がいる。がんばってもできないことだってあるだろう。社会には理不尽な部分があり、そういうものなのだと納得させながら生きていくことが暗黙の了解のように存在してはいないか。高校生になると心も体も大人に近づき、それまで見えなかったものが見えてくる。

「世の中は、そういうものなのだろうか」

立ち止まり、動けなくなってしまった。そんな様子をみていたのだろう。

「これでも読んでみないか？」

父が一冊の本をテーブルに置いた。作家は三浦綾子、本の名は『泥流地帯』。

大正時代の北海道。富良野町からさらに北に進んだ十勝山脈の麓の村が舞台だ。小作農として田畑を耕し生きる兄、拓一と弟の耕作。貧しいながらも、支え合いながら生きる二人に数々の試練が襲いかかる。十勝岳が突然の大噴火をおこし、泥流が土地、家族、思い出をすべて押し流していく。拓一は目の前を流されていく家族を助けるため泥流に飛び込む。泥土に埋もれた大地をもう一度、稲の実る田畑にしようと鍬をふるう拓一。

「僕は命をかけて復興する……」

復興反対者の集会で堂々と意見を述べる拓一の勇気と真実な生き方に胸を打たれた。

変化の激しい世の中ではあるが、自分に嘘をつかず真っすぐ生きればよいではないか。

一歩、踏み出せた。

その後、高校を卒業してからも、失恋や、受験、就職の失敗、愛する家族との惜別、様々な困難や挫折に直面してきたが、その度に、私を支え続けてきたのが、苦難を乗り越え、何度でも立ち上がる拓一の姿だ。

紆余曲折あったが、四十も半ばを過ぎた現在、高等学校で勤めている。

「おすすめの本はなんですか？」

と生徒に聞かれることがある。私はその時、三浦綾子の『泥流地帯』を薦めている。

理想と現実の狭間で思い悩むことがあっても、自分を信じることを忘れないでほしい。

まっすぐ生きることは素敵なのだ、ということにふれてほしい。

『泥流地帯』では、ひそかに思いを寄せていた幼馴染が女郎に売られてしまい、その悲しみを胸に拓一が角力の土俵にあがる場面がある。そんな兄に弟が拳を固く握りしめ叫ぶ。

「兄ちゃん、負けるな！」

耕作の言葉はいつまでも心に響いている。

佐枝を通じて見えるもの

（ペンネーム）　玖枝美奈登

吉田兼好の『徒然草』第五二段は「仁和寺にある法師」として、教科書に載るほど有名な段である。仁和寺の老僧が長年、石清水八幡宮に行きたいと思い続けて、ついに決心して一人、徒歩でお参りに向かった。麓にある極楽寺や高良神社を石清水八幡宮と勘違いして、参拝したつもりで帰って来てしまった、という話である。兼好は、少しのことであっても「先達」つまり「案内者やみちびき」が欲しいものだと結論づけている。

三浦綾子の文学は、ハードルが高いものであった。『氷点』は、テレビだと思うが、映像作品を見た。ソープオペラ的で、苦手だと感じた。映像から原作を手に取る行動は、よくあったのだが、ついに『氷点』を買いに書店へ行くことはなかった。何かの活字には、原罪がテーマと書いてあった。原罪を感じられなかった。葬式仏教が唯一の宗教との接点であった私には、それで何も困らないから、放って置いて今に至る。

仁和寺の法師は、高齢にもかかわらず、歩いて石清水八幡宮に参詣した。正しくは、したつもりになった。吉田兼好は、先達が必要だったと書いている。そうだろうか。仁和寺の僧が参拝したつもりで「貴くこそおはしけれ」（まことに貴くございました）と思っていて、何がいけないのだろう。念願を果たし、参拝が第一だから余所見をしなかったと言う老人に、真実を告げて、論う必要があるのだろうか。

世の中の全ての物事は、その場にいる全員がそれを凝視していたとしても、全員が同じ受け取り方をすることはない。恐らく「死ぬまでに一度は、朝廷からも武家からも厚く信仰される石清水八幡宮を拝みたい」と意気込んで、あえて単独行を選択した高齢の僧には一人だからこそ、徒歩だからこそ、見えた、感じられた石清水があったはずだ。それ以上でも、それ以下でもない。それがその人の全てなのだ。

ただ、自分は仁和寺の法師にはなりたくない。三浦文学を読んで、迂闊に感想を述べると、キリスト者の方々にどう思われるだろうかと先走って考えてしまう。自分の読みの浅薄さを自覚しているので、恐いのである。

そんな中で『泥流地帯』『続泥流地帯』を読むことにしたのは、映画化の動きを知ったからだ。

面白かった。止まらなかった。翌日の仕事がなかったら、徹夜で読んでいたと思う。二冊同時に購入して正解であった。今まで敬遠していた自分にありとあらゆる罵詈雑言を浴びせてやりたかった。

最も気になった登場人物は佐枝である。拓一、耕作らの母で、若くして夫を事故で失い、子らのため働くが、周囲の諸事情で思い通りにならず、子供を義父母に託し、髪結の修業で十一年不在となる。美人で、慎ましい女性なので、悪の化身のような深城までが惚れてしまう佐枝だからではない。好きとか、魅力的とか言うのではなく、何だか気になる人なのである。

耕作は、母佐枝にある種の違和感というような感情を抱く。母なのに、帰りを待ち焦がれていたのに、「どうしても馴じめない。」佐枝は「爆発当時の泥流の様子など、聞こうともしない」し、「十一年間の自分の生活を語って聞かせるわけでもない。」その上、「話が死んだ者たちに及ぶと、佐枝はいつのまにか用事ありげにどこかに立ってしまう。」泣き叫んだり、不運を嘆いたりしてくれれば、十一年の溝は埋まったであろう。聞くのが辛いからと避けている母親は、子供に一体感を与えない。耕作が「よそよそしく思われる」と感じるのも無理はない。

ある夜、耕作はこれと違う母を目にした。

佐枝は声を立てずに泣いていた。が、前かけで涙をぬぐうと佐枝は手を組んで、頭を垂れた。かすかに口が動いている。祈っているのだ。祈りながらも、その頬を涙がこぼれ落ちる。

（『続・泥流地帯』「同志」）

耕作は佐枝が「いつも、一人涙にむせんでいたのではないか。」と考え、「母さんはこういう人だったのだ」と母を理解する。それで「母の祈る横顔を、実にやさしい」と思い、「清らかだ」と

さえ思う。人前で取り乱して泣かないように座を外していたのだと納得する。私もこれで佐枝をわかった気がした。佐枝は、亡くなった人々の鎮魂を行い、耕作や拓一たち遺された家族が何不自由なく暮らせるように願っていると思った。

が、私自身は仁和寺の僧にはなりたくない。『氷点』に原罪を見られなかった私は、『聖書』を手にした。紙は薄いのに、本は部厚くて怯んだ。世界一のベストセラーは重い。とりあえず『続泥流地帯』で佐枝が耕作に読むよう促した「ヨブ記」を読んでみた。『泥流地帯』と『続泥流地帯』との礎石ともいうべきものに遭遇した。

思いも寄らない不幸に襲われながらも生き長らえた時、「日頃の行いが良かったから生還できた」等とその人を誉めるつもりで言うことがある。これは逆に考えると、その不幸で亡くなった人は、悪事を働いていたということになる。すなわち、悪因悪果、善因善果が染み着いている。その言の通りであろうか。とんでもなく素行のよろしくない人が生存していることもあるし、誰からも好かれるような人が逝ってしまわれることもある。

ヨブは誰もが認める高潔な人で、主の信頼もあった。そのヨブは財産や家族を全て失っても「神に向かって愚かなことを言わなかった。」（「ヨブ記」二・二二）その後、ヨブ自身も身体中に腫物ができ、非常に苦しみ、周囲の人々もヨブに話しかけるのを躊躇するほどであった。善因善果が完全に否定されている。そもそもヨブがこのような目に遭うのは、主とサタンの対話が発端である。主はサタンに「ヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にいないことを気づいたか」（「ヨブ記」一・八）と言い、サタンはそれを認めない。それで主はサタンに、ヨブの「身に手をつけてはならない」と条件をつけてヨブをサタンの手にまかせ、全財産がなくなる。二回目は主がヨブの「命を助けよ」と条件をつけて、サタンの挑戦を受ける。

発端が主とサタンの会話であるから、因果応報ではない。では、なぜに、ここまでヨブを苦しめるのか、と出来の悪い私は考える。ヨブは「われわれは神から幸をうけるのだから、災をも、うけるべきではないか」（「ヨブ記」二・一〇）と言う。最終的には、主によってヨブの財産は二倍になり、百四十年生きながらえる。

皆がいい人と言う拓一は、泥流に飛び込んでも生き残るが、弟を助けようとして足にハンディキャップを負う。福子を好きだが、ままならない。目の前の不幸、幸福はその人の罪のある、なしとは関係なく、神の意図だということらしい。私の単純な頭には難し過ぎて、なんとなくわかったような気がするだけである。佐枝は、ただ「神は愛なり」と信じられる。

次は、柳宗悦が「あの夥しい経巻」と表現した福音書を読んでみることにした。本当のところは「ヨブ記」が『旧約聖書』だったので、今度は『新約聖書』を最初だけでも読んでみようというつもりだった。

次のように書いてあった。

また祈る時には、偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。また、祈る場合、異邦人のようにくどくど祈るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている。だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父となる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。

（「マタイによる福音書」六・六―八）

『聖書』を読む前は、佐枝が自分の気持ちから一人泣き、孤独に祈る、賢明な女性であると了解していた。読後、佐枝は本当に敬虔なクリスチャンとして、「マタイによる福音書」にあるよう、人に見られず、夜、一人で教えの通りに祈っていたと得心した。私のように亡くなった人々が向こうで幸福でありますようにとか、今後、泥流の被害者が不自由なく生活できますようにとか、「くどくど」と願うのは神を信頼していない証拠であった。佐枝が口数少なく、祈る態度は神に帰依する姿であった。佐枝の印象が変わった。

三浦文学の「先達」としての『聖書』の存在を、自宅に仏壇のある私は知ってしまった。世界は変わる。

こう考えると、仁和寺にある法師は、やはり、「先達」と共に、もう一度、石清水八幡宮をお参りした方がよい。「つもり」ではなく、本物から感受するものがある。きっとそれで、世界の見え方に変化がある。多分、世界が広くなる。老い先が長かろうが、短かろうが、ヨブのように自分自身の力で何かが進んでいく。

私にとっては、今回、『聖書』という先達だけでなく、三浦綾子の文学という先達も得られた。もうすぐ『泥流地帯』という映画の先達にも邂逅できる。それまでにもっと三浦文学を読んでおくつもりだ。

〈参考文献〉
三浦綾子『泥流地帯』新潮文庫　二〇二二年
三浦綾子『続　泥流地帯』新潮文庫　二〇一八年
吉田兼好『徒然草』川瀬一馬校注、現代語訳講談社文庫　一九七一年
『聖書　口語訳』日本聖書協会　一九九六年

泥流地帯、続泥流地帯を再び手にして

（ペンネーム）　北　鶴子

泥流地帯は、確か、昔一度読んでいたはずだが、改めて読んでみた。

すぐさま、引き込まれるように夢中で読んだ。

第一の感想は、昭和57年に発行された本なのに、十勝岳爆発に伴う泥流の発生という未曾有の自然災害や、娘を売り飛ばすほどの赤貧の暮らしの中、歯を食いしばるようにして暮らす人々の力強く生きる様子が、まるで、息づかいが聞こえるかのように、瑞々しく描かれていることだ。

私の父母は、既に鬼籍に入っているが、二人から語られた、馬とともに切り倒した丸太を引くなどの父の冬山造材の話しや、私が、幼い頃、親が使っているのを見た唐竿などの農機具を始め、蛸足直播器による稲籾の直蒔きなどの農村風景、言葉や生活習慣などが、この本の随所に出てきて、湧き出す懐かしい思いをかみしめる。

それらの農機具を父母が使い農作業をしていた側で遊んでいる小さな私や、手伝う兄姉ら家族が、なんとも言えない空気感とともに、いろいろなことが思い出された。

秋の温かい日射しの中での米の収穫作業など、貧しいが、一生懸命働いている家族と一緒に居るだけで、嬉しくなっていたあれらの日々。

記憶がよみがえり、何度も、読むのが止まってしまった。

温かな日だまりの中に漂う草の匂いまでが蘇り、全てが愛おしい。

綾子さんは、1922年生まれで、私とは27才の年令の差があり、親子ほど差があるにもかかわらず、泥流地帯には、貧しさといい、自分の記憶にある農機具などの名前が次から次へと出てきたり、まるで、同時代を生きてきたと言っていいほど、懐かしい生活が書かれているのだ。一瞬、小説であることを忘れてしまう。

私は、その昔、原野と呼ばれていた時期もあった道北の山間の地に生まれ、現在75才。

父母は、結婚して、すぐ、まだ開拓の鍬の入っていない原生林の生い茂る原野に入植し、大木を切り倒し、その根を掘り起こし、小さな畑を作って、ジャガイモなどの作物を育て、こつこつと徐々に耕地を広げ、寒い北の大地では、憧れの稲作栽培までもするに至った。

どんなにか、嬉しかったろう。

しかし、毎年のように襲ってくる冷害に苦しみながらも、必死で働き、私たち兄弟姉妹を育ててくれた。

泥流地帯を読み進めるうちに、教師をしていた綾子さんや、菊地先生、耕作、拓一達が側にいて、小さな自分もまるで隣に住む家族の一員のような感じがした。

この物語の日常生活の中で起きることを、私までも、一緒になって、その場で、息を詰めて見つめている感じに襲われるのだ。

そんなはずはないことはわかっているのだが・・・

一回りほども年の離れた姉が、「あんたは、いつも、部屋の隅で、小さくなって、じっと、見ていた。」と語る。労働もきつく、貧乏で、忙しさのあまり、父母が激しくいい諍うのを、私は、なすすべもなく、震えるように見守っていたのかも知れないと、今になって思う。

それでも、私たち、兄弟姉妹は、無事に何とか育てて貰い、今はもう、感謝の言葉も届かないけれど、ただただ、父母に「ありがとう」と心の中だけでもいいので、いつまでも思っていたい。

こんなに農村の風景を見事に描写する三浦さんは、どんな生まれで、どんな育ちなのだろうか。

インターネットで調べてみると綾子さんは、旭川に生まれ、お父さんは、地元の新聞社で働いていたようだ。町で育った方なのに、当時の農村風景や子供達を含め、そこに生きていた人々を、何で、こんなに生き生きと書くことができているのか。

あの頃のことを、共有できる人がいたという嬉しい感情とともに、町で育った人が何故こんなにもわかってくれるのかと驚きも沸き上がる。

綾子さんは、教師として必死に働き、貧しさの中で懸命に生きる子供達を理解しようとして、一人一人の子供とともにその家庭状況、地域社会を温かな目で観察し、地域社会の仕組みもしっかりと考えられておられたのだろう。

凄い観察眼と、愛情に満ちた温かな眼差しに感動する。

第二の感想は、物語には、拓一を始め、徹底した善人がでてくることだ。

家族のみならず、周りの人の幸せを第一に考える拓一のような人間が、本当に、存在するかのように書いている。

拓一のように素晴らしい人が、実際の世の中にはいるのか。

小説だからかなぁ。

それに比べて、まるで自分が恥ずかしい。

多分、三浦さんの周りには、拓一のような人がいたのではないかだろうか。

自分とのあまりにもの違いに、言葉を失い、落ち込んでしまう。 確かに、私も、今も昔も、そのような立派な人になるように、努力はしてきたが、年を重ねて、ますます遠ざかっている。

拓一の背中も見えない。

友達に聞いてみた。

「拓一のような人って、本当にいるのかな？」

私の真剣な問いに、友は、しばらく考えていった。

アフガニスタンで、結核やハンセン病にかかった貧しい人々の治療や、干ばつで砂漠とかした大地にたくさんの井戸を掘ったり、灌漑事業をして、穀物の実る田畑を蘇らせたが、凶弾に打たれて亡くなった「中村哲さんは？」

最初は、そんな滅私奉公の人に、私は、全く心当たりがなかったのだが、そうだ「中村哲」その人だと思った。

やはり実在するんだ。

私にとっては、あらためて気づかされた衝撃の事実だ。

拓一は、幼い頃、厩の門を閉めるのを忘れて叱られていた耕作を、即座にかばったり、激流となって流れる泥流に、祖父母と妹を助けるために、身を投じた。

泥流に身を投じた拓一の行動は、究極の危険が迫り、本能的な利他行為のスイッチが入っての行動なのか。

難しいことは、私には、わからない。

家族や他人に迫る危機に際して、一瞬とはいえども、やはり、いろいろなことを考え、逡巡はしても、助けたいという想いが勝ったのだろうと思いたい。

本能のなせる技と思ったが、よくよく考えてみると、厩の門の件で耕作を庇ったのも、とっさと言えばとっさの行動であるが、とっさという短い時間の間に、やはり、どう行動するか考えたように思え、人の行動という意味では、とっさの行動を本能的な行動とは、一概に、片付けられないようにも思う。

とても優しさに満ちた人間的行動だったのではないか。

そして、福子を好きな拓一は、もしかして、耕作も福子を、好きかも知れないと思いながら、耕作に意地悪などせず、自分は一歩引いている。あまりの奥ゆかしさに、綾子さんは、拓一を良く書きすぎているかも知れないとも思った。

最後に、拓一と福子は、多分結ばれることを示唆した終わり方になっているので、少しは、救われるのだが。

拓一のように、常に人のことを考えて生きている、とても、凄い人がこの世には、やはり存在するのか。

たいていの人は、このような人物を凄いと尊敬し、少しは近づきたいと思いっている。私も、近づこうとはしているのだが、未だに、少しも近づけていないと自覚し、落ち込んでしまう。

綾子さんは、クリスチャンで、物語の底流には、信仰があるのかなとも思うが、それを抜きにしても、困難に打ち勝ち、他の人のことも思いやる力を人間は持っているのだし、今は、その力はなくとも、一人一人が、自分の中に育てていけるのだと、私は思う。

困難に出会うと、へこたれ、泣き言を言う私であり、信心深くもないが、なるべく人に迷惑を掛けずに、困難にめげても、何とか、少しずつ人を思いやる力を、自分の中に育てつつ、歩いて行きたい。

感想の第三は、大正15年（1926年）の十勝岳の泥流の被害のすざまじさとそれに立ち向かった人々の凄さである。

三浦さんは、被害に遭った町の町史などを読んだり、いろいろな人から、この大災害のことを聞き取ったり、調べた上で執筆していると思われ、臨場感がすごいし、立ち向かった人々のすざまじい苦労と、復旧・復興への執念が浮かび上がっている。

現在の十勝岳は、時々、小噴火を繰り返しながらも、今は、静かな美しい山である。

昭和63～平成元年（1988～89 年）にも噴火したが、この時は、私の住んでいる旭川にも火山灰がわずかであるが、降り積もったのを、鮮明に覚えている。

大正15年の噴火は、昭和の噴火に比べると、本当に比べるべくもなく強烈で、望岳台付近は、泥流が厚く覆い、約100年も経っているのに、未だに他の地に比べ、あまり木や草が大きく茂っていないことでも、当時の噴火や泥流の筆舌に尽くしがたい大災害を、少しだけだが想像できる。

地域の人々の長い間の奮闘もあり、昭和の時代になると、大正の大噴火の泥流の後に、美しい白樺林ができていたり、赤い地肌をさらした異様な感じの望岳台なども、景色を眺める観光地として足を踏み入れることのできる場所になった。

大正15年の噴火は、上富良野町と美瑛町合わせて144名の死者・行方不明者があったと記録に残るが、上富良野百年史によると、「泥流が村に到達するまでの時間は、25分（『十勝岳爆発災害志』）とも27分ともいわれ、火口から25キロ離れた上富良野まで秒速15～17メートルという驚異的なスピードで到達したことになる。」と書かれている。

100メートルを10秒で走るスプリンターであっても、秒速は10メートルで、泥流の流れる速さには、やはり、とてもかなわない。

信じられないスピードだったのだ。

しかも、石や泥がたくさんある道だ。

重い重量のある泥流には、二酸化硫黄などの酸性物質が含まれており、田畑には、たくさんの流木が埋め込まれた上に、かちかちにしめ固まった不毛の地となってしまった。

泥流が流れて、到底、再び、稲の育つ田などにすることができないと思われた土地を、拓一達が、稲などが、再び育つように再生したのだ。

人間って凄い。

もしかして、稲が実るようにならなくても、「やるだけやる。」と挑戦するという気概が、今を生きる私達の心を熱く打つ。

祖父母や父母、その地に入植した人々が苦労して開拓した地を、再び元に戻すということに加えて、拓一達は、後世の人もが稲を育て米を収穫できたら、後々までもすばらしいことになると、将来にも目を向けているのだ。

視線の先が、現在だけでなく、未来へも向けられている。

私の父は、次男だったため、結婚したての母と共に、原生林を開拓した。開墾時の細かなことは、聞いていないが、泥流こそ無かったものの、拓一達と同じ様に、筆舌に尽くしがたい、苦労

をしたのだろうと思う。
人って、なんか想像できないくらい強くなれるのだなと思う。 私たち兄弟姉妹を育ててくれた父母が、原野を開拓し、田畑を開墾し、苦労を生き抜いた人であったことを、誇りに思うし、小さな頃に見聞きしたいろいろなことを、この機会に思い出すことができ、嬉しく、豊かな気持ちにもなった。
そんな意味でも泥流地帯を書いた綾子さんに感謝である。

第四の感想は、女性を巡る問題だ。
まず、佐枝は夫が亡くなり、その後、深城に言い寄られたり、ありもしない義父との仲を言い立てられたりした後、美容師の資格を取るために、 札幌に行った。佐枝は、身体も丈夫ではないので、札幌に行き美容師の資格を取るという選択は、良かったと思う。しかし、お金がないとは言え、拓一を含め、幼い3人の子供を上富良野に残し、小説では、一度も家に帰っていないと書かれていることだ。お金がないことはわかるし、人に世話になっている身であることもわかる。しかし、あまりにも、子供達に対するほとばしるような愛情がなかったように感じられる。お金がなくともなんとかして、せめて1年に一度くらい、それが難しければ、2、3年に一度でも、お正月などには、家に帰るべきだったのではないか。病弱であることを差し引いても、佐枝には、子供達に対する沸き上がるような愛情が感じられない。

小さな町の噂におびえ、跳ね返すことができない最悪の状況だ。 大人の世界でも、ちょっとした出来事が、悪意のある人に絡め取られて、いじめとなってしまうことは、今もある。
この場合は、義父母の力強い助けもあり、家族全員で、お互いを思いやり、足りないところを補い合って、知恵とがんばりでそれを乗り越えていったことには、心底ほっとする。
義父母も妹の良子も泥流で亡くなってしまったが、最終的には、幸せになりそうな家族の姿に、ほっとする。
もうひとつは、深城の娘、節子の天晴れな生き方だ。
まずは、あくどい父親の元から逃れ、助産師を目指す。
さらに、深雪楼で女郎として働かされている、福子を助け出すために、節子達は、旭川の社会運動家、佐野文子氏や、医師の沼崎先生に相談し、福子の人生の活路も開いていった。
逃れられないような困難に出あっても、熟考し、いろいろな人にアドバイスを受け、自ら苦境から抜け出す行動を取ったのには、本当に拍手喝采だ。
この勇気ある行動に感動する。
今を生きる私たちも、かくありたいものだ。
綾子さんは、凄い作家となったが、結核、脊椎カリエス、直腸がん、パーキンソン病と考えられないくらい多くの病魔に襲われても、病気と共に強く生ききった人だった
この小説は、まるで、小説とは思えない。

私には、ノンフィクションに近い小説に思えてくる。私の感想も事実に対する感想文のようになってしまった。
数々の苦しい病魔や、戦中・戦後を生きた綾子さんだからこそ書けたとも言えるが、次から次へと襲い来る苦難多き人生を生きる私たちへの応援歌の様に思えてくる。

上富良野町で泥流地帯の感想文の募集があると知り、もう一度読んでみる機会が持てて、私は、嬉しかった。
上富良野町に感謝だ。
上富良野町や、旭川市を始め近隣の市町村に生きる私たちは、治水や温泉を始め観光など十勝岳からの恵みに感謝しつつ、活火山であることからも逃れられないわけだが、人間の英知でもって、十勝岳の活動を細かく観測しつつ、防災の意識を育て、物理的対策もしながら、十勝岳と共とともに生きて行くと決意も新たにできたのは、感想文募集の取り組みのお陰なのだと思う。。
私も、まだ、しばらく、生きていくから、嬉しいことも悲しいことも乗り越えられない困難もたくさん出会うに違いない。そんな自分の人生、少しでも人のためになれることがあったら、微力でも力になりながら、必死に生きて行くことにしよう。
そういう想いにさせてくれた、素晴らしい小説だった。

『泥流地帯』から感じたこと

菅野　法之

十年ほど前、土の館で『スゴイ農家は厳しい条件の農地から生まれる』という説明を受けた。それは当時、北村で遊水地の仕事をしていた自分にとって強烈にインパクトのある言葉だった。

今年の春、釧路から旭川への転勤が決まってすぐに三浦綾子の『泥流地帯』を読み始めた。

憶病な拓一と石を投げつけた耕作から始まる物語。

真っすぐで弟思いの兄と勤勉で優秀な弟として二人は成長していく。

対照的でそれぞれ苦労を抱える福子と節子がそばにいる。

そして大正一五年五月二十四日、十勝岳が噴火して泥流が発生。

復興に向けてブレない拓一と迷い続ける耕作が何度も何度も交差する。

節子が拓一、耕作、福子の関係に刺激を与えていく。

日常普通にみられる理不尽、それをより鮮明にする泥流。

命がけで立ち向かう拓一の強い意志とやさしさ、そして印象的な言葉の数々。

子供の頃、人から『真面目だね』と言われても、ちっとも嬉しくなかった。

そして今、百年前を描いた『泥流地帯』から勇気をもらった。

一筋の光

（ペンネーム）　パンダ

「一筋の光を探して生きています。」

今年の元旦に、能登半島を地震が襲った。家屋倒壊や土砂災害で多くの命が失われた。地震から何日か過ぎた朝、避難先の体育館の前で、ある男性がインタビューに答えた。そして、

「でも、それが何なのか、なかなか見つけられないのですよ。」

と続けた。男性は疲れ切った表情だった。家を失い、家族を失った人々は、それでも前を向こうと避難先で必死に生きていた。水道も使えない広く寒い体育館で、毛布にくるまって耐えていた。あの男性もその一人だ。あの人は今どうしているだろうか。「一筋の光」という言葉が印象的で心に残っている。

更に、能登地方は、九月にまた大雨による河川の氾濫や土砂崩れが相次いだ。

「何故また能登なのか？」

地震で被災した多くの住民がそう思ったに違いない。やっと、明日が見えて来た矢先の大雨だった。

私が初めて「泥流地帯」に出会ったのは、今から四十年以上前、まだ学生だった頃だ。

拓一と耕作の生き方に惹かれ、結婚するなら拓一のような人がいいと思うまで、拓一の生

き方に恋をした。そして、作者である三浦綾子さんに会いたくて、旭川の三浦綾子記念文学館に出向いた。三浦綾子さんはもう亡くなられていたけれど、そこに行けば会えるような気がしたのだ。まさにそこは、外国樹種見本林の中にあり、心が浄化されるようだった。

いつの時代も、真実に生きた結果が報われるとは限らない。特に昨今、自然災害や戦争によって、多くの尊い命が奪われている。皆、善良に生きた人々である。戦争の言葉も知らない子供も多く含まれている。

新築したばかりの家が流された人、家族を失った人、農地すべてを泥流に流された人、そういう人々がその後どうやって生きていくのか、何を心の支えにするのか、私はいつも考える。

「一筋の光」が何であるのか。

炊き出しの一杯の温かい味噌汁なのかもしれない。そして、お風呂に入ることや仮設住宅に入ること、あるいは水道が使えるようになること、更に自分の家に戻れることなど、ぎりぎりの生活から少しでも前に進むことであるかもしれない。

人は、今日よりは少しでもいい明日を信じて前を向いて努力している。たとえ、明日大地震が来て全部失うとしても、だ。

「おれはな、耕作、あのまま泥流の中で俺が死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生まれ変わったとしても、俺はやっぱり真面目に生きるつもりだぞ。」

という拓一の言葉が人間の真実だと思っている。私たちは明日を信じている。未来も信じている。努力は必ず報われるものだと信じている。たとえそうならなくても、そう信じることこそが生きる力なのだと思う。そして一筋の光を探しているのだ。きっとよくなることと信じて。

更に、「愛」の力も生きる力の原動力である。拓一の福子を思う気持ちが、福子を動かした。節子の耕作を思う気持ちがよりよく生きようとする心の原動力になっている。そして拓一もまた、何があっても福子を愛し続けることが、自分の生きる力になっている。明日を信じる力に「愛」が加われば、それはもっともっと強いものになる。

能登で被災した人々にも、私たちはもっと愛を注ぐべきだろう。ずっと思いを寄せることが大切だと思っている。「明日を信じる力」と「愛」こそが、生きる力なのだ。

実際には拓一のように、強く、自己犠牲も厭わない真実に生きる人はなかなかいない。福子のように、ひどい境遇にありながら、心清らかに生きる女性もなかなかいない。多くの人が、愛を失ったり、明日を信じることができなくなったりして、迷っている。私も、何度も迷い、努力は無駄だと思うことがあった。でもその度に「泥流地帯」を思い出す。

そして、この物語を読み返して、拓一や耕作に会いに行くのだ。

手にも触れねば

（ペンネーム）　吉村うにうに

拓一が気を取り戻すと、忌まわしい記憶が甦ってきた。十勝岳の大爆発。そこからせり出すように溢れ出た山津波。市三郎やキワ、そして良子を助けるために、裏山を降り、そこで泥流に巻き込まれた瞬間の絶望と悔しさの感情までもが脳裏に浮かんでいた。

「痛い」

彼は、起き上がると、刺すような頭の痛みに思わず声を上げた。手で痛みのある部分に触れると、右側に窪みのようなものがあり、そこを指で探ると、ぐにゃりと嫌な感触があった。拓一はその感触が怖くなり、慌てて手を引っ込めて指先を見つめる。黒っぽい赤色の粘液質のものが目に入る。しかし、意識は鮮明で、他にはどこにも痛みはない。彼は意識を失う前の衝撃の瞬間を反芻し、その時にできた傷だろうと、考えた。

指に着いた血を周囲に咲き誇る青紫の花へ擦りつけてみる。見たこともない花に血糊がべっとりとついて、花を汚したようで心が痛んだ。

（そういえば、ここはどこだろう？）

日進の部落とは似ても似つかぬ花畑のような風景が広がっていた。花は青紫で、そこから爽やかで独特な香りが漂っていた。

拓一はこの花を見たことも嗅いだこともなかった。その色と香りに昂りかけた神経が瞬時に鎮まってゆくのを感じた。
（そうだ、じっちゃんは？　変だな、どうして泥がないんだ？）
拓一は泥流に流されたはずなのに、周囲に泥土も泥水も見当たらない事を訝しんだ。
（俺は助けられて、遠くに運ばれたに違いない。）
状況が呑み込めず当惑していると、紫の花の向こうにある森から、三人の人影が見えた。それが近づくにつれ、市三郎、キワ、良子だという事がはっきりした。
「じっちゃーん、ばっちゃーん、良子！」
興奮して大声を出した拓一に、市三郎は困ったような顔をしていたが、すぐに手を振ってきた。拓一は傷の痛みも忘れ駆け出した。向こうからは良子が真っ先に嬉しそうに両手を広げて走って来た。彼女の額や鼻に無数の傷があって痛々しかったが、会えた喜びが溢れ、拓一は「良子、良子！」と何度も叫んだ。
「一体ここはどこだ？　見たこともない花があるな」
矢継ぎ早の質問に、市三郎は悲しげな笑みを浮かべて言った。
「ラベンダーという花じゃ。フランスに咲く花らしいの」
「こんなのが上富良野にあったら、綺麗だろうにねえ」
良子が瞳を輝かせて言った。
「なあ、じっちゃん、ここは上富良野じゃねえな。もしかして……ここは……」
市三郎は、小さく頷いて言った。
「ここは待合所みたいなもんらしい。もうすぐあそこに偉い人が来て、わしらを連れて行って下さるんじゃ」
拓一は祖父の視線を追った。すると、石造りの建物が森の中にひっそりと建っているのが見えた。赤土のような石を積んだ壁で三角の屋根の母屋のような部分と、そこに隣接する丸みを帯びた屋根を持つ塔のような細長い部分から成り立っていた。彼はこれまで見た事もない建物に目を丸くしていた。
「立派なもんだなあ。外国の建物みたいだ」
「教会というんじゃ。ここで毎日、お祈りをして待つんじゃ。魂が洗われて、より良い所へ連れて行ってもらえるように」
拓一は、その建物が、いつか耕作が買ってきた雑誌の下絵に似ているように思えて、市三郎に訊いた。
「そんな外国の建物に、こんな綺麗な花。俺達は、遠くに行くんだな」
「でも、兄ちゃんやじっちゃんばっちゃんが一緒だから良かった」
良子が傷だらけの顔で笑った。拓一はその傷から目をそむけたくなった。良子の可愛らしい顔に傷が残っているのが哀れに思えたのだ。
「じっちゃん、良子に傷薬は塗ってやれねえのか？」と訊いた。
「ほら、耕作兄ちゃんにもらったレートクリームがあるよ」
拓一は、良子が差し出したクリームを指で掬うと、傷に薄く塗ってやった。何も塗らないよりはましだと思えたのだ。
「兄ちゃん、あそこにいる人に会ったらびっくりするよ」
「誰だ？」
良子は教会の塔の方を指した。
「行って見たら分かるって」
良子に手を引かれ、拓一がラベンダーを踏み分けながら進むと、馬のいななきが聞こえた。その声と良子の手を頼りに塔の裏側へと回り込むと、腹をぽっこりと膨らませた馬が、男にブラシをかけられていた。拓一はその異様に膨れた腹を見て、すぐにうちにいた青だと気づいた。
「青……青なんだな。もう苦しくないのか。あの時は悪かったな、苦しかったべ」
拓一は、良子の手を解いて、涙ぐみながら馬の顔を両手で触れた。青は優しい目でじっと拓一を見つめていた。
「耕作がな、お前の肉だけは絶対に食わんって言い張ってくれたぞ。だから……な」
それ以上は言ってはならない、良子にも市三郎にも聞かせてはいけない、悪いのはおれだ。そう思った。
馬の後ろにじっと立つ男に、ふと目を向けた。

精悍で傷らだけの顔がそこにあった。拓一の中に懐かしさが溢れ出た。
「と、と、父ちゃん！」
拓一は青の前を通って父親である義平の胸に飛び込んだ。
「お、おまえ、拓か。どうして……こんな所へ来ちまったんだ」
拓一の耳元で当惑するような義平の声。泣きじゃくりながら説明しようとする拓一。父ちゃんの体が小さくなっていない。自分が大きくなっても父ちゃんは大きい。父ちゃんは俺が十の時のままだ。そう思った。
拓一は袖で涙を拭いて拓一の顔を見る。どうやらあの事故の時のままで唇は裂け、目は片方が潰れており、腕の骨は折れているようだった。
「痛くないのか、父ちゃん？　じっちゃんに薬を塗ってもらった方が」
義平は笑って首を振った。
「いや、もう俺はこっちの人間だ。痛いや苦しいなんてのは、もうねえ。それにしても、拓は立派になったな。それなのに……。耕作はどうした？　あいつも大きくなったろうな。頭も良かったし」
「ああ、学校の先生をやってる。泥流には流されていないと思うが」
拓一が父親の傷を見つめていると、自分の頭の痛みが再び意識されてきた。
「ああ、頭がずきずきする」
義平はそれを聞いて怪訝な顔をして、離れた所に居る市三郎に声をかけた。
「親父―、ちょっとこっちさ来てくれ！」
すると、市三郎はキワと良子をラベンダー畑に残して駆けつけた。
「なした？」
義平が拓一の頭の痛みの事を話すと、市三郎の顔色は変わり、拓一の傷に触れ、彼の歪んだ表情を見てから、ううむと首を捻った。
「もしかして、拓一はあっちに戻れるんじゃなかろうか？　あのお方に訊いてみよう」
拓一は義平と市三郎に背中を押されるようにして、石造りの教会の木の扉をくぐった。外観は絵でしか見た事がなかったが、その内部もやはり拓一には見慣れぬもので、漆喰の壁に十字架が架けられた光景に圧倒されていた。床には横長の椅子がずらりと並んでいて、そこには大勢の人々が下を向いて手を合わせたり組んだりして座っていた。
拓一は椅子の間を通って前に進みながら、できる限り人々の顔を見ようとした。
（ああ、あれは耕作の生徒で見た事がある）
（あれは……姉ちゃん、姉ちゃんまで！）
叫び出しそうになる前に、彼は一番前にある教卓のような台の前にいる男にぶつかった。見上げて慌てて謝ろうとすると、男は静かに手を振って、その必要はないと伝えてきた。
彼は白いマントのようなものを羽織っていて、マントから頭に続く頭巾のようなものを被っていた。頭巾の中には、頬がこけ皺が刻まれた顔があった。拓一には、その表情が辛い修行で苦悩に満ちているように思えた。老いてもおらず、かといって若々しさにみなぎる様子もなかった。無精ひげをたくわえ、口元は真っ直ぐ閉じたまま、目には力強さと悲しみが共存しているような不思議な力を放っていた。
市三郎は拓一に
「このお方は、わしらを素晴らしい所へ連れて行って下さる、偉いお方じゃ」
と説明し、男の方を見て二言三言交わした。男は小さく頷いて、拓一を見つめると、手を掲げてそれを拓一の傷の部分に当てた。
「おお、ありがたや、ありがたや」
キワが男に向かって手を合わせ、お辞儀をした。
手からは神々しい光が発せられ、拓一の傷はみるみるうちに小さくなってゆくのを、市三郎やキワは感嘆の声を漏らしながら見守っていた。
「うう、痛い」
男が手を下ろした時、拓一には、それまで曖昧に消えたりぶり返したりしていた痛みが却ってはっきりと感じられるようになった。そして、我慢できず痛む場所を手で押さえたが、あれほどぱっくりと開いていた傷が、もやは無くなっていた。
「これが、親父の言っていた奇蹟というやつか」
近くで見ていた義平が呟くように言った。
男は市三郎の耳元に何かを囁くと、拓一が

入って来た教会の扉を指した。
「痛いのは、生きている証だという事じゃと。もうお前はわしらと同じ所には行けん。あの扉を開ければ道があるから、そこを通って帰りなさいとおっしゃっている」
　市三郎が男の言葉を伝えると、拓一は自分だけが部落に帰ることに、納得が行かなかった。
「じっちゃん達はどうするんだ？」
　市三郎は首を振った。
「わしらは、このお方に導かれて行く所がある。そこはもう苦しい事も痛い事もないんじゃ。だから、心配するな。ここでお別れじゃ」
　その時、拓一はおぞましい泥流を思い出した。木を抉り、家を押し流した泥の山の記憶が足を震えさせた。
「おれ、行かん。じっちゃん達と一緒に行く」
「聞き分けのない事を言うもじゃない。せっかく奇蹟を貰ったのに」
　キワが窘めるように言った。
「何が奇蹟だ」
　拓一は、怒りを白いマントの男に向けた。
「あんた、ここじゃ神様みたいに偉いかもしれんがな。十勝岳の噴火も止められんで、何を偉ぶっている？　どうして、何の罪もないじっちゃんやばっちゃんや良子までこんな目に遭わんといかん？」
　そう言いながら拓一は号泣した。涙で滲んだ前には、男の怒りと悔しさの入り混じった表情があった。唇を噛み、頬が微かに震えていたのだ。
「あのお方にも、どうしようもなかったんじゃ。今度の噴火だけではない。かつて、あのお方がかつて民の悪さを一身に背負っておられたそうじゃが、それでも罪なき民が、戦や流行り病、そして今度の山津波で酷い目に遭っているのを見続けているのに救えない事に怒っておられる。それしかあのお方にはできないそうじゃ」
　市三郎が言った。男の目からは涙があふれていた。それも血の涙だ。拓一はそれを見て、
「神様にもできない事があるんだな」と呟いた。
　義平が言った。
「だが、あのお方はお前を戻して下さる。それに奇蹟はそれだけじゃない。日進に戻ったら分かるだろう。耕作がまだいるはずだ。あいつにはお前が必要だ。二人で力を合わせて奇蹟を起こすんだ。あの部落を立て直すんだ」
「あの部落を？　耕作と……。家は流されたし、田も畑も馬も全滅したに違いないってのに。そんなのは……」
「できる。そうじゃ、わしらとあのお方は、遠い所から見ている。やってみるんじゃ。そしたら、人様が集まってくる、手を貸してくれるものも出るじゃろう。それが奇蹟じゃ。必ず今までより栄えるぞ。勿論、金持ちになるという意味ではないぞ。お前達が仕合せになるんじゃ」
　市三郎が言った。
「だったら、まだ若い良子だけでも一緒に」
　拓一は良子の肩に手をかけようとした。しかし、それは陽炎に触るように、虚しく空を切った。
「もう、お前とわしらは違うんじゃ。触れる事もかなわぬ。お前は生きて生きて生き抜くんじゃ。早く行け！」
　市三郎が、未練を断ち切るように一喝すると、拓一は涙を拭いて、市三郎、キワ、良子、義平、そして富の顔を忘れないように見つめた。そして、くるりと背を向けると、駆け出した。

　教会を出ると、ラベンダーの間に曲がりくねった小径が続いていた。拓一は振り返ることなく径をひたすら走っていた。途中で息を切らしながら「さよなら……」と何度もつぶやいた。
　どこまでも続く小径を駆けに駆けた。頭の痛みはますますはっきりしていて、それでいて意識が少しずつ遠のくのを感じた。もうこれ以上走れなくなった頃には、ラベンダーの香りも色も消え、小径はやがて思い出したくもない粘りけのある泥の一面に変わり、拓一の足を絡めとっていた。（了）

「正しさ」とは何か

（ペンネーム）　藤井　寧子

私は現在、カトリックのミッションスクールで教員をしている。実は、勤務校は私の母校であり、私は中学・高校・大学とカトリック、プロテスタントのミッションスクールで学んできた。私自身は影響を受けやすい人間で、宗教の授業や行事をとおして、キリスト教に興味を持ち、洗礼を受けたいとまで思うようになった。しかし、何をもって信仰と言えるのか、洗礼を受ければ信仰の証なのか、また自分は洗礼を受けるほどイエスを信じるようになれるのか、私にはわからないし自信がなかった。そんなときに出会ったのが、三浦綾子氏の『塩狩峠』だった。この本を読むことによって、自身の思考や行動に聖書の心が備わっていれば、必ずしも洗礼を受けていなくてもイエスを信じていると言ってよいのだと納得することができた。そして、中学・高校・大学と読み続けた三浦氏の小説は、私にキリスト教的な価値観の中で生きること、それは必ずしも輝かしい生き方だけではないことを教えてくれた。

現在の職場は、進学校として台頭しようという雰囲気が色濃く（そして保護者も入学生もそれを求めている）、またシスターの高齢化により学内でシスターを見かける機会も少なくなってしまったため、「カトリックのミッションスクール」というのは、（キリスト教の学校ではあるが）お題目ばかりになっているように感じる。どこのミッションスクールもそうなのかもしれないが、目には見えない心の教育に時間をかけることが年々難しくなっているように思われる。私は、古き良き時代に母校で過ごした時間、「正しいこととは何か」ということに向き合った時間をすっかり忘れてしまっていたのである。

この『泥流地帯』は、今年度（二〇二四年度）のＮＨＫ杯全国高校放送コンテストの課題図書になっていて、久しぶりに手に取った。『泥流地帯』は、他の三浦氏の作品に比べて宗教色が薄い作品と評されている点も選書の理由かもしれないが、三浦氏の夫である三浦光世氏が『三浦綾子創作秘話』の中で、「旧約聖書のヨブ記には、神の前に全く正しいヨブという人物が、瞬く間に多くの家畜を略奪され、災害によって子女を失い、自らは大変な病気に冒されるという、不可解な苦難が例示されている。／私はこのヨブ記をいわば下敷きに、十勝岳大爆発を小説に書いて欲しいと、綾子に頼んだのである」と語っている。確かに作中には他の作品とは違って、キリスト教の信者や教会、聖書の話は登場しない。先に触れた「下敷き」も、信仰をもつ登場人物がいて、旧約聖書のヨブのように信仰を試みられるわけではない。しかし、登場人物の語る言葉や生き方に、特に子どもたちに影響を与える祖父や父親、教師の言葉の端々に、キリスト教的な考え方や生き方をうかがい知ることができるのである。

ＮＨＫ杯では、タイトルにもなっている「泥流」つまり山津波の場面を読む生徒が多かった。その場面は、劇的であり、物語の「下敷き」とされたヨブに起こった「不可解な苦難」を象徴する場面であり、続編も含めて物語の重要な場面であるから当然のことなのだが（放送部顧問の私自身も指導の際には、作品のタイトルも含めてこの物語の一番言いたい場面、伝えたい場面を探そうと言っている）、改めてこの作品に触れたとき、いわばこの非日常の場面以外でこそ、この物語では恒常的で普遍的な「苦難」を登場人物に与えているように思われたのである。

たとえば、高等科にあがった主人公の耕作や権太が、耕作たち農家の子どもと市街の子どもたちとを区別する発言を繰り返す益垣先生の研究授業のあと、二人で話し合う場面である。益垣先生がその日も宿題をやってこなかった権太に罰として一人で掃除をすることを課す。先生が研究授業の評価会に参加するために教室から目を離した隙に、耕作は権太の掃除を一人手伝うが、耕作を気に入らない級長若浜が、耕作の行為を見とがめる。耕作は「叱られてもいい」と大見得を切ったものの、内心叱られるのが怖くて、落ち着かない。叱られることに慣れていない耕作が、毎日先生に叱られる権太に対して、叱られることが平気なのかと追及すると、「……家の父ちゃんは、叱られるからするとか、

叱られないからしないというのは、ダメだって、いつも言うからね」
「叱られても、叱られなくても、やらなきゃあならんことはやるもんだって」
「平気じゃないけどさ。泣いたことだってあるけどさ。だけど、先生に叱られるからと言って、母ちゃんの手伝いをしないで、学校に走って来たりはしないよ」
　と言うのである。権太の母親は、産後の肥立ちが悪く、思うように働けない。権太は、それを手伝って毎日学校に遅れてくるのだ。優等生で他人にほめられ慣れている耕作にとって、叱られることはほめられることの正反対の行為であり、恥ずべきことだった。耕作が権太の立場だったら、なんとかして学校に遅れない手立てを考えるものだが、と思いつつ、「権太は、学校に遅れるよりも、病気の母親をいたわらない方が、悪いことだとはっきと確信している」ことに気づかされるのだ。そして、この権太の話を聞いた耕作は、「がんと頬を殴られた思いがした」のである。
　この「母ちゃんの手伝い」というのは、母親の体調の回復がみられるまで恒常的に続くことであり、先に言及した普遍的な「苦難」である。耕作たちは「農家の子」として生まれたために、それを生涯背負って生きていかなければならいのである。耕作は、分教場はじまって以来の「中学合格」という前代未聞の挑戦で、自分の力で人生を切り開こうとする。しかし、「金」や「(身)分」に阻まれて、結局断せざるを得ない。作家はもちろん、初の「中学合格」そして立身出世の夢物語を描くこともできる。しかし、私たちの生きる世界でそのような「夢物語」はあまりにも特殊ではないだろうか。三浦氏の作品は、あえてそれを描かず、恒常的・普遍的な「苦難」の中で生きる人々を描くことによって、「夢物語」など起こらない私たちがどのように生きていったらよいのか、それを教えてくれているように思われるのである。
　実は私も似たような経験をしたことがある。私の教え子で、いつも控えめでおとなしく、クラスではニコニコしながら、周囲の様子を見守っているような生徒がいた。その優しげな、はかなげな見た目とは違って、内心は一本芯のとおった性格の子だった。油絵を描いたり、本を読んだりすることが好きなほうで、たとえば数学なんかは苦手なのだが、苦手だからこそしっかり勉強すると言って、熱心に塾に通うような生徒だった。その子が時々、遅刻をしてくる。私はその理由を、高校二年生のときに、大きな手術をしたので、そのせいで体調が思わしくないのだろうと思っていた。ただ、その遅刻も一、二分の遅刻で、大幅な遅刻ではなく、もう少しがんばれば間に合いそうなものである。遅刻の理由を尋ねると、「寝坊しました……」と小声で答え、照れ笑いをする。「そうか、じゃあ明日はがんばろうね」とその都度声をかけてきた。
　ところが、遅刻の本当の理由を最後の年に知って、自分の甘さに打ちのめされるのである。高校三年生の三者面談の際、「学業もよくがんばっていますし、友人関係も良好です。部活動もがんばりましたね。手術の影響はどうですか？」なんて話をしながら、進路に向けての話になった。
　「娘さん、ときどき遅刻をするのですが、寝坊ということで……。推薦会議では遅刻の数も見られますから、あと一、二分なんです。もう少しだけ早く家を出られると、間に合うと思うのですが……娘さん、朝は弱いんですか？」
　と聞いたときである。すると母親が、
「先生、すみません。その寝坊は私です。娘はちゃんと朝起きています。私が寝坊したとき、娘は家のことをやってくれてるんです。遅刻は、私のせいなんです。」
　と言ったのである。
「この子は、本当に……全然人のせいにしない子なんです、本当にすみません。私がもっと早く起きるようにします。」
　女手一つで育てられている生徒だった。自分自身は、大きな手術のあとも不調がありしんどいだろうに、早起きをして母親を手伝ってから登校していたのである。このとき私は、まさに「がんと頬を殴られた思いがした」のである。なんと浅慮に発言してしまったことか、と自分の言動を恥じた。この十八歳の少女が背負う人生を、耕作たちが分教場で菊川先生に理解されていたように、理解しなければいけないのだ

と強く実感したできごとであった。

二〇一一年三月、私は東日本大震災で被災した。学校は街中にあるので、被害は地震被害だけで済んだ上に、学校で活動していたのは、課外を受けている生徒や翌日に卒業式を控えた中学部の生徒、部活動に参加している生徒といった全校生徒の一部で、その他の在校生含め全員無事であった。それでも、体育館の天井が落ちたり、教室の蛍光灯が外れて落下したりして、持ち場の教員の判断が一瞬遅ければ、生徒たちの命が奪われるところだった。一番背筋が凍ったのは、帰宅困難生徒と集まってテレビを見ていたときのことである。実は当時中学部の建物の新設工事をしていたために、建設会社が用意した予備電源が校内にあり、幸運なことに電気を使うことができたていた。テレビのニュースから各地の被害状況の映像が流れてきたときである。

「あ！　あたしフツーに(卒業式の練習をしてすぐに)帰ってたら、この電車に乗ってた……」

と、中学部の教え子が言ったのである。彼女は津波の被害が深刻だった地域に自宅があり、海岸沿いを通る電車で一時間以上かけて登校していた。テレビには、その通学で使用しているいつもの電車が、津波に押し流されて脱線し、横倒しになっている様子が映し出されていた。地元へ帰る手段もなく、両親と依然として連絡のつかない彼女は、近くの大学に通っていた兄と合流し、本校で数日間過ごした。自宅付近は津波によって壊滅しており、両親の安否もわからないまま過ごすのは大変不安だったに違いないが、耕作のもとに山津波に飛び込んでいった兄の拓一が還ってきたときのように、兄と再会した彼女は心強かったに違いない。そして、彼女の家族が見つかったのは、大地震が起きてから一週間後ぐらいのことあった。普段スクールバスとして使用している大型バスに兄妹二人で乗り、地震で隆起したでこぼこの道を一時間以上かけて家族が待つ避難所へと帰っていったのである。

その後、復旧して四月には新入生を迎えたが、沿岸部から登校する生徒には、家族や友人の多くを亡くした子もいた。でもとにかく、私たちは生きていくしかなかった。あまりにも多くのものが奪われ、多くの人が亡くなり、その結果多くのものが変化した。そういうとき、人間は自ら死を選ぼうとは思わないし思えない。今日を生きるのに精一杯のとき、人間は死ぬことなど考えられないのだ。これは、私の実感である。最近、テレビで「時薬」という言葉を耳にした。人間は時間が経つと少しずつ癒やされていく。現在、元の生活に戻ったが、日本各地で起こる大地震や災害に以前よりも深く心を寄せるようになった。

しかし、「出自」の問題は、一生私たちにつきまとう。『泥流地帯』の舞台となる一九二〇年代と現代の日本社会を比較すれば、もちろん現代は出自にかかわらず自由に生きられる社会になった。それでも、子どもたちはその庇護から離れるまで、親や学校に帰属して生きていく。それだけではない、社会が複雑化し、部活動や塾、習い事やボランティア活動など、社会人として自立する前から子どもたちは社会の様々な集団に帰属している。そこには特有のルールがあり、独特の価値観がある。時に子どもたちはそのルールや価値観のおしつけに傷つき、たとえば学校でのいじめを苦にこの世を去るといういたましい事件が起こっている。そういった時代に、「正しさとは何か」を問う物語として、この『泥流地帯』と向き合ってみる価値があるように思う。権太が父親に教えられた、「叱られても、叱られなくても、やらなきゃあならんことはやるもんだって」という価値観を伝えていける人間でありたいと改めて思ったものである。

いくつだったか

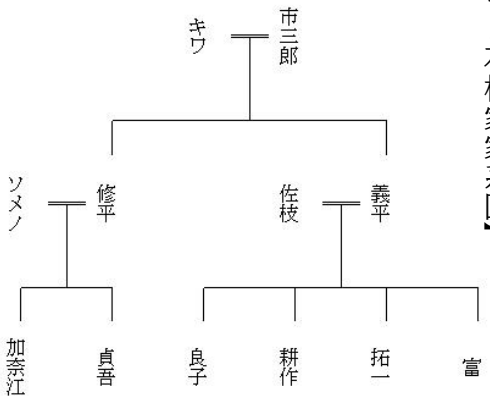
（ペンネーム）　黒木　猫

『泥流地帯』は、大正六年の秋から物語が始まり、大正十五年五月の十勝岳大爆発のあとまでが描かれます。石村拓一と耕作の兄弟――特に弟・耕作の人生を追う形で話は進みます。耕作が秀才で親しみもあるのに対し、兄・拓一は強い心と身体を持った男性で、そのひたむきな生き方に胸を打たれました。

耕作と拓一だけでなく、彼らの祖父である市三郎や深城節子、曾山福子といった魅力的な人物が数多く登場します。また、井上権太のように、出番はそれほど多くないのに記憶に残る者もいます。『泥流地帯』には、名前だけ登場する者を含めると、人の名前が大量に出てきます。このような丁寧な人物描写と大量の人名は、その人たちの生や日常を身近に感じさせ、終盤の十勝岳大爆発で多くの命や生活が失われた時には、深い悲しみを覚えました。

そのような人物描写の中で気になったのが、石村良子の年齢です。ここで参考に、物語で分かる範囲で、石村家の家系図（表１）を確認します。

【表１：石村家家系図】



なお、耕作たちの父・義平は、物語が始まる四年前に、冬山造材で木の下になって亡くなっています。また、母・佐枝は、夫の死後、髪結いの修行に出ていて、実際に登場するのは続編の『続泥流地帯』からです。

良子は耕助たちの妹ですが、第一章「山合の秋」に「みんなと言っても、祖父母のほかは、拓一と、十五の富と十の耕作と、六つの良子だ」（『泥流地帯』新潮社、一九七七、六頁）という記述が出てきます。ここから、耕作と良子が四つ違いだと分かるのですが、この年齢は数え年です。たとえば、第二章「雪の道」の「富も、正月が来れば十九だな」（同、二七頁）や、第六章「土俵」の「良子は今年数えて十一になったばかりだ」（同、一一〇頁）など、本作の年齢表記が数え年であることを示す記述が散見されます。

数え年とは、生まれた時を一歳として、その後元日を迎えるごとに加齢するという年齢の計算方法です。そのため、一月に生まれた子と、十二月に生まれた子では、二歳になるまでに一年近くの差があります。生まれた時は零歳で、誕生日ごと（加齢の時期について、詳細を後述します。）に加齢する現在の満年齢とは、大きな違いがありますが、かつては数え年が一般的でした。

年齢の計算方法は、明治三十五年十二月二十二日に施行された「年齢計算ニ関スル法律（明治三十五年法律第五十号）」で、現在の満年齢が公的に用いられることになりました。しかし、昭和二十五年一月一日に施行された「年齢のとなえ方に関する法律（昭和二十四年法律第九十六号）」で、国民は、年齢を数え年によって言い表す従来のならわしを改めて、年齢計算に関する法律の規定により算定した年数によってこれを言い表すのを常とするように心がけなければならない、と促さなければならなかったことからもわかるように、「年齢計算ニ関スル法律」の施行後も、世間では長らく数え年が使われていたのでした。

『泥流地帯』の作中には、年齢や学年について、多くの記述が出てきます。学年について何度も触れるのは、作者の三浦綾子さんが、かつて小学校の教員をしていたからかもしれません。これらの記述のうち、拓一、耕作、良子に注目し

て、大正六年から大正十二年の四月時点における数え年と学年を整理すると表２のようになります（参考文献：『泥流地帯』新潮社、一九七七）。

【表２：拓一、耕作、良子の数え年と学年】

	拓一		耕作		良子	
	数え年	学年	数え年	学年	数え年	学年
大正６年　４月	13歳	６年生	10歳	３年生	６歳	
大正７年　４月	14歳	高等１年	11歳	４年生	７歳	１年生
大正８年　４月	15歳	高等２年	12歳	５年生	８歳	２年生
大正９年　４月	16歳		13歳	６年生	９歳	３年生
大正10年　４月	17歳		14歳	高等１年	10歳	４年生
大正11年　４月	18歳		15歳	高等２年	11歳	５年生
大正12年　４月	19歳		16歳		12歳	６年生

ここに記載されている学年は、尋常小学校（表２中に学年のみが記載されているもの）と高等小学校（表２中に「高等」が付されているもの）のものです。明治三十三年に、尋常小学校の修業年限を四年とする義務教育制度が確立されました。その後、明治四十年に義務教育年限が延長され、尋常小学校が六年制になります。現在の六三制と異なり、物語当時（大正六年から十五年）においても義務教育は六年制で、二年制の高等小学校へ進むかは任意でしたし、耕作が泣く泣く断念した五年制の中学校など、別の進学先もありました。

表２を改めて見てみますと、耕作と良子が十歳の時、それぞれ学年が三年生と四年生となっているのがわかります。このことから良子は早生まれだと考えられるため、良子の年齢について、数え年と満年齢を整理すると表３のようになります。

ここで、二点補足します。一点目の生年について、明治四十五年七月三十日に明治天皇の崩御により、同日、大正と改元されたため、一月一日から四月一日の元号は明治となります。また、月日について、早生まれということから、一月一日から四月一日までとしています。三月三十一日までとも思えますが、これは満年齢の計算が、誕生日の前日が終了する時に一つ年をとる、とされているからです。そうしますと、四月一日生まれの人は、三月三十一日が終わる時に加齢するため、早生まれとなるのです。このことから、学年で一番早く生まれた人の誕生日は、四月二日ということになります。

『続泥流地帯』は、十勝岳大爆発があった翌々月――大正十五年七月から物語が始まります。耕作たちが泥流で流されてしまった家について話していると、亡くなった良子に思いが及びます。

「良子が喜んだっけなあ」

拓一の声がくもる。耕作も今思っていたとこ

【表３：良子の数え年と満年齢】

			数え年	満年齢
明治45年	１月１日～	４月１日（生年月日）	１歳	０歳
大正２年	４月１日		２歳	１歳
大正３年	４月１日		３歳	２歳
大正４年	４月１日		４歳	３歳
大正５年	４月１日		５歳	４歳
大正６年	４月１日		６歳	５歳
大正７年	４月１日	（尋常小学校入学）	７歳	６歳
大正８年	４月１日		８歳	７歳
大正９年	４月１日		９歳	８歳
大正10年	４月１日		10歳	９歳
大正11年	４月１日		11歳	10歳
大正12年	４月１日		12歳	11歳
大正13年	４月１日		13歳	12歳
大正14年	４月１日		14歳	13歳
大正15年	４月１日		15歳	14歳
大正15年	５月24日	（十勝岳大爆発）	15歳	14歳

ろだ。良子は、六畳ふた間を建て増した時、誰よりも喜んだ。たったふた間の家に、ふた間建て増したのだから、家は倍にも広くなったように見えた。良子は四つの部屋の襖を閉めたり、あけ放したりしながら、

「広いわあ。これだら、嫁入りでも葬式でもできるね」

と、はしゃいで、修平に、

「誰の葬式だぁ」

とたしなめられた。あの時耕作は、葬式という言葉に、祖父と祖母の顔を思い浮かべていやな気がしたが、嫁入りはまちがいなく良子の嫁入りだと思ったものだった。その喜んだ良子が、十五になったばかりで、泥流の中で死んでしまった。

（『続泥流地帯』新潮社、一九七九、二〇―二一頁）

十勝岳大爆発の時、良子は数え十五歳だったということですが、表3にもあったように、満年齢ですと十四歳でした。泥流に呑まれて亡くなったのが、数え十五歳というのと、満十四歳というのとでは、少し印象が違ってくるように思います。早生まれであるため、良子の満年齢が特定できたのですが、三浦綾子さんは、随筆で次のように語っています。

私の小説『泥流地帯』をお読みの方は、主人公拓一、耕作の母佐枝をご存じであろう。あの家族の状況は、三浦（引用者注：三浦綾子さんの配偶者である三浦光世さん）の家を模している。三浦の父は、三浦が四歳にもならぬうちに、肺結核で世を去った。残ったのは、三浦の兄と、三浦とその妹の三人であった。姉は一人いたが、伯父の家の養女になっていた。三人の子を抱えた三浦の母は、最初は農業をしていたが、寒冷地のその土地では、子供を育てるほどの収入はなかった。この土地は未だに、地球の向う側まで石かと思うほどの石地だ。

というわけで、母は三浦たちを親族に預けて、髪結いの修行に札幌に出た。だが、髪結いの技術が身につくよりも先に、キリスト教の信仰に入った。この信仰が、母のその後の五十年を支えたのである。

（「姑の死に思う」『それでも明日は来る』主婦の友社、一九八九、二五頁）

姉が伯父の養女になっていたり、父が肺結核で亡くなっているといった違いはありますが、「模している」と言っているとおり、耕作たちの家族は、三浦光世さんの家族と似ています。良子が早生まれであるのにも、モデルがあったのかもしれません。

ここまで、参考文献と引用文献として、すべて単行本を使用しました。私が初めて読んだのが単行本だからというのもあるのですが、理由はもう一点あります。本稿の執筆に当たって文庫（『泥流地帯』新潮文庫、一九八二）を読み返してみると、良子の学年が一つ下がっているのです。つまり、早生まれではありません。

はじめから誤りだったのか、それとも混乱を避けるためなのか、修正されているのです。前にも述べたように、三浦綾子さんは小学校の教員をしていましたし、作中に学年の記述が多いことから後者であるように思えます。『三浦綾子作品集第十一巻』（朝日新聞社、一九八四）、『三浦綾子全集第八巻』（主婦の友社、一九九二）、『三浦綾子小説選集４』（主婦の友社、二〇〇一）を確認しましたが、これらも修正されていました。

初めて『泥流地帯』を読んだ時、良子は満十四歳で泥流に呑まれて亡くなったのだと、その早すぎる死に胸を痛めました。早生まれでなかったとなれば、十勝岳大爆発の時は満十三歳、あるいは満十四歳になって二か月も経っていません。そう考えると、また少し印象が変わりました。

三浦綾子先生への手紙

（ペンネーム）　青山　恵

綾子先生、はじめまして。

私はごくごく普通の52歳の専業主婦で、綾子先生と綾子先生の書く小説のファンの一人です。

私が綾子先生の小説に出会ったのは、小学校五年生の夏の日のことでした。

夏休みの宿題に出された読書感想文の宿題に頭を悩ませていた私に、母が薦めてくれたのが、綾子先生の代表作とも言える「氷点」でした。国語（綴り方）だけでなく勉強全般が苦手だった私にとって、簡単に読める本ではなかったのですが、読書家だった母が一番子供に読んでほしい本が「氷点」でした。なので、母親に褒めてもらいたい一心で、時々文章の中に出てくるドイツ語の意味を母に尋ねたりして読み進めていきました。

そのうちに「陽子」の存在に惹きつけられ、「次は？　次は？」とのめり込むようにして、夜な夜な遅くまで布団の中で読んだりしたものでした。

当時の私には、聖書の言葉も、そして根底に流れる「原罪」というテーマも難しくて、どこまで理解できたか定かではありません。でも、読み終えたあとの達成感と「陽子」の未来を想像して、子供ながらに安堵感を覚えたことを昨日のことのように記憶しております。

そして、子供時代から思春期を経て、また、人生の伴侶と結婚し家族を得た現在を通して、人生の転機に戸惑い悩む時には、いつも「氷点」の中に答えを探す自分がいました。年を重ねるごとに、時には「陽子」、時には「夏枝」、時には「啓造」の気持ちになる自分自身の変化に驚くとともに、共感を覚え、救われる自分がいたことは、大げさではなく、決して否めません。

それから40年以上の月日が経ち、52歳になった今、亡き母から「いつか泥流地帯も読んでほしい。」と薦められていたことを思い出し、少しためらいつつも読んでみようと思いました。そして今、こうして綾子先生からの新たな教えをいろいろな風に捉えながら、咀嚼し反芻しているところです。

でも、正直なところ、この「泥流地帯」を読むのは苦しかった。

「泥流地帯」というタイトルの重さにまず尻込みし、本を読み進めるにつれ、平穏な気持ちでは読めなかったからです。

そして、綾子先生がまだご存命でいらして、つい最近書いたものでは？・・・と思うほどに、時世との一致を多く感じたことも要因の一つです。

２０２４年、お正月の穏やかな団らんを襲った石川能登半島の震度７の激震と１００人を超える犠牲者。揺れや津波により倒壊した多くの家屋。陸の孤島と化してなかなか復興が進まない中、今度は台風による仮設住宅への浸水被害と被災者の姿。これでもか、これでもかとやってくる不幸で残酷な出来事が、「泥流地帯」と重なってしまうのです。

ニュースで被災地を見るたびに、土地建物だけでなく、被災した人々に大きな爪痕を残した震災の酷さが、泥流にまみれて亡くなった「市三郎」「キワ」「良子」「冨」の亡骸を思い起こさせ、オーバーラップしてしまうのです。

そして、私の頭の中に「耕作」の声が問いかけてくるのです。

「なあ、兄ちゃん。真面目に生きているものが、どうしてひどい目にあって死ぬんだべな（中略）こんなむごたらしい死に方をするなんて・・・・・まじめにいきていても、馬鹿臭いようなもんだな」

それに対して、荒れ狂う泥流に飛び込んで家族を助けようとした「拓一」が答えます。

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生まれ変わったとしても、おれはやっぱりまじめにいきるつもりだぞ。じっちゃんだって、ばっちゃんだって、おれとおんなじ気持ちだべ。おそらく馬鹿臭いとは思わんべ。生まれ変わったら、遊んでくらそうとか、生ま狡く暮らそうなどとはおもわんべな」

この「拓一」の言葉に私の頭にひとつの疑問が湧いてきました。

旭川中学に首席で合格したのに、貧しさ故に

進学できなかった「耕作」。
　どんなに田畑を耕しても、自分たちは盆か正月くらいしか米を口にできない「市三郎」一家。
　酒と賭博に溺れた父親の借金の形に売られた、従順で純粋な「福子」。
　世の中は不平等で不条理で不合理だと思いつつ、意識しないように生きてきた私の中で、
（なぜこんなに、正しい人ばかりが苦難を虐げられるのだろう・・・）と疑問が頭をもたげるのです。
　そして、綾子先生もこう私に問いかけるのです。
「生きるということは何の報いも望まないことなのか。どんな苦難に会おうとも、只ひたすらに、真実に生きて行くべきなのだろうか。」
　そんな疑問を抱えながら、読み進めていくうちに、こんな文章を見つけました。
「今力一杯に遊んでいるあの子供たちにも、泥流が襲わないとは限らない。それは、突然の肉親の死であるか、病気であるか、どんな形で泥流が人をおそうかわからないのだ。」
　この言葉に私はハッとし、私の心の中に泥のように残る出来事を思い出しました。それは私の母の突然の死です。
　私の母は20歳で結婚、21歳で私を出産、23歳で弟を出産した後に、様々な要因が重なりうつ病を発症しました。今でこそ現代病と言われ、その治療法も確立され認知されていますが、その当時はなかなか理解されておらず、なまけ病と言われたこともありました。そんな母は、私が物心つく頃には、かなり状態は改善がみられてはいたものの、なんども揺り戻しを繰り返し、食事を作ったり、入浴したりとごく普通の日常生活をおくることがままならないことが度々ありました。
　ただ、うつ病という病名を知らなくても、子供心に母は病気なのだ、なまけ病では決してないのだとわかっていました。なので、私達姉弟は二人で台所に立ち、トマトやレタスを切ってサラダを作ったり、お肉を焼いたりして、出来上がったご飯を臥せている母の枕元に持っていったりしました。
　そして、母の体調の良いときは、母はクリスチャンではないのですが、よく綾子先生の本や聖書を読み、ティッシュペーパーで紙縒りをよって本に挟んだり、赤鉛筆で線を引いたりしていました。そんな母をみていると、母の人となりは、誰よりも「正しくあろうとした人である」と私はよく思ったものでした。
　また、こんな風にも私たちに常日頃語りかけたものです。
「石にかじりついても、ママは病気に負けないからね。」
　しかし、私が人生の伴侶とめぐり逢い、結婚式をあげた翌年、突然の交通事故であっけなく母は47歳の生涯を閉じました。
　その当時のことを思い出すと、筆舌に尽くしがたいのですが、只々悲しいという感情と、何故こんなに正しい人が・・・という感情がないまぜになったことを追憶することができます。
　そして、気がついたのです。私の中にも泥流があると。
「氷点」のなかで、「陽子」の中に氷点があったように、誰の心の中にも泥流はあるのではないかと。
　そして、シンプルな答えに辿り着くことができたのです。
　苦難や試練を与えられたとき、人はどう生きるべきか？
　そんなときは「頭ではなく心」に問いかけてみればいい。
「今日の自分は、必らずしも明日の自分ではない」し、「泥流は自然を荒らすことはできても人の心まであらすことはできないはず」。
「志ある所、必ず道通ず」という言葉を自宅の壁に貼り付け、泥棒村長と罵詈雑言を浴びても、「石にかじりついても、この泥田を美田にしてみせる」と言い放った吉田村長。
　骨折後、変形してしまった脚を引きずりながら、田んぼを見つめる「拓一」の目に映ったものは、穂先を垂らす稲だけではなかったのではないでしょうか？
　そんな光景を綾子先生のメッセージを通して見ることができた喜びに、「いつか泥流地帯も読んでほしい。」といった母の愛情と親心を思わずにはいられません。
　そして最後に、この本を書いてくださった綾子先生、この本を薦めてくれた母に、感謝を申し上げたいと思います。

絵画から広がりゆく「泥流地帯」

（ペンネーム）　すい

1．はじめに

突然ですが、皆さんは「泥流地帯」の表紙といえば、どんな絵を思い浮かべますか？

私は、黄色の横線が印象的な新潮社文庫版の表紙を思い出します。もしかしたら、他の種類の表紙を思い浮かべた方もいるかもしれませんね。ですが私にとって「泥流地帯」の紙の本といえばこの文庫版です。現在流通していて本屋さんに並んでいるのはこの文庫版、手元にあるのもこの文庫版であり、「泥流地帯」のグッズとして使われているのもこの文庫版の表紙です。クリアファイルやうちわなどをたくさんいただきましたが、それらにもこの文庫版の表紙が印刷されています。

「泥流地帯」という作品を知って数年、私は何度もこの表紙を目にし、「泥流地帯」といえばあの表紙だなと思うようになりました。正確には表紙の「絵」のことです。

本の表紙の絵は一般的に「装丁画」と呼ばれます。普段何気なく目にしている「泥流地帯」の装丁画、一見抽象的で小説とどう繋がっているのか、分かるようで分からない…となんとなく思っていました。恐らく、三浦綾子氏の作品で文庫化された表紙の中でもかなり意味深な絵であり、惹きつけられるものがあります。「どうしてこんな不思議な絵が表紙なんだろう？」とだんだん興味が湧いてきました。

絵が存在するということは、描いた作家やこの表紙をデザイン・制作した編集者、デザイナーがいるはずです。まず軽い気持ちで何かヒントはないか文庫版の表紙をめくってみると、三浦綾子氏の紹介の下に「カバー装丁　糸園和三郎」という表記を発見しました。早速驚きです…。私にとって何度もめくってきたページに見落としがあったことにショックを感じつつ「この本を作ったのは三浦綾子氏だけではない」ということに手応えを感じました。　そこで、文庫版「泥流地帯」を形作っているもう一人の作家、糸園和三郎について調べることにしました。

2．糸園和三郎と作品について

糸園和三郎（いとぞの　わさぶろう）氏は、昭和初期から戦後にかけて活躍した日本の洋画家です。1911 年、大分県に生まれ、幼い頃に骨髄炎という大病を患い手術を受け、その後小学校を卒業したものの病気のため進学を断念しました。しかし、その後は父に絵を描くことを勧められ、19 歳のときに美術展で入選。その後も幾つかの入選を果たし、画業の道を歩み始めました。戦前の展覧会開催や戦時下での創作活動を経て、戦後には「戦後美術」と称される、人間の内面を表現した作品を多く発表し、評価を得ました。

年月が流れ、1959 年（48 歳頃）に脳動脈瘤が見つかりますが、手術による作品制作の支障を懸念し手術はせず。晩年の1985年（74 歳頃）には右眼の視力を失い、その後左眼も衰えたものの、作品を制作し続けました。その後、糸園氏は 2001 年に89 年の生涯を閉じました。

ちなみに、三浦綾子氏は 1922 年生まれなので、年齢としては10 歳違いとなります。同時代を生きてきたんですね。

糸園氏の経歴を簡単に紹介しましたが、果たして「泥流地帯」の装丁画の絵は氏が残した多くの作品の中にあるのでしょうか…。調べによると氏の作品は大分県立美術館に多く所蔵されており、幸い公式 HP でそのコレクションを見ることが出来たので、一か八かそちらでリサーチ。するとありました、あの見慣れた絵が…！

題名「土塊（つちくれ）」（1981 年）。こちらが「泥流地帯」の装丁画です。

（大分県立美術館の公式 HP からその絵図を閲覧することができます。表紙ではトリミングされた部分が使用されているため、ぜひ公式 HP から全体図をご覧ください。）

調べてみると、意外とあっさりとたどり着きましたが、この題名には驚きました。「まさに『泥流地帯』だ…」と感じたのです。それは、泥流によって流された土地や災害にあった人々のやるせなさを思わせるものでした。こんなに小説をイメージさせる題名とは思っておらず、

「泥流地帯」の為に制作されたのだろうか…、という気がしてきました。

ではこれは本当に「泥流地帯」の為に制作された作品なのでしょうか？答えは「否」、です。

私は勝手ながら、装丁画というのは小説作品の為に描き下ろしたものであると思い込んでいましたが、調べるうちにこの「土塊」と「泥流地帯」には特に何の関係は無く、ただ装丁画として採用されたものであることが分かりました。

というのも美術館の解説によるとこの「土塊」という作品は、糸園氏が亡くなった兄を悼んで制作された作品だからです。

3．装丁画となった理由

では、何故この作品が装丁画として採用されたのでしょうか。一番の疑問です。

これはもう糸園氏について詳しい場所に連絡してみるのが確実かと思い、まずは大分県立美術館に連絡をしました。しかし「装丁画になった経緯等はすべて出版社で決められた事なので…」と返答を頂いたので、文庫版奥付の電話番号を頼りに新潮社編集部さんへ電話をしてみました。

すると、装丁に詳しい方から、その過程について少し教えて頂くことが出来ました。一般的なブックデザインの工程でもありますが、まずはデザイナーさんと編集者さん2名で取り組み、小説を読んでその内容の世界を一目で伝えるような表紙のデザインを考案・制作していくそうです。その過程で、装丁画となる作家・作品を探したり描き下ろしの依頼等をします。ただ内容のネタバレには配慮しなければならずストーリーを直接的に描いた作品よりも小説の空気感を表現することを優先する傾向があり、「泥流地帯」の場合は特にクライマックスを直接表現することは避け、抽象的な作品が採用されたのではないか、と伺いました。

また、「続泥流地帯」に関してはトリミングの位置変更と色替えをして使用していますが、続巻が出る際にそういったデザインになるパターンはあるそうです。

4．「土塊」の意味

作品制作と出版が40年近く前のことですからやはり真相は分かりませんでしたが、何故ああいった表現の絵画が採用されたかは納得がいきました。そして「なるほど、装丁デザインというのは作品の世界観を伝えるもの…映画の主題歌やアニメのオープニング映像みたいなものか…！」というイメージを得たことが個人的な収穫でした。

最初の疑問に戻りますが何故「土塊」を採用したかの答えを知ることは難しそうなので、自分の推測に任せるしかないようです。

まず題名の「土塊」、一体どういう意味でしょうか？　山のことかと想像はつきますが、何か隠された意図のある題名にも思われます。作品の全体図を見た時、不自然で非現実的なものが描かれていると感じました。夜でも夕方でもないような空、その下にただ置かれたような山、そして一本のビビッドな黄色い直線、一番手前に唯一生命を感じさせる花を咲かせる木。

美術館の解説によると糸園氏の作品には特徴として心象風景が描かれており、この作品もその一つと言われています。そして、「1つのモチーフが2つのものを表現している」、という点を併せ持つと解説から知りました。つまり「土塊」は、兄の死を悼んで制作された作品でありながら、何かのモチーフに追悼の意味が同居しているということになります。

それは解説にこう記されてます。

「土の山をよく見ると、横たわる兄の遺体の形をしているのが分かります。あたかも風景と死者が一体となっているかのようです。（引用：OPAMブログ　2021.10.15）」

どうでしょうか？　私はこの解説を読み、やっと題名とこの作品の内容、そして「泥流地帯」との関連が見えてきました。

糸園氏の作品には、直線を川に見立て両岸を分断する作品が何点かあります。その特徴

がこの「土塊」にも現れているとすれば、「泥流地帯」の内容と照らし合わせた際、「突然失われる日常、そして泥流被害で失われた数多の命への鎮魂、それを背にした生者の希望」という内容と重なるのではないかと思います。

また、糸園氏作品を多く取り扱う画廊の方にもお尋ねしてみました。こちらでは、全体図を見ての所感を教えて頂きました。鮮烈な黄色の光(線)が左端にいくにつれて、滲んでゆきます。(左端は表紙では切り取られています)そのため左右でそれぞれ違う世界を現しており、右側が清浄(極楽浄土)、左側が不浄(衆生の人間世界)表現しているのではないかと仰られていました。ただ、やはりこの絵画についてはっきりとした真意は分からないそうです。

色々と想像の湧く絵ではあるが、キーワードとしては、過去と未来、あの世とこの世、亡骸を思うのか亡骸から見られているのか…そのような印象とのことでした。しかしこれらも、「亡くなった人々の想い、開拓者の想いや心傷ついた者の想いを背負って、土地を復興させてゆく」という「泥流地帯」の展開を思わせるものでした。

ここまで考えてみると、この「土塊」を装丁画に選定した方は、本当に「泥流地帯」の内容を深く知っている人なのだなぁとなんだか嬉しさすら感じます。装丁画候補は他にもあったかもしれませんが、「土塊」が特に「泥流地帯」という作品世界を絵を通じて伝えるのに相応しいと判断されたのでしょう。恐れながら拍手を送らせて頂きたいです。

5. 装丁画の視覚的効果

私は「泥流地帯」を読んで内容を知っているので以上のように考えましたが、「泥流地帯」について何も知らない人の目にとってこの表紙はどう映るのでしょう？　小説の世界とリンクするのか、書店で初めてこの本を手に取った人はどう思うのか…。気になったので「泥流地帯」を読んだことのない知人に表紙の印象を尋ねてみました。(読んだことはないけれど、明治～大正頃の北海道の話、程度の認識はある人です)

すると、

・全体的に怖い印象
・空の色→人の意志が燃えている
・山→自然と共存することを諦めない
・黄色→何かが「無」になってしまった
・手前の木→黄色の線を超えて生えてきたのは、何かに立ち向かう人の意志の表れではないか

こんな回答が出てきました。不思議なことに、独自の印象を持ちながらも「泥流地帯」と結びつく部分があるのです。特に鋭いのは黄色部分が分断ではなく、「無」を表現しているのではという点…。一度は泥流に流された地が「無」になったことと繋がっており、そして小説内では無から有が生み出たという点において、その解釈のほうが小説との関連として自然かもしれないと感じました。

「土塊」はその絵自体の意味を知らなくても、本を手に取る人に「泥流地帯」の世界を十分伝えている、それどころかストーリーをも予感させている、と驚くばかりです。

推測の域を出ませんが、「土塊」という作品が単なる偶然ではなく、「泥流地帯」の内容と深い関連性を持って選ばれた可能性が高いことがますます明らかになったように思います。

6. 糸園氏であった理由

今回のリサーチを通じて、「泥流地帯」という作品の装丁画に込められた意味や、デザインの背後にある意図を探ることが出来たように感じます。が、いざ文庫化にあたり数多の作家の中から糸園氏を見つけ出す事は困難に思われます。ですので、経緯は不明ですが作品の発表年から(「土塊」の発表は昭和 56 年(1981 年)、「泥流地帯」文庫版の初版は昭和 57 年(1982 年))元々、糸園氏という作家に目星をつけていたと考えるのが自然でしょう。

何故糸園氏に着眼していたか、ということに

ついて作家の経歴と作品を見ているとなんとなく合点がいきます。私の想像ではありますが糸園氏と三浦綾子氏は遠い存在とは思えません、むしろどことなく似ている心の形をしているように感じるのです。特に、病気を患いながらも一貫して作品制作に尽力する姿勢、戦時下を生きてきたからこそ平和への強い祈りや叙情を作品に込めている点など、共通しているように思われます。だからこそ互いの制作する作品において縁があったのではないでしょうか。

糸園氏は存命中に完成した文庫版を手に取ったでしょうか。三浦綾子氏のことを知っていたでしょうか。この文庫版「泥流地帯」が、お互いがお互いの作品にとってぴったりだ！と思えたものであったのなら素敵だなと思います。どちらも作家が心血を注いで制作した作品なのですから…。

7. 最後に

今まで本の装丁画は当たり前にそこにあるもので、意味や意義を気にしたことがありませんでした。が、調べてみるとここにもきちんと小説のエッセンスが感じられるものなのですね。装丁画は、その小説作品への入口でありその世界観や空気を巧みに伝える重要な要素であることを強く認識しました。さらに、装丁デザインは単に絵を選ぶだけでなく、その作品や作家が持つ人生的な背景にも影響されている可能性があることにも気づかされました。

皆さんは今一度、文庫版「泥流地帯」の表紙を思い浮かべてみてどんな感想を抱きますか？ ストーリーをご存知の方はきっと色々なシーンが頭に浮かぶかもしれません。私はたくさんの人々の死と絶望から奮起する人々のことを想像してしまいます。表紙を見るだけで色んな事を連想させられますね。

そして逆に内容から絵の理解を深めることも可能ではないでしょうか。

「泥流地帯」は災害を扱った作品でありながら決して非情なだけの作品ではありません。確かに多くの犠牲や被害、厳しい現実を人々は突きつけられます。しかしその中で何とどう向き合い生きてゆくのかという意志を描いた作品でもあり、同時に人の温かな気持ちを感じられるシーンが沢山あります。「土塊」は一見、恐ろしさをも感じる絵です。ですが「泥流地帯」の内容を思うと、「土塊」は重苦しい雰囲気を持ちつつ、色使いやタッチからほんのりと温かみを醸し出していることに気付かされます。

表紙に着目したことで、文庫版「泥流地帯」という作品について今までより深く入り込むことが出来た、そんな気がします。

私は今回、装丁画とその作家という点に着目しましたが、この文庫版「泥流地帯」を未来に残そうと文庫化に関わった方は他にも多く存在するでしょう。その全ての方に感謝したいと思います。

改めて、この表紙を入口にして多くの人々に「泥流地帯」「続泥流地帯」が手に取られること、そしてその背後にある深い意味を感じ取ってほしいと願っています。

（最後に、今回この作文を書くにあたり質問させて頂いた、大分県立美術館さま、新潮社編集部さま、（株）花田美術さま、貴重なお話を頂き誠にありがとうございました。）

『泥流地帯』に学ぶ――大正から令和へ
（開拓者が百年後に託したこと）

松野　富子

三浦綾子著『泥流地帯』は今から42年前の昭和57年に新潮社から出版された作品である。

実はその前の昭和51年に北海道新聞日曜版に連載、さらに続編の『続泥流地帯』は昭和53年に連載されていたそうだ。

昭和～平成～令和の現在まで世の中の移り変わりは意外に早く、私は昭和の生まれであるが三つの元号（時代）を自分が生きられたことを振り返ると感慨深い。

そんな中で思いがけなく四年前に三浦綾子さんの著書『泥流地帯』に私は出会うことが出来た。その機会を与えてくれたのが「泥流地帯」の作文募集だった。この作品は自分が社会人になってから出版されたようで当時は忙しくて、読書をすることが難しかった。

今回、「泥流地帯」「続泥流地帯」を最初、手にした時は文庫本でもずっしりとした重みが伝わってきた。この作品は出版されてから40年余り経っても今なお読み継がれている「三浦文学」の代表作であると気づいたからだと思う。これまで学生時代に「氷点」「塩狩峠」など読んだことがあったが、著者の三浦綾子さんの作品は物語の描写が映像を見ている様に緻密で、登場人物の存在感があり人として、どうあるべきか――生きる勇気と希望を持ち続けるために人生の「道しるべ」のようだ。

さらに、どの作品も作家・三浦綾子さんの温かい人柄がにじみ出ており、クリスチャン（キリスト教徒）として聖書の「教え」が巧みに描かれていることに気付かされる。

あらためて今回、本作品の『泥流地帯』『続泥流地帯』の舞台は、大正15年の北海道上富良野である。現在の私たちがイメージする上富良野は、豊かな大地と一面のラベンダー畑や四季折々に美しい風景の十勝岳など――壮大な自然を感じさせる大地・上富良野であるが、過去の歴史は開拓と大自然との壮絶な戦いであったらしい。

１８９７年（明治30）上富良野の歴史は、三重県津市の開拓団の入植から始まるが土地が貧弱で度重なる十勝岳の噴火という過酷な経験をしながら開拓は非常に厳しいものだったという――元来、富良野の語源はアイヌ語の「フラヌイ（臭くにおう大地）」が由来であると知り最初、少し戸惑いながら調べると、

臭くにおう大地――とは、まさに十勝岳の爆発で溶岩や大量の地下水が土砂や流木などを飲み込みながら巨大な「泥流」となり硫黄を含んだ泥土が人里の土地を呑みつくしてしまうことを表す。

こうした歴史の中で十勝岳大爆発は、１９２６年（大正15）5月24日、死者行方不明者１４４名を出したという。この史実をテーマに、作家・三浦綾子さんは小説を書くことを決意し夫の光世氏と共に上富良野へ何度も訪れ取材をした――被災した人々に話を聞いたり、復興までの軌跡を調べるために災禍の痕跡を巡ったと知って私は尊敬の念を抱いた。（後に「泥流地帯」文学碑（草分地区）の前で撮影された三浦夫妻の写真を偶然に見た時、私は感銘を受けた）十勝岳噴火報道では、

大正十五年五月二十六日　北海タイムスの新聞の見出しより――

「硫黄山爆発し

上富良野原野泥の海

死傷者中判明したもの約百餘名

倒壊戸数約五十戸水田被害甚大」

当時の報道を現代の私達が見ても緊張する。

北海道上富良野に入植（開拓）して30年――過酷な開拓を経てようやく手にした豊かな実りと細やかな安らぎを「山津波（泥流）」が、一瞬にして人々の暮らしを奪い去る。

果たして作家の三浦綾子さんは、大正噴火（15年5月24日）の史実を題材に本作品の『泥流地帯』に登場する人物をどのように描くのだろうか・・・と思いながら読んだ。

すると偶然にも一九七七年6月20日号の（週刊朝日）の「わたしの原点」を発見した。

――三浦光世、即ちわたしの夫は、わたしを世に送り出してくれた強烈な梃子であり、協力者である。彼もまたキリスト者で、常にわたし

の精神的指導者でもある。

この春出版した『泥流地帯』は三浦の周辺から生まれた。三浦の父は、三浦が四歳の時に死んだ。三浦の母は、三人の子供を親たちに預けて、髪結い修業のために農村を離れた。

三浦の兄は器用で、自分で茶ダンスや本箱をつくるほどだが、これが『泥流地帯』の主人公一家の拓一なる人物となって、あらわれている。

また三浦を育ててくれた祖父は、家伝薬を作って、医師に遠い地域の人たちに重宝がられた。旧約聖書に詳しく、三浦はその旧約聖書の物語を、おとぎ話に聞いて育った。祖母も心がやさしかった。

三浦から聞いていたそうした家庭が、『泥流地帯』の一家を作り上げた。

この一家を、北海道の中央にある、十勝岳の山麓にある村に移して書いた『泥流地帯』は、わたし自身、いままでの作品の中で、最も好きな作品である。それは三浦一家を通して知った、開拓農への深い関心があったからかも知れない。

――

この文章は、三浦綾子さんが当時『泥流地帯』を執筆するまでの秘話を語ってくれた。まさに本作品の『泥流地帯』では中心となる石村家の人々（拓一、耕作、富、良子、佐枝、祖父・市三郎、祖母・キワ）が忠実に描かれており、目の前にいるような存在感がある。

祖父の石村市三郎は、故郷の福島から夢を持って北海道開拓農民として上富良野に入植して三十年もの長い間、苛酷な労働と生活に耐え続けたが自分の土地を持つことが出来ず、小作を続けている。長男の義平は冬山造山で木の下敷きになって三十二歳の若さで亡くなり、未亡人になった母の佐枝は札幌に出て髪結になるために働いている。

祖父母のもとで温かく見守られながら育つ主人公の拓一は小学校六年、十五歳の姉・富、十歳の弟・耕作、六つの妹・良子の六人で暮していた。幼いころに父を失い、母は遠く離れた札幌で働いており、なかなか会えない。それでも拓一をはじめ幼い兄弟姉妹は、貧しくても慎しく健気に振る舞い、幼な友達と交流しながら育っていく姿を見て感心した。

やがて月日が経つと、拓一は徴兵検査を受けて甲種に合格。頭のいい耕作は代用教員として小学校の教壇に立てるようになった。

しかし、大正15年5月24日。突然、轟音がひびき、十勝岳の大爆発という悲惨な災害がとうとう発生する――

「ドドーン」

不気味な大音響とともに、山津波（泥流）は目の前に物凄い勢いで激流となって押し迫り、市三郎（祖父）・キワ（祖母）・良子（妹）の三人を呑みこんだ。

拓一と耕作は呆然と突っ立った。丈余の（一丈＝約三メートル余り）の泥流が、釜の中の湯のように沸き、躍り、狂い、山裾の木を根こそぎ抉る。バリバリと音を立てて、木々が次々に濁流の中に落ちこんでいく。樹皮も枝も剥がし取られた何百何千本の木が、とんぼ返りを打って上から流されてくる。助けを求めて人が流れる。馬が幾頭も流れて行く。

「じっちゃん、ばっちゃん」、そうして妹の良子の三人の骨肉を助けようとして、「お前は母ちゃんに孝行せ」と弟に告げて泥流に飛び込んだ拓一――この場面は何度読んでも息をのむ迫力で、著者の三浦綾子さんだからこそ描くことが出来たのだと思う。

正篇の『泥流地帯』では十勝岳噴火の泥流による人々の受難を史実に基づいて描かれている。

大正十五年七月十一日――。この書き出しで続篇は、泥流災害によって死んだ人々の村葬の様子から始まり衝撃を受けた。

何故、著者の三浦綾子さんは本作品を正篇と続篇に構成をしたのだろうか――という思いが漠然と私はあったが『続泥流地帯』を読んでいくと作品に込められた思いが少しかもしれないが分かった気がした。それは、泥流災害で祖父（市三郎）・祖母（キワ）・姉（富）・妹（良子）が亡くなってしまった。

――耕作に三浦綾子さんは回想させる――

ふるさとの福島を離れて、はるばる北海道までやって来た祖父たちが得たものは何だったのか。苦しい開拓の仕事と貧困だった。さらに息子の事故死と嫁の佐枝との別離。幼ない孫たちを抱え、祖父母は一層農作業に励んだ。一番上の孫（富）が嫁に行き、拓一と耕作が、ようや

く一人前になり、末の孫も十五になって、やっと生活にゆとりらしいものができそうになってきた頃、いっぺんに、何もかも押し流された。一生懸命に耕してきた畠も、地獄のような石河原になってしまった。これから拓一が進もうとしているのは、あの流木の散乱する、硫黄と硫酸で荒れ果てた泥田だ。なぜ、こんな苦しみを、ずっと負わなければいけないのか。と耕作は考える。

　奇蹟的に助かった拓一は、朝から晩まで、泥田の中で流木整理に全力を傾けた。

　上富良野起債反対同盟会主催による、村民大会でも大半の人々が土地の復興に否定的である中で、拓一は会場で正直な意見を述べた。

「ぼくは、自分の家や、祖父母や妹が、あの泥流に飲み込まれるのを、山の上からこの目で見た。馬も畠も、一瞬にのまれてしまう姿をぼくは見た。そしてぼくは、その命を救おうと、泥流の中に飛び込んだ。だが、ぼくは、祖父母や妹を助けることができず、自分自身、一日気を失って眠っていた。」

　さらに、拓一はつづけた。

「三十年前、一本々々の木を伐り倒し、あの土地を肥沃な畠に変えた祖父母たち、その苦労を思えば、ぼくは、復興せずにいられないんだ！」（「続泥流地帯」より抜粋）

　この拓一の熱い思いは、そのまま現在の「豊かな大地・上富良野」になるまで、開拓に関った人々のフロンティアスピリット（開拓者精神）に、つながっている。

　作品の終盤に近づいて続篇のテーマとは、何だろう――と考えた。すると拓一と耕作の母・佐枝が登場し聖書の中でも難解なヨブ記の一節について耕作と会話するのは、

〈神より福祉（さいはい）を受くるなれば、災禍（わざはひ）をも亦（また）受けざるを得んや〉について、

　泥流に会い、家族も、田畑も一挙に失い、その上、拓一が足を怪我した。

　善因善果、悪因悪果の考えによってヨブ記は、ますます難しい。終りの場面で、今度は拓一、耕作、修平（叔父）と佐枝が再び聖書の教えについて話したのは、

「修平さん、わたしには上手に説明できませんけどね。今、拓一が言ったように、人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と思って歎くか、試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか」

「しかし、正しい者に災いがあるのは、どうしてもわかんねえなあ」

修平が呻くように言った。と、拓一が言った。

「叔父さん、わかってもわかんなくてもさ、母さんの言うように、試練だと受け止めて立ち上った時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか。俺はそんな気がするよ」

　明るい声だった。

　拓一の明るい声は、人生に対する「希望」と「勇気」が感じられて清々しさがあった。

　改めて著者の三浦綾子さんが『続泥流地帯』で読者の私たちへ伝えたかったテーマは「苦難の意味」ではないかと考えた。

　最後に、この『泥流地帯』、『続泥流地帯』を読んで北海道の開拓の歴史を再確認すると共に、今日の豊かな上富良野の大地は、十勝岳の大噴火という災害を乗り越えてきた先人による「賜物」であると深く心に刻みたい。

未来を暗示した
「泥流地帯」「続泥流地帯」

（ペンネーム）　くうりん

「泥流地帯」「続泥流地帯」の基になったのは、大正十五年五月二十四日に発生した泥流災害だった。この事件をネットで検索すると、必ず出る言葉が「未曽有」。意味は「今まで一度もなかったこと」（「角川国語辞典」）なのだが、もはやこれも異常気象の前では「死語」になりつつある。それだけ日本各地で災害が頻発していることを実感する。

私の住む町でも以前、土砂災害があった。ゲリラ豪雨によって猛烈な雨が降ったのだが、そのせいで山の斜面が崩れ、土砂災害となって民家を直撃したのである。その民家に暮らす家族は「早く逃げないとまずい」と感じていたらしいが、土砂が来るのが予想以上に早かったせいで流されてしまった。結果一人の生命が奪われてしまった。

当時、マスコミが殺到し、事故現場をカメラで撮影していたことを思い出す。自衛隊や消防団、警察も来て、被害現場の土砂を必死によけていた。テレビでも報道され、我が町は瞬く間に有名になった。きっと被害に遭った人たちは大変だったろうと思う。

土砂ではないが、先日は能登半島で猛烈な雨が降った。仮設住宅が床上浸水するような雨量だったので、濁流に流されてしまう人が出た。現在テレビで報道されているが、行方不明者の中に中学生が含まれているのが痛々しい。

能登半島は今年の一月に震災に見舞われたばかりである。追い打ちをかけるような災害に、テレビのインタビューで「天災ではどうしようもない」と諦めがちな人がいた。震災で仮設住宅住まいを強いられ、さらに床下浸水や濁流による被害が重なれば、だれだって諦めの気持ちが出るのは当然だろう。

その意味で、「泥流地帯」「続泥流地帯」は将来の日本の姿を暗示していたのではないか。泥流によって住まいや田圃を駄目にされ、生きる希望を失う人たちがいれば、反対に「それでも生きよう。生き延びよう」という人たちがいる。

今回の能登半島でも、震災によって店を畳んだり、他の地へ移り住んだりする人がいる一方、「地元でもう一度頑張りたい」と瓦礫や木材を必死に片付ける人たちがいた。「泥流地帯」「続泥流地帯」で言えば、前者は村の人たちであり、後者は石村兄弟だろうか。前者は「真面目に生きている俺たちがどうしてこんな目に」と思い込んでいる。後者は「そんなのは関係ない。生きるしかないんだ」と思う。その違いは大きな差となって彼等に覆い被さっていく。

この作品は旧約聖書のヨブ記をベースにしていると言われる。私は聖書を読んだことがあるが、ヨブ記は難しくてよく理解できなかった箇所だった。改めてヨブ記に関するサイトを調べてみると、次の記述を見つけた。タイトルは「旧約聖書・ヨブ記から学べる４つのこと」。以下にその四つを列記してみる。

１　神様は「あなた」が祝福を失い、苦難のなかにあっても神様への信仰を保ち続けることを望んでおられます。

２　理由もわからず、苦しみに耐え続けなくてはならないこともあります。

３　蔑まれてきた人や助けた人から蔑まれ、親しい友人から辛らつな言葉を聞くこともあります。

４　人は神様の思いを知ることはできません。神様に全てを委ねるのが信仰です。

１は納得である。「神は人が越えられない困難は与えない」という言葉通りだ。信仰の大切さを教えているのだとわかる。三浦綾子もキリストに帰依した人だから、きっとこの学びは理解しただろう。

２は「あれっ」と思う。苦しみに耐え続けるのはともかく「理由もわからず」という点が問題だ。物事には全て理由があり、眼前の事象は過去の貴方の行いによって左右されているという「因果応報」の思想ではない。理由がわからないまま苦痛を強いられるのは堪らない行為でしかない。そして、まさに「泥流地帯」「続泥流地帯」に登場する人物たちは、２の学びがストー

リーにも生かされていることを知る。

３も問題だ。「良い行いをすれば良いことがある」と私たちは信じているが、そうではない。「良い行いをしても報われないことがある」わけである。だったら、良い行いの意味や価値はどうなるのか。神はそんなに理不尽なのか、と思う。

親切にした人に裏切られたり、助けた人に蔑まれたり。「泥流地帯」「続泥流地帯」にも同じシーンがある。現実にもある。助けた相手が強盗に寝返ったり、信頼した相手に騙されたり。保証人になったら相手が借金をして逃げてしまったり。仏教の教えと根本的に違うのは、２，３の学びであろう。

「泥流地帯」「続泥流地帯」が読んでいて辛いのは、救われてほしい人がなかなか救われないからではないか。私たちは、正しい行いをする者が悲惨な状況に陥ること自体、受け入れがたい。だからディズニー映画は必ずハッピーエンドだし、救われないミステリーは「イヤミス」と言われるのだ。

小説を読むとき、私たちは主人公に感情移入しながら読む。苦難に遭えば私たちも同じ目に遭う。喜びを感じれば同じように歓喜に浸る。「泥流地帯」「続泥流地帯」が辛いのは、辛いシーンに感情移入するたびに虚無感や喪失感を感じるからではないか。特に、繊細な感情を持つ人には辛い読み物だろう。

一方、「泥流地帯」「続泥流地帯」が読み継がれる理由はここにある。読者に感情移入をさせ、あたかも泥流に飲み込まれた体験を味わう。それは異常気象が跋扈する現代では貴重なシミュレーションである。

「泥流地帯」「続泥流地帯」は、私たち人類をきっと救ってくれるはずである。

凡人、石を穿(うが)つ

（ペンネーム）　ぽっちゃり八兵衛

≪オマージュ（パクリ）元『続泥流地帯』（雲間）第四節　起債反対村民集会の場面より≫

「ほかにございませぬか」

この読書会の主催者で、司会を務める五十がらみの男性が優しげに皆の発言を促した。市民センターの一室で、司会者と向き合い、教室のように並べられた会議テーブルにそれぞれ一人から二人ずつ、僕を含め三十人をゆうに超える参加者がそれぞれ小説『泥流地帯』を手に、その多くが満足そうな顔を見せている。

今日は普段と趣を変え、小説『泥流地帯』の主人公・石村耕作の兄、石村拓一の魅力にテーマを絞り、かつ、すべての参加希望者を受け入れたため、いつもは馴染みの七、八人でこぢんまりと行われる読書会はかつてない数の参加者で溢れ、異様な熱気に包まれていた。

「三浦文学最高最強のスーパーマン」

「とても拓一の真似はできない、私にとって永遠のヒーロー」

「野辺の送りの場面のように拓一が裸馬に乗って駆けつけてくれる日を夢みている」

「絶望的な災害から上富良野を復興させた英

雄。百年語り継がれるべき存在」
「今も災害に苦しむ地域に拓一がいてくれれば」

各々が三浦綾子文学屈指の人気者で憧れのスーパーヒーローに在らん限りの賛辞を述べた。

僕は会場の熱気に気圧され、何も発言できずにいたが、超人・石村拓一への強い憧憬を、会場の多くの参加者と共有できた気がして、甘い陶酔感さえあった。

「では、ご意見もございませぬようでありますから……」

司会者が言った時、前方にぬっと立ち上ったワイシャツ姿の男がいた。

「どうぞ」

司会者はにこやかに促した。が、男はじっと突っ立ったまま、何も言わない。

「どうぞ」

再び司会者が言った時、はじめて男の声がした。

「ぼくは、あんたがたと少し意見がちがう」

僕ははっとした。Bの声だった。

途端に会場がざわめいた。Bはざわめく参加者のほうに少し体をねじり、更に反対側に体をねじった。

「石村拓一とういう男は、ほんとうに超人、スーパーマンなのだろうか」

Bが言いかけるや、怒号が飛んだ。

「何だとおうっ！」

「阿呆っ！」

「すっこんでろ！」

僕の胸はたちまち動悸した。Bはぐいっとふり返って、参加者に向った。そのBの気魄に会場が少し静まった。

「そうだ、ぼくは阿呆だ。だが阿呆の話も少しは聞いてくれ。長い話はしない。ぼくの生家は、北海道の上富良野にある。ぼくたちの先祖はかつて、大正十五年の泥流災害で何もかも流された。原生林を人力で切り拓き、鼻の穴がねばつく氷点下二十度の夜をせんべい布団で凌ぎ、貧乏に貧乏を重ね、ある者は夢破れ土地を捨て、ある者はその地に命を落とし、入植から三十年かけてようやく、小さな小さな、今のぼくたちから見たら本当にちっぽけな安息を得たその瞬間、まるでそれまでの苦労が夢だったかのように、ありとあらゆるものがみんな、泥流に流されてしまった」

Bの声には深い悲しみがあった。参加者はさすがに静まり返った。Bは涙でもこらえるように、ぐっと天井を仰いだが、

「生き残ったぼくたちの先祖が、災害から一晩明けて目にしたのは、茶色い泥の海と、何メートルもある巨木がまるでマッチ箱をひっくり返したように敷き詰められた田んぼだった」

声を励ましてBは続けた。

「あんたがたが読んだ小説『泥流地帯』にあるように、上富良野の開拓者たちは、その死んだような土地に再び鍬を入れた。今のようにブルドーザーやダンプカーもない時代に、火を落とせばポッと燃える様な、硫黄を含んだ死の土に新しい土をかぶせ、何年もかけて土壌改良をして、とうとう元のように豊かな作物が稔る、美しい土地に蘇らせてしまった」

「だからスーパーマンだっての！」

「奇跡の復興ってやつじゃねぇか！」

誰かが叫ぶ。

「確かに奇跡なんだろう。だがぼくらの先祖はスーパーマンではない。ただ身を立てることを願った農家の次男や三男坊、故郷で借金をこさえて逃げるように北海道開拓に赴いた者もいる、誰もが平凡な人間だ」

「ちょっとそれ暴論じゃねぇの！」

「いや、開拓団にゃ先物で大やけどして逃げてきた者もいたっていうからなぁ！」

怒声が連なる。

「もちろん実際の上富良野に石村拓一はいなかった。開拓者ひとりひとりが、反対派の批判に耐え、誰が止めるのも聞かず、何の報いもないかもしれない作業に、背中がみりみりするほどの重労働に没頭した。泥海に沈んだ死の土地に、毎日毎日鍬をふるい続けたんだ。上富良野の≪二度の開拓≫と称される復興に、超人や英雄なんて一人も関わっちゃいない。スーパーヒーローが起こした奇跡なんかではなく、ただ、そのとき、その場所に居合わせてしまった、名もなき平凡な人たちが成し遂げた偉業だと思わずにはいられないんだ！」

僕は、石村拓一を称賛するための読書会に

来て、堂々と異論を述べるBの空気の読めなさに、辟易と感動が混ざりあったような、妙な気持ちにさせられていた。
　と、その時司会者が言った。
「何分、時間も迫って参りましたので、お説はまた伺うといたしまして……」
　Bは、くるりと参加者に背を向け、司会者に目を向けた。
「いや、もうひとことだけ言わせてもらう」
「しかし、時間も迫っておりますれば……」
「若僧ひっこめ！」
　片隅から、誰かが叫んだ。と、うしろから、
「聞こうじゃないか！」
　という声が飛んだ。
「場ちがいだあっ！」
　誰かがまた叫ぶ。僕はいても立ってもいられぬ思いだった。
「司会者ひっこめー！」
「若僧ひっこめー！」
　たちまち会場内は騒然となった。あれを言いこれを叫び、収拾がつかない。その怒号の中に、Bは仁王立ちに立って微動だにしない。
　先程、もっとも石村拓一への愛情ほとばしる話をした常連の婦人が、つと立ち上り、司会者を手招きし、何か耳にささやいた。と、参加者が少し静かになった。司会者は口をひらき、
「では、なるべく短かめにお話し下さい」
　と、迷惑そうにBを促した。Bは悪びれずに話をつづけた。
「拓一は、同じなんだ。スーパーマンでもカリスマでも、英雄でもない。畠や田んぼが流されたから元に戻す。そんな当たり前のことを馬鹿みたいにやってのけた、上富良野の素晴らしい凡人たちと同じなんだ！」
「拓一のどこが凡人なんだ！」
　会場がざわめき、ヤジが飛び交う。
「小便もままならぬほど夜闇を恐れ、喧嘩相手を片っ端から殴りつけ、流行りのファッションを身に纏い、初恋相手の一挙手一投足に心を奪われる。拓一は喧嘩っ早くて気さくで面倒見のいい、普通の若者ではないのか。家族を大切にし、よく働らき、貯蓄をし、愛する人を想い、故郷を復興する。誰にも真似のできないことなど何もやっていない。普通のことしかしていないんだ」
「それを続けるのがすごいんだろうよ！」
「そうだ、そうなんだ。拓一の凄さは当たり前のことを、当たり前にやるべきことを、周囲の声や置かれた状況に関わらず、ただやり続けられること、この一点に尽きるんだ」
「何が言いてぇんだ！」
「先ほどの弁士の中に、拓一の真似など到底できないと言った人があった。拓一のようなヒーローが現れるのを日々夢見ていると言う人があった。しかし、ぼくは言う。三浦綾子さんは、拓一みたいな完璧な兄貴や恋人がいないと、拓一みたいな超人が復興に取り組まないと、ぼくたちは幸せになれないと言いたかったのだろうか。いつか拓一みたいな英雄が現れるのを待って、ぼくらは鬱々とした日々を過ごさねばならないと、そう宣告したかったのだろうか。ぼくはそうは思わない。石村拓一はどこにでもいるんだ。あんたらの周りにもすぐに現れる。いや、すでにもう近くにいるのかもしれないのだ。もっと長い目で見てはもらえないものだろうか」
「口のうめえ野郎だ！」
「現れなかったらどうするーっ！」
　容赦のないやじが飛ぶ。
「その時はあんたがたが石村拓一になるんだ。ぼくだっていい。オリンピック選手のように足が速くなくても、アカデミー俳優のような演技力がなくても、博士みたいな知識がなくても、誰だって石村拓一になれるんだ。普通のことをひたむきに、真面目に続けてさえいけば、耕作にとって拓一がそうであったように、誰かを救い、導く存在になれると、三浦綾子さんが教えてくれたんだ。もう一度言う。誰もが拓一になれるんだ。もしなれなかったら、ぼくは首をやる」
　言うなり、Bはその場に坐りこんだ。
「そんな若僧の首なんかいらねぇーっ！」
「もらいてえのは、吉田村長の首だあっ！」
「村長って何の話だあっ！」
　叫ぶ会衆を司会者は両手でおさえる身振りをし、
「これをもちまして、今日の読書会を終らせて頂きます」
　と、閉会を宣言した。

人々はざわざわと立ち上った。
ややしばらく僕は立ちすくんでいたが、いつしか人波に押されていた。押されながら僕は、泣けて泣けて仕方がなかった。『泥流地帯』を読んでいない者や石村拓一を愛していない者は、ほとんどこの会には出ていない。その中で、Ｂは、大胆率直に自分の意見を披瀝（ひれき）した。その勇気と真実な生き方が、僕の胸を打ったのだ。
（Ｂさん、ごめんな）
Ｂの感想を、半分迷惑に思い、演説がいつまでつづくかという思いさえあった。が、己の首を賭けてでも万人を拓一たらしめるというＢの言葉に嘘はないことを、今夜のＢの姿に僕は思い知らされた。
木戸口で下足を待つ参加者たちが、口々に何か話し合っていた。
「ああいうのがいるから困る」
という声が右で聞えたかと思えば、片方では、
「なかなか、変態的な読み込みをする読者だ。今時の者にしては珍しいぞ」
「全くだ。少し考えなおさんきゃなあ。俺も」
などという声も聞える。
僕は暗い外に出た。頬に風が寒いことも、街灯の光も、葉を落したナナカマドの実の赤いこともわからず、僕は呆然と歩き続けた。
歩きながら、僕はＢの言葉を何度も何度も反芻していた。ほんとうに、僕が拓一になれるのだろうか。ほんとうに拓一のような、石を穿つ鋼の信念を、この僕が、僕のような凡人が持ち得るのか。にわかには信じがたいのだ。
石村拓一は作者の三浦綾子さんをして理想の人と言わしめた、三浦文学屈指の人気キャラクターだ。そう、キャラクターなのだ。百年続けようが利子にも届かない竹筒貯金も、徒労に終わるであろう作業に何年も費やそうという気持ちも、三浦綾子さんが我々読者を楽しませようと、ワクワクさせようと、考え、生み出してくれた架空のスーパーマンだからこそできる行動なはずだ。
「言いたいことは、解らんでもないけど、ね…」
ひとりごちて、煙草に火をつけようと身を屈めたが、風に邪魔されどうしても火がつけられない。僕は別に誰が見ているわけでもないのに悔しげに口を尖らせてみせ、いちど口に咥えたタバコを再び箱に戻し入れた。
ふと、掌にある、何屋かもわからない店名と福助のイラストがプリントされた安物のライターを見つめながら僕は考えた。今、煙草一本を我慢することの、なんと簡単だったことか。
次の一本ももしかすると、また口を尖らすだけで我慢できるのではないだろうか。要はさっき自分がしたことと同じことをすればいいのだから。何も特別なことなどないはずだ。
拓一の生き様に照らすなら、次の一本も、明日の二十本も、今と同じように一本ずつ我慢すれば良いのではなかろうか。
この一本の積み重ねを際限なく続けられる。Ｂの言う「拓一の信念」の正体がそれであるなら…果たして、僕も…。
そう思うと、十年以上幾度となく試みては挫けてきた禁煙というものさえ、妙に簡単なものに思えてきた。
一本の煙草を我慢しただけであの拓一に近づいたような気になる自分の単純さに、つい吹き出しそうになる。しかし、なぜだか僕の足取りは徐々に軽くなった。
単純な奴だと笑われてしまうだろうか。
だが、ついさっきまで空想上のスーパーマンであったはずの拓一が、僕の人生の延長線上にいるような気がしてきた。
幾度も幾度も想像し、心に描いてきたあの人懐っこい笑顔をこちらに向けて、待っていてくれているような、そんな気がした。

今なお新鮮に

（ペンネーム）　置時計

私が三浦文学と出会ったのは、かれこれ四十年余前のことである。当時の私は大学進学をあきらめ高校を卒業した後、就職はしたもののモラトリアム期が続いており転職を重ねていた。そうした私の生活ぶりを見かねた親族の勧めで、周囲から「卒業しても就職はないぞ」という心配する声を押し切って、二十一歳で新聞奨学制度を活用して大学に進学する道を選んだのである。

朝夕の新聞配達に慣れはじめた一回生の夏、図書館で偶然手にしたのが『泥流地帯』だった。乾いた大地に雨が降るかの如く、私は図書館へ通い、三浦文学を手にしていたことを思い出す。

今回、『泥流地帯』と『続泥流地帯』を読み直し、真っ先に当時を思い出したのが、耕作が中学への進学をあきらめた後の次の場面である。

「エンジョイだ、エンジョイ。先ず青春はな」と一人の中学生が言い、他の中学生たちも同調する。耕作は頭を昂然と上げてぐいぐいと歩き（中学に行かなくても、あんな奴に負けないぞ）と思うが、やはり何となく惨めだ。私の場合は嫉妬もあったように思う。

私にとって大学生活はイコール新聞配達だった。夕刊を配達している時にすれ違う大学生は、私にとって別世界の人たち（裕福な人たち）のように映る一方で、耕作があんな奴には負けないぞと思ったように、私が努力する原動力ともなった。

今の新聞奨学生の実情は分からないが、当時は新聞配達を辞めてしまう学生が少なくなかった。理由はそれぞれだが、私の知る限りでは大学のサークル活動ができないことや仲間と遊びに行くことが出来ないといった理由だったと記憶している。私自身、やめてしまいたい、逃げたいと、何度も挫折しそうになった。しかし、三浦文学とあるひとりの教授との出会いが「退学」を踏み留めさせてくれたことを思い出す。

H教授は、私を直接励ますようなことは言わないが、講義中に「学生のなかには働きながら学んでいる者がいる。彼の頑張りは真似のできることではないが、きっと今の苦しみは将来の糧になると思う。あきらめないで将来希望する道に進んでほしい」と何度も話してくれた。私は最前列で講義を聞きながら涙を隠すのが精一杯だった。

『泥流地帯』のなかでは、授業参観に来ていた視学が「頑張って勉強し給えよ、人間の一番の勉強は困難を乗り越えることだ」と、耕作に声をかける。教師からのひと言の重みを感じる場面だった。

耕作も生徒の立場から教師の立場へと自らが成長する過程で、何人かの教師と出会っている。なかでも菊川先生との出会いは、中学に進学できなかった耕作の人生を正しく導いてくれたのではないだろうか。菊川先生は耕作を褒めるばかりではない。間違いを正してくれている。

耕作が益垣先生に対する愚痴を菊川先生に話した後、菊川先生が耕作を注意する場面だ。

「権太が叱られた時、お前、権太の家の事情を言ってやったか」

「いいや」

「なして言ってやらんかった。叱られている本人は弁解がましいことは言いづらいが、お前は叱られている本人じゃないんだからな。先生に事情をはっきり言ってやればよかった。益垣先生は札幌育ちだからな。農家の事情は詳しくわからん。しかし、事情が分かれば、益垣先生だって怒りはしなかっただろう」

耕作は自分を顧み、自分の心の中にある卑怯ということに気づくのだ。教師に限らず、年長者が年少者を導く際、単に意見を押し付けるのではなく、本人が気づくように諭すことができるどうかではないかと、改めて教えられた。

私が大学を卒業する際、高給を期待できない仕事を選択していることを知った周囲の人たちから、「何のために大学まで行ったんだ」と批判されることがあった。そのように言われると私自身も心が揺らいだ。

『泥流地帯』では、耕作が中学の進学をやめて菊川先生と同じ道を歩むことを拓一に話した際、祖父市三郎の言葉を思い出す。

「成功者というのはな、自分がなりたいと思っ

た者になれたら、それが成功者だ。金を儲けなければ成功者でないと思うのは、それは大まちがいだ。金を儲けるよりも、有名になるよりも、誠心誠意人のために生きる者になれたら、それは成功者というものだ」

そして拓一と話しながら教師になることを決断したのだ。

『続泥流地帯』のなかでは、軍隊の休暇で帰ってきた国男が流木を片付ける拓一に「苦労させたくない」という。それに対して拓一は

「ここに米が稔るかどうか、少なくても三年経てばわかるだろう。三年経ってもし稔らないとわかったら、その時は俺も諦める。すると人は言うだろう。その三年の苦労は水の泡だったってな」

「そりゃあそういうさ」

「しかし、俺はね。自分の人生に、何の悔いもない難儀な三年間を持つという事はね、これは大した宝かもしれんと思っている」

「実りのある苦労なら、誰でもするさ。しかし、全く何の見返りもないと知って、苦労の多い道を歩いてみるのも、俺たち若い者のひとつの生き方ではないのか。自分の人生に、そんな三年間があったって、いいじゃないか。オレはね、はじめからそう思ってるんだ」

私は拓一の言う「大した宝かもしれん」と「自分の人生にそんな三年間があったっていいじゃないか」という言葉にずいぶん気持ちが楽になったように記憶している。

さて、『泥流地帯』と『続泥流地帯』では貧富について考えさせられる。

時代背景があるだろうが、一番の成績で中学受験に合格した耕作が、姉冨と武井隆司の話を聞いてしまい、「ねえちゃんば、嫁にやって」と祖父市三郎に言い、市三郎が耕作を両手で抱きしめる。貧困は進路さえも寛容ではない時代なのだ。

福子が実父巻造の借金のかたに深雪楼へ売られてしまう。芸者として生きる覚悟を決めた福子が上富良野神社の祭礼の山車で踊るシーンがある。貧富を象徴する場面だ。

「死んでしまいたい」という福子に自死を留めさせていたのは、福子が耕作に向けて話した「身体が腐っても、どこが腐っても、心だけは腐らせたくない」と人間の本質を思い続けていたからではないだろうか。『続泥流地帯』のラストシーンで福子は深城の長女節子によって深雪楼から逃げることが出来たが、狭い村社会のなかでは、仮に拓一が福子を連れ出したとしても、二人が幸せな人生を送ることはできなかったように思う。

私は三年遅れで大学に進学し、何度か挫折しそうになったが、それでも希望する道に進むことが出来た。もし、三浦文学と出会っていなかったら違う人生を歩んでいたように思う。きっと、私と同じように救われた人は少なくないのではないだろうか。

今回、私は『泥流地帯』と『続泥流地帯』を読み返しながら、自分の人生と重ねながら、改めて生きることの意味について考える機会となった。そして、今、「心だけは腐らせたくない」と言った福子の言葉を噛みしめている。

今月発生した能登半島豪雨災害の映像が当時の十勝岳の大爆発による被害を受けた富良野の人たちと重なり、いたたまれない気持ちになってしまった。一人でも多くの人の命が救われることを祈るばかりです。

節子と耕作

（ペンネーム）　ニモ

石村節子は寝室の引き戸を静かに少しだけ開けて、顔をそっと上げた。先に目覚めて起きている義母が家の戸口を開け放ってくれたのだろう、十畳の部屋には朝の空の色がいっぱいに満ちていた。節子は後ろで寝ている夫を起こさないようにほっと息をつくと、開けた戸の隙間から体をすべらせて寝室を出た。

節子は石村家の朝が気に入っている。節子の実家と違い石村家にとって朝は一日の始まりで、家全体が静かながらに生気をたたえ、これから起きてくる者たちを迎えようとしているように感じる。そんな空気のなか足音を立てないように台所へ降り、節子はポンプを押した。水に含まれている金気を切るためにこの家の人が施した工夫を見ながら、節子はいつもこの土地を生きる人々の苦労を思う。顔を洗って外へ出ると、ちょうど義兄の田んぼに風が渡って耳に心地よい音が鳴っていた。もうそろそろか。まだもう少し先か。節子には稲を刈る時期のことは詳しくわからない。

「きれいだわ」

心に湧いた思いがそのまま声に出た。のぼったばかりの朝日を浴びて金色の稲穂が風に揺れるさまは、胸を打つほど美しかった。

きらきらした金色の光を目に焼き付けるまで堪能して満足したあと節子が朝食の支度をしていると、引き戸が開いて夫の石村耕作が寝室から駆けるようにしてよろめき出た。

「ごめん、寝坊した」

この世の終わりのような声で言う耕作を節子は見つめ、

「大丈夫よ。まだ六時よ」

と落ち着いて答えた。耕作は黙って土間に降りて顔を洗うと、寝巻きのまま七輪の前にかがみ込んだ。朝食の準備をしようとしてくれているのはすぐにわかったが、節子は思わずため息をつきそうになった。

「耕作さん、きょうは日曜日よ。そんなに焦らないでゆっくり着替えてきて。いつも私より早く起きて準備してくれているじゃない」

「いつもというわけでない」

と小さくつぶやいて、耕作は七輪の前を動こうとしない。

「でも、福ちゃんだってまだ寝てるんだし」

「うん。だから節子さんも寝てていいんだ。あとはおれがやるから」

有無を言わせない口調に節子は黙った。だけど、でも、と喉元までせりあがる言葉を飲み込み、節子は笑顔を作ってみせた。

「ありがとう。じゃ、他のことさせてもらうわね」

それまで固かった耕作の表情がやっと少し緩んだのを見て、節子は台所をあとにした。

日曜日は、農家をしている節子の義兄石村拓一を除く石村家の全員が休みである。義母の石村佐枝は特に休みが決まっているわけではないが、日曜日は必ず休むと決めていて、朝食の準備もきっぱり手伝わない。早く起きて自室で聖書を読んでいるのである。それが佐枝にとって大切な時間であることを知っているので、日曜日の朝は佐枝以外のみんなで手分けして食事の準備をすることにしている。

「あら、耕ちゃんありがとう」

いつもより遅めに起きてきた石村福子が、朝食が置かれつつある飯台を見て柔らかい声をあげた。気の張っていない、素のままの声だ。節子は読んでいた医療の本から顔をあげ、福子に朝の挨拶をした。ひとつ年下の義姉である福子は、ふんわり微笑んで節子に挨拶を返す。二人より遅く起きたことも、朝食の準備に関わっていないことも、後ろめたく思う様子もない。

（こうでいいのよ、本来は。できる人が無理せずやればいいのよね。どうして自分だけで負おうとするのかしら）

節子の視界の中で耕作はきびきびと動き回り、五人分の食事を台の上に整えていた。

「おはよう、みんな。おはよう福ちゃん」

拓一が田んぼから戻ってきてよく通る声で挨拶をした。額にうっすら汗をかいている。朝から働きに出ていた拓一を三人がねぎらった。

「うまそうだなあ」

手を洗った拓一は箸を出したり、鉄瓶をストーブから下ろして台に運んだりと当たり前のように耕作を手伝い始めた。節子が耕作を見ると、平気で拓一に手伝われている。どうして、という思いがまた節子の中に湧いてくる。どうして拓一はよくて、自分は駄目なのだろう。この態度の差はなんなのだろう。

「節子さん」

知らぬ間に節子の隣に座っていた福子が小声でささやく。

「その、目が……怖いわ……」

節子は我に返って耕作から目を逸らした。またやってしまった。福子に小声で謝ると、福子は節子よりもばつの悪そうな顔で小さく首を横に振った。昔から無自覚に、節子は視線に感情を乗せてしまう。結婚してからも何度か目だけで耕作を怖がらせているので、節子は自分のこのくせを改めなければと思っていた。

「ねえ、あとで話したいわ。いい？　福ちゃん」

小声で尋ねると、小さく福子はうなずいた。

佐枝の部屋の戸が開き、家族五人がそろい、日曜日の朝食が始まる。

義務を終えたようにすっきりした笑顔の耕作を、節子はできるだけ見ないようにして食事をとった。

耕作と節子、拓一と福子は同じ日に結婚し、佐枝とともに同じ家で生活を始めた。節子には産婆の仕事があり、福子も旭川で働き続けているので、この家の人たちはみなそれぞれ違う仕事を持っていることになる。もともと家事に協力的だった耕作と拓一だったが、ある時節子が仕事で遅くまで帰宅できない日が続いたことをきっかけに、耕作が節子に代わって家のことをするようになった。忙しい日はそれが嬉しかった節子だが、明らかに節子に余裕がある日でも耕作が全部やってしまうので、だんだん心苦しくなってきた。何を言っても耕作は譲らず、自分が家にいるあいだは節子に家事をさせようとしなかった。

「耕ちゃんてね、真面目すぎるところがあるから……」

「そうよね、わかってるわ。ただ、少しずつ耕作さんとの距離が遠くなっていっている気がするのよね」

耕作が戸外で拓一を手伝っているあいだ、節子と福子も洗い物をしたり洗濯物を片付けたりと手を動かしながら話をする。五人も生活していれば休みの日も家のことは尽きない。耕作の目の届かないところでは節子も家事ができるのだった。

「自分でも、耕作さんにどうしてほしいのかうまく言葉にできないのよ。助かってるのは事実だものね。無理しないでほしいとは、いつも言ってるんだけど……でもそれ以外にも言いたいことがある気がするの」

福子がうなずく。

「耕ちゃん、無理はしてない、っていつも答えてるものね。ただわたしも聞いていて、なんとなく歯がゆい気がしてるわ」

福子が自分と耕作の会話を聞き、気にかけてくれていたことが節子は嬉しかった。

「今朝ね、拓一さんは食事の準備を手伝ってくれてたでしょう。なぜ耕作さんはそれについては何も言わなかったのだと思う？」

「それは、兄弟だから……」

福子が困ったように笑うと、節子はうなだれた。

「だけどわたしだって妻なのよ。お客さんじゃないわ」

「耕ちゃん、少し不器用すぎるのよ。わたしもそういうところがあるからわかるの……でも」

福子は洗濯物を畳む手を止めて節子を見た。

「二人で、思ってることを話し合ったほうがいいと思うわ。いつかは」

節子はうなずいた。

「喧嘩になってしまうかもしれないけど」

「喧嘩したっていいと思うわ」

拓一との間に喧嘩のけの字も見えない福子が言うのが可笑しくて、節子は少し笑った。

「そうよね、夫婦だものね。福ちゃん、聞いてくれてありがとう」

福子が優しくにっこり笑い、節子の笑顔も優しいものになる。こんな表情を耕作に最後に向けたのはいつだっただろうと、節子は考えた。

耕作は小走りで帰り道を急いでいた。仕事を

できるだけ早く終わらせようと毎日努めており、今日もいち早く職員室から抜けようとしたところ、花井先生に呼び止められて時間を食い、しかも最終的に口論のようになってしまった。いい気分ではなかったが、引きずられている場合ではなかった。早く帰って食事の準備をしなければならない。最近は母と、仕事から帰ってきた福子と分担して食事を作ることが多かった。

『そんな言い方ないでしょう』

お菜の内容を考えながら帰りたいのに、花井先生の傷ついたような声が頭から離れない。耕作としては花井先生と世間話をしている暇はなく、端的に聞かれたことに答えていただけなのだ。それが花井先生の気に入らなかったのか、突然『節っちゃんは本当に幸せそうにしてるの？』などと聞かれてかちんと頭に来た。幸せかどうかは本人にしかわからないでしょう、ですが幸せにしますよ必ず、と今日一番低い声で耕作は答え、それがますます花井先生の気に障ったのだ。耕作はいらいらする気持ちをふりほどくようにさらに歩みを速めた。頭の中に別の人物が二人ちらつき始める。亡くなった自分の姉富と、その夫だった武井隆司の姿だった。耕作は立ち止まって十勝岳のほうへ顔を上げ、大きく息を吸って吐いた。自分のやっていることは間違っていないはずだ。胸の中で確認すると、耕作はまた大きく足を踏み出した。

「ただいま帰りました」

久しぶりに夜遅く帰宅した節子の声が心なしか暗かった。お帰りなさい、お疲れさま、と家族のみんなが労い、耕作もお帰りと声をかけたが、節子の瞳にまっすぐ射抜かれて次の言葉が継げなかった。帰宅早々強い目を向けられるのは初めてのことだった。

「遅くまで大変だったわね」

やさしい声で佐枝が言うと、ぱっと視線を耕作から外し、節子は笑顔で佐枝にありがとうと答えた。それからはすぐにいつもと変わらない節子に戻ったので、耕作はほっとしたような、それでも不安なような気持ちでそわそわと落ち着かなかった。

二人が寝室に下がると、節子はとたんに口数が少なくなった。耕作は不安が的中したと思った。

（おれは何をしたのかな）

最近の自分の動向を振り返ってみたが思い当たるようなことがない。自覚なしに何かをしてしまったに違いない。謝りたいと思ったが、言ってもらわなければ謝りようもない。

「……節子さん、おれは何かしてしまいましたか？」

耕作は時々節子に対して敬語に戻ってしまう。

節子は耕作を見て「え？」と目を丸くした。予想外のことを言われた反応だ。では自分が何かしたのではないのか？そうであればなぜあんな目をこちらに向け、今は黙っているのか？

聞きたいことが聞けずに耕作も黙り込んでしまうと、節子は小さく息をついた。

「違うのよ。ごめんなさい。今日、病院で……産まれてすぐに赤ちゃんが亡くなってしまったの」

話しながら、節子の目から涙がぽろっとこぼれ落ちた。

「わたしは産んだお母さんの、肩を撫でることしかできなかったわ。お母さんは……呆然として……涙も出なくて……」

節子は唇を噛みしめたが、涙はこぼれ続けた。

そうだったのか。産婆というのは尊い仕事だと思っていたが、こんな悲しみにも直面するのかと耕作は動揺した。

「それは、かわいそうだったね……」

「こういうことがあるのは知っていたつもりだったけど、実際に亡くなった赤ちゃんと、お母さんを見ると、もう……」

節子は肩をふるわせて泣いた。産婆は節子が望んで就いた仕事で、耕作も心からその選択を尊敬している。しかし、どんなに大変でもめったに涙を見せなかった節子がしゃくりあげて泣くのを見ていると、耕作は胸がざわざわとしはじめた。

「節子さん、無理に働くことはないよ。つらい思いを繰り返さなければならないんなら、辞めたっていいんですよ。ぼくの収入で暮らせないことはないんだから……」

耕作がやさしく言いながら節子の背中を撫でると、丸くなっていたその背中が突然硬くこわばった。節子は顔を上げ、信じられないものを見る目つきで耕作を見た。涙で濡れた睫毛がランプの光を跳ね返している。
「……どうして？」
問いかけた節子の声は低かった。
「どうしてそうやって、わたしから取ろうとするの？あなたが『つらそう』と思ったもの全部」
耕作は言われた意味がわからず、ただ節子の声音にすっと血の気が引くのを感じた。
「わたしが収入のためだけに仕事していると思ってるの？」
涙で顔を濡らしたまま低く問う節子の目は据わっており、耕作は慌てて首を横に振った。
「そんなことは言っていない」
「そんなふうにも聞こえたわ」
「ぼくは、ただ、節子さんがつらくないようにと……」
「それよ」
節子はもう泣いてはいなかった。強い目がまっすぐに耕作を捉えていた。
「わたしはたとえつらいことがあったとしても、あなたにそれを除いてもらおうと思ったことは一度もない。なのにあなたはそれが自分の役目であるかのように一生懸命除こうとするわ」
普段の家事のことも言っているのだ。やっと耕作は気がつくと、節子に向かって座り直した。
「ぼくには、責任がありますから」
節子は眉をひそめた。
「なんの責任？」
「あなたを……、幸せにする……責任……」
耕作は真っ赤になってしどろもどろに答えた。節子は衝撃を受けたように目を開いて黙り込んだ。ずっとそれを思って行動してきたのに、いざ口にすると滑稽に聞こえる気がして、耕作は冷や汗がドッと出るのを感じた。節子はなぜ黙っているのだろうか。節子のためを思ってやっていることだと明言したはずなのに、こんなにも言葉が薄っぺらく聞こえるのはどうしてだろうか。
次に節子から放たれた言葉で耕作は完全に打ちのめされることになった。
「申し訳ないけど、今夜はあなたとは一緒にいられません」
そう言うと節子はすっと立ち上がり、呆然とする耕作の前で素早く軽い荷物をまとめて部屋を出て行ってしまった。
どういうことだろう、居間か母さんの部屋でも寝るのだろうか。耕作が回らない頭で思っていると、玄関の戸が開いて閉まる音がした。
「花井菓子店に行ったよ。だから大丈夫」
拓一が馬を厩に入れたあと、笑顔で戻ってきた。結局耕作はあのあと自分で節子を追いかけることができず、どうしようもなくなって兄の部屋の戸を叩いた。拓一はすぐに馬を駆って節子に追いつき、説得しようとしたが、「おれではどうにも」ならなかったという。せめて泊まる場所まではと馬に乗せて送っていき、帰ってきたのだ。
「も、もう戻ってこないだろうか」
耕作は自分の憔悴しきった声を情けない思いで聞いていた。
節子がこれまでの人生において、家を出るということになんのためらいもなく、はっきりとした意思をもって遂行してきたことを思うと、戻らない可能性は無いと言えなかった。
拓一は困ったような顔をしたあと、にこっと笑って耕作の肩を叩いた。
「大丈夫だべ。明日、学校で花井先生に節っちゃんの様子を聞いてみて、帰りに店に寄らせてもらえばいい」
「いや、兄ちゃんで駄目ならおれが説得できるはずがない」
耕作があまりに絶望して言うので拓一は思わず笑った。
「何言ってる。おれと違っておまえは夫だぞ」
耕作は居間の床に座り込んだまま、動けなかった。
夫。夫とはなんだろうか。妻を幸せにできなければ夫とはいえないと思い、節子にできるだけ負担がないようにと心を配ってきたつもりだったが、それが節子を自分から離れさせてしまった。
「何もせずに、何も言わずにいればよかったのかな……」

「違うわ」
突然福子の声がして耕作は驚いた。
部屋からそっと出てきた福子は拓一の隣に座り、耕作をじっと見た。
「もう少し、話さなくちゃならないのよ」
「話すって……」
「耕ちゃんも、節子さんも、お互いにしてもらったら嬉しいこととか、反対にしてもらったら嬉しくないこととか、そういうことをもっと日頃から口にするといいと思うのよ。それがないまま に相手を思いやろうとしても、独りよがりになってしまうんでない？」
独りよがりという言葉が耕作の胸にずしりと響いた。だが、よかれと思ってやっていることがなんとなくから回っているような気もしており、それをごまかすためにますます躍起になっていたことはたしかだった。だから花井先生の言葉に腹が立ち、節子に見据えられて不安になったのだろう。
生徒に話すときはいつも言葉がすらすらと湧いて出るのに、節子を前にするといつも別の人間になったかのようにうまく心のうちを話せない自分がいることは自覚していた。それでも話すべきなのだろう。帰ってきてくれるかどうかは別として。
「……おれと結婚してよかったって思ってもらいたかった」
うなだれた耕作の口から、自分でも気づかなかった本音がこぼれ出た。拓一が再び耕作の肩を叩く。
「大丈夫、大丈夫」
「それをそのまま伝えてあげられたらいいわね」
福子がやさしい笑顔で言った。

花井先生によると、節子は花井菓子店を訪れた翌朝荷物を持って旭川に出勤したという。
「何も置いていかなかったから、今夜またうちに来るということはないと思うわ」
花井先生は半分睨むような目で耕作を見た。
「そうですか……すみません」
「わたしに謝ってもだめよ」
「いえ……昨日の先生への言い方も、申し訳なかったと思って」
耕作がしおれているので、勢いを削がれたのか、花井先生はふうとため息をついてあわれむような目で耕作を見た。
「節っちゃんが何を望んでいるのか聞いてあげることね。あの子も、自分で言わなかったのが悪かったと言っていたけど……」
耕作はパッと顔をあげた。自分も悪いところがあったと言っていたということは、節子は耕作への怒りだけで心が満ちているわけではないということか。心に光明が差したようで、耕作は花井先生に何度も頭を下げてお礼を言った。
耕作はその日仕事をできるだけ早く切り上げ、旭川へ向かう汽車に飛び乗った。なんとしても節子と会って、話さなければならない。花井菓子店に戻るつもりがないということは、節子はもしかすると旭川で宿をとるつもりなのかもしれず、耕作はそれだけは避けたかった。ひとりで外泊するのは危険すぎる。
旭川の向井病院に着くと、耕作は迷惑を承知で受付に、自分は石村節子の夫で、彼女を待っているので退勤したら待合室まで来てほしいと伝えてほしいとお願いした。受付の女性は少しの間黙っていたが、わかりましたと承諾してくれた。
待合室で具合の悪そうな患者たちに混じり、耕作は肩を小さくして座っていた。処置室や廊下の端から絶えず看護婦たちが早足で歩いてきては扉の向こうに消えていく。耕作の職場には無い種類の緊張感が病院内に満ちていた。耕作は昨夜の節子の話を思い出し、改めて命を預かる重さを思った。
「耕作さん」
一時間以上経っただろうか。足音が近づいてきたかと思うと節子の声がすぐ上で聞こえ、耕作ははじかれたように立ち上がった。普段着の節子が、昨日出て行った時と同じ荷物を抱えて立っていた。
「節子さん、あの、話が……話をしたくて……」
自分の上ずった声がなんと格好悪いことかと思いながら、それでも耕作は自分を見上げる節子から目を逸らすまいとした。
「話を、させてくれませんか……お願いします」
受付の女性や待合室の患者たちの視線を感

じながら、耕作は節子に向かって深く頭を下げた。少しの間があったあと、頭の上から声がした。
「わかったわ。でもここではできないから、移動しましょう」
怒っているようでもない、静かな声だった。

夜の常磐公園は人もまばらで、以前訪れたときの賑わいが嘘のようだった。街灯の灯りがぼんやりとあたりを照らしている。
「そこのベンチでいい？」
「はい」
耕作は節子が示したベンチに、節子に体半分ほど離れて座った。
静かな公園の空気は耕作の心を少しずつ落ち着かせてくれた。耕作は息を吸って横を向くと、節子に語りかけた。
「……あのね、節子さん」
節子は黙って耕作を見上げた。こういう時くらい身長が逆転してもいいのにと耕作は思った。
「昨日は、その、昨日だけでないけど、独りよがりになっていて、すみませんでした」
節子は少し眉間にしわを寄せた。
「独りよがり……そうね、独りよがりね」
「それで……その……もしよければ、教えてくれないだろうか、おれがあなたにしたら嬉しいこととか、反対に嬉しくないことを、日頃から……なぜかというと」
もう薄寒い季節に差しかかっているのに耕作の顔や首や背中からは汗がどんどん噴き出してくる。言おうと決めたことは言えなくなってしまう前に言わなければと、耕作は顔を真っ赤にして声をあげた。
「おれ、あなたにおれと結婚してよかったって、思ってほしいから……」
節子が目を丸くし、数秒の間沈黙があった。
「昨日は、わたしを幸せにする責任があるとか言ってたけど」
「ごめんなさい。それはあまりにも傲慢だった……そう思って必死になっていたことは事実だけど、本音は今言ったことです」
「本当に？」
「……本当」
耕作が節子の視線に耐えきれずにうつむくと、こぼれるような笑い声がした。
「よかったわ。わたし、あなたが昨日と同じ考えのままなら、絶対に家に戻らないと思っていたわ」
節子が笑ってくれたのが嬉しくて、耕作の頬もゆるんだ。自分ひとりではきっと節子とこうやって話をするに至らなかっただろう。昨日拓一と福子が話を聞いてくれて本当によかったと耕作は思った。
「……わたしもね、あなたに言われるまでもなく、伝えなければいけなかったのよ。あなたにこういうことをされると嫌だとか、もっと一緒にこういうことがしたいとかね。だから」
節子は耕作に頭を下げた。
「わたしも、ごめんなさい」
「おれにされて嫌だったことは、昨日みたいな言動と、家事のことですよね？」
耕作が尋ねると、節子は頷いた。
「そうね、昨日は今まで溜まっていたものが爆発しちゃったんだと思うわ。わたしはただ、耕作さんに寄り添ってもらえれば十分だったのに、仕事を辞めたらいいと言われて」
「それが独りよがりだったんだな……」
自分に置き換えて想像してみることすらしなかった。耕作も教師の仕事をしていて大変なことがあったとしても、だったら辞めればいいなどとは言われたいと思わない。
「ごめんなさい」
「わかってくれたら嬉しい。わたしも、わかってほしいことをできる限り伝えるわ。それが耕作さんにとって難しければ、わかるのは難しいと伝えてほしいわ」
「……わかりました」
全部わかろうとする必要もないのか。耕作は肩が少し軽くなった気がした。
「家事はもう少し、助け合えるやり方を探したい。そりゃ、わたしのほうが通勤に時間がかかるし、仕事が終わるのが遅くなることはよくあるけど……全部あなたがやっているから、あなたの負担のほうが気になってしまうわ」
節子が家事のことを切り出したので、耕作は節子の方へ体を向けた。
「……あの、節子さん、おれ、姉ちゃんのことを

よく考えてしまうんだ」
　節子は口を閉じて首をかしげた。耕作はずっと誰にも言わなかったことを初めて打ち明けた。
「おれの姉ちゃんは、好きな人と結婚したけど、家の人が意地悪で、つらい仕事ばかりさせられて全然幸せそうでなかったんだ。死ぬ一年前に嫁ぎ先の家を出て武井さんと二人で鉱山に行くと決まった時は、やっと嬉しそうな顔見せてくれたけど、それまでは泣いたりしていて……だから、おれは……節子さんにはそんな思いを、してほしくなくて……」
「そうだったのね。ありがとう」
　節子はやさしく答えてくれた。富が十勝岳の爆発で亡くなったことは節子には話していたが、こまごまとした思い出までは話したことがなかった。
　風が吹いてすぐそばの木がさわさわと鳴った。
「寒くない？」
「大丈夫よ」
　耕作は腰を上げて少しだけ節子のほうへ体を寄せた。
「……これはね、想像でしかないけど、お姉さんはね」
　節子は前を見ながらつぶやいた。
「ただ不幸せというわけでもなかったと思うわ。つらいこともたくさんあっただろうと思うけど、でも……それだけではなかったと思うわ。どうしてかというと、武井さんがいたからよ」
　耕作は節子を見た。節子も耕作を見た。
「わたしは、あなたにつらいことを取り除いてもらおうとは思わない。だけど、つらいことがあっても、あなたがいるからがんばれると思うのよ」
　風がまた木を鳴らしていった。
　耕作は体温がドッと上昇して汗が噴き出した。
　そんなふうに思ってくれていたのか。何か言わなければと口を開いたが、何を言えばいいのかわからずにまた閉じてしまった。
「もっとこうやって話すべきだったわね」
　照れたような笑顔で節子が言うので、耕作はなぜだか泣きたいような気持ちになった。
「節子さん……ごめんね。これからは独りよがりでない、思いやりを、あなたに対して持てるようにおれはなりたい」
「耕作さん、あなたに対しても、わたしはそうでありたいのよ。そのことを忘れないで、わたしにされたら嬉しいことや、嬉しくないことを、あなたもわたしに伝えてくれなきゃいやよ」
　耕作は頷いた。頷いたときに涙がひとつこぼれた。節子の前で泣くのは初めてのことだったが、自分でも驚くほど安堵していた。
　節子は小さな子が泣くのを見るような表情で、耕作の背中を優しく何度も撫でた。
「……帰りましょうか。すっかり遅くなってしまったわ」
「うん」
　同時にベンチから立ち上がると、節子は空いた手でためらいなく耕作の手を握った。耕作の胸がいっぱいになる。
　公園にはもう誰もいなかった。手をつないだまま、ふたりで歩き出す。
「駅まで少しだけあるね」
「散歩にちょうどいいのよ」
「夜の散歩だね」
「歩くあいだ、わたしの好きなものの話をしてもいい？」
「それはいいな」
「あのね、朝早く起きたときの、お家の中がね……」
　声を落とした二人の会話が続いていく。時折笑い声が混じる。上富良野の家では拓一と福子と佐枝が二人が帰るのを待っている。
　簡単にはいかないことが、これからもきっとあるだろうが、今日のことを忘れずにいればそれは希望になるに違いないと耕作は思った。つないだ手に耕作がそっと力をこめると、節子は耕作に向かって幸せそうに笑いかけた。

「泥流地帯」読後―喪失から希望へ―

（ペンネーム）　メランポディウム

ここ何年か、読書をしていない。この作文コンクールが本を読むきっかけになればと思い、「泥流地帯」を手に取った。

拓一が便所に立つ冒頭部分の「今夜のこの闇の中では」「新雪をかぶって稜線をかっきりと見せている十勝連峰の一劃も、全く見えない」は、これから起こる大噴火を想像させたものの、その後は美しい情景描写が印象に残った。

「ナナカマドやウルシ、山ぶどうの葉が、燃えるように赤い。落葉松が黄金色に色づきはじめ、白樺の葉も黄色くなった。山合に見える十勝岳に、今年も真っ白に雪が来て久しい」秋の描写は、植物に詳しくなくとも、豊かな色彩が目に浮かぶ。

「東には白雲をかぶった十勝連峰が、所々中腹に雲をなびかせて、間近に秋陽に輝いている。西のほうには、芦別岳の鋭い山稜もくっきりと白い」も雄大な景観を想像させる。

自然の中で生きる、子どもたちの詩も楽しく読んだ。圧倒されそうな夕焼け、カエルの鳴き声をユーモアに捉えたところ、「まんま」が炊けた坂森五郎の嬉しさも伝わった。

日の出、夕日に向かっていくカラスを「日追い鳥」と見習うところもいい。私の自宅周辺では朝夕、けたたましいカラスの鳴き声を聞くが、「明るい光を求めて生きて」いると考えると、とても前向きな気持ちにさせてくれる。そんなカラスであるが、売られて行く福子を追って、拓一が馬を鞭打って駆けた日の「切ないほどに美しかった」「カラスの帰る金色の夕空」には、なすすべのない状況が伝わり、悲しいばかりだった。

耕作の家庭は、小作の半分を年貢に取られ、経済的に苦しい。しかし、「悪いことして罰が当たらんのが、一番の罰かもしれんな」と言う市三郎や、札幌、小樽、函館と場所を変え病気になりながらも十一年間家族のことを忘れずに生きている母の佐枝がいる。拓一と福子も、進路を選択する余地のない状態だが、運命を受け入れる芯の強さを感じさせる。

この作品は、少年から大人に向かう耕作が視点人物であるため、悩んだり迷ったりすることが多い。だからこそ、「めんこいな」に始まり「カラスのぬれ羽色」まで思うようになる福子と、「おれが嫁にもらってやる」と言ってしまったことから意識している節子との間で揺れ動く、耕作の心情にドキドキした。

「小学校の三年生になったら、もう大人と一緒に働らく」耕作が握り飯を食べるときに思う「ゴマ塩しかつけていないのに、何といううまさなのだろう」「塩をつけただけの握り飯だが、この上なくうまい」には、食べもののありがたさ、働いた後の美味しさに共感することができた。

中風になったキワを皆で支え、家のすぐ前に新しい風呂を作った。拓一と耕作が餅をつき、いい年越しを迎えた。佐枝も上富良野に着く日を知らせ、キワと良子の髪を結うのを楽しみにしている。母を覚えていない良子のはしゃぎよう。先生になった耕作に、好きだと伝えた節子の家出。三重団体の苦労も知った。

これからどうなるのだろうと、読むスピードが上がっていった。いつの間にか、本の題名も忘れていた。大音響の様子を見に拓一、耕作が裏山に登った後、あっという間に市三郎、キワ、良子、拓一が泥流に呑みこまれた。今まで読んできた内容、積み重ねてきた年月が白紙になったような感覚だった。自然を愛でながら作品を読んできたが、その自然に淘汰されてしまった。喪失感から抜け出すのに時間がかかった。拓一が生きていたのは耕作にとっても、読者の私も救われた。

私の近所にはコブシの木があり、ピンク色の実がなっている。その向かいのキリスト教会前で、聖書の言葉が掲示されていて、月ごとに変わる。今月は「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です」とあり、読後の私の心に響いた。

授業参観で耕作に声を掛けた視学の言葉も思い出す。「人間の一番の勉強は、困難を乗り越えることだ」

どのように拓一と耕作が困難を乗り越えていくのかを見届け、二人の母である佐枝に会う。「続泥流地帯」もまじめに読んでいきたい。

いまに居る、或るまで

（ペンネーム）　佐々木 戸桃

昨年十月某昼間、日ごろはテキストでのやり取りの殆どの母から、電話が鳴った。
「どうしたの。今、外で手が離せないんだけど。メールしてくれたら助かる」
「メールではよくないの」
「何？」
「だから…こないだ言った家のこと。不動産からさっき連絡があって…文字にはできにくいの。お金のことも細かく言われて…直接話したいから、折り返せる？」
「あー、はい、わかりました。三十分位あとかな、かけ直します」

所用を済ませ静かな場所に移動し、母へ折り返すと、実家そばにある手入れのみ続けていた祖父母宅において、ありがたいことに土地ごと買い手がついた、という。祖母亡きあと、祖父は独居を好み約二十年暮らしたのち旅立ち、そこから既に十三年が経過していた。
そしてかの連絡を受け僅かひと月の間、わたしは秋を感じるいとまもなく、祖父母宅の最後の片付けと点検・仏壇のお迎え・三重への墓参を体験した。

離れて住む母と久しぶりの二人きりの時間はいつになく増え、祖父母宅から一気に引き上げた昭和時代の書類や写真を分類しつつ自然と思うのは、泥流地帯、という作品のことだった。お恥ずかしながらわたしは、読み込んでいる、とはお世辞にも言えぬ浅はかな読者である。
わたしは唐突に母に、かねてよりの本音を打ち明けた。
「ねえ、『泥流地帯』なんだけど…読み始めるといつも混乱しちゃって中断したり、気に入っているところばかりの繰り返しになっちゃうの。おばあちゃんから聞いた話しと、登場人物のフィクションがないまぜで。貞次郎おじさんはそのままだし、《節子》はせっちゃん（祖母の妹）にどこか似てる面もあるから。脳内で行き来するのが辛いというか」
母はするりと答えた。
「それは当たり前よ」と。

救われた。

幼き頃、放課後に面倒を見てくれていた祖母からよく聞いた上富良野での生活。祖母は三重団体の一員として入植しており、体験した泥流の話し以上に、その暮らしぶりについてはどれもこれも、北海道という未知のあり方を教えてくれた。祖母はユーモラスな一面があったゆえ、あえてわたしを笑わせようとしたのか、それとも祖母は本気で（けったいな）と数十年思い続けていたのか、教えてくれたエピソードのうちどうしても忘れられぬものがある。
「春になって雪が溶けると、道ばたにいっぱいうんちが出てくるの」
「え…それって、にんげんの？」
「もちろん。雪の上で用を足したものは冬のうちは隠れとる。雪が溶けるとそのま～んまの形で出てくるよ。うふふ」
「北海道って、そんなことしていいの？」
「さぁわからんけど、我慢できんしどうせ見えんしで、したんでしょう。ようさん出てくるからね、一つ、二つ、またあったわ、って数えながら、うっかり踏まんようにするの。ふふふ」

こうした生々しさやひと臭さは、『泥流地帯』の安易にきらびやかな美へ逃避せぬ描写にこそ通ずるものがある。その作者・三浦綾子先生の後押しを受けるかのごとく続けよう。

子ども時代から家主の祖父が亡くなるまで、数えきれぬ思いが多々詰まった家。業者が丁寧に片付けてくれた何も残らぬそこは、明け渡しの直前、もはや土足で上がれる状態だった。
夜。
母と懐中電灯を手に、すべてを見届けようと試みたものの、最も奥の部屋は怖くなり、阿吽で「もういいね」と、後にした。出てから思わず振り返り家を見ると、まっすぐな月の光りに

照らされ、なんと綺麗だったことだろう。
「ありがとうございました」
　無意識に手を合わせ、月と家とを一枚の写真に収めた。それから程なくして、わたしは母と二人で三重へ行き、現地で慣れぬレンタカーを借りて津市内を巡り、菩提寺にて祖母の三十三回忌法要および墓参・家の件の報告をした。

　無事に母もわたしもそれぞれの家に戻り、すると数日して、母から「家ね、更地になったわよ」と連絡が入る。
　それはまさしく、着実かつ堅実に見知らぬ人様の手にわたった、という意味があった。
　追い打ちをかけるように母からは度々報告があり、いよいよ「土台ができてきてね、とっても素敵な家になさるみたい。見に来ない？」と誘いを受けた。

「いや」
　もうおじいちゃんとおばあちゃんの家じゃないもの。知らないかたのお家だもの。こっそり見に行くのも失礼になると思うし。とにかく、わたしは嫌。

　誘われては断り、ついぞ母は、「わたしはそのあとを見届けたいんだけど、母娘でも感覚は全く違うものよね。うんうん。ごめんね。帰ってくる時も、無理はしないでいいから」と、そっとしておいてくれるようになった。
　もう落ち葉がびっしりとアスファルトを覆い、東京の冬が見え始めていた。

　その辺りからか、【わたし自身】がどうもいつもと異なって不可思議なことに気がついた。一気に物事が起き一つずつをこなしたものだから、その疲労だろうと括り、眠りを多く得るようになった。文字が読みにくくなった。綴りができなくなった。挙げ句、「死にたい」と、思ってもいないのに何故かその四文字が沸き起こる、ということを自覚した。

　祖父母宅が形を無くしたのは、立派な喪失体験だった。

　専門医にかかりつつ、本来の自分へと回復し戻って来たのは、つい最近のことである。

　それまでの間、
三重団体の田で収穫された米から酒が生まれ、著名な方々による素晴らしい朗読会が開かれ、学生たちのコンクールでも作品朗読がなされ、
　知る限りのどれもにおいて現実世界のわたしは身を潜めることを好み、一方で並行世界のわたしは、優しく新たな賑やかさを、わたしなりにじっくりと、一つひとつ愛していた。

　何かが丸ごと抜け落ちた秋。

　失せたものがあり、それ故それ以上に、得たものがある。
わたしはいまここにすべてを重ね、生きている。
それは奇跡と表すには歯痒くもあろうから、
因果必然として或るのかもしれない、とし、

　ここからまた緩やかに、わたしを連ねていくことだろう。

フィルム「十勝岳大爆発」（株式会社マツダ映画社所蔵）に関する覚書

岩男香織　協力＝尾田直彪

・序

三浦綾子の小説『泥流地帯』および『続泥流地帯』では、１９２６（大正15）年５月24日の十勝岳大爆発が描かれている。上富良野町の歴史を語る上で欠くことのできない出来事である。

当時の被災状況を記録した映像はビデオ化され、１９７８（昭和53）年５月31日に開館した上富良野町郷土館で視聴できる。[1]

この映像の元となったのは同館収蔵品資料の16㎜フィルム「十勝岳爆発フィルム」（収蔵番号：1384）[2]および「16㎜フィルム」（収蔵番号：2851）[3]と思われる。

本稿では便宜上、同館収蔵資料は（収蔵番号：数字４桁）を併記して紹介する。ご興味がある方は、北海道上富良野町公式サイトから確認してほしい。

トップページのバナー画像「かみふらの郷土館」をクリックし、その後画面をスクロールして下の方にある「収集資料」のリンクをクリックすると資料の検索が可能である。

私は北海道庁が災害調査のために撮影したフィルムを郷土館開館にあわせて収蔵したのだと思っていたが、何も調べず勝手な思い込みをしていたことがわかった。

というのも、今年（２０２４年／令和６年）５月29日（水）18時30分より、第790回無声映画鑑賞会が日暮里サニーホール・コンサートサロン（東京都荒川区）にて開催され、覆面番組「十勝岳大爆発」を鑑賞したからである。

無声映画鑑賞会は、株式会社マツダ映画社内の組織で、同社が所蔵している無声映画フィルムの鑑賞会を毎月開催している。同社のホームページを見るとこの「十勝岳大爆発」の所蔵が確認できた。[4]

フィルムは、今日とは異なり白黒で、ノイズが入って見づらい場面もあった。また出演者のセリフやナレーションはなく、代わりに活動弁士と呼ばれる解説者が状況を説明する（字幕が出る場面もある）。小説やテレビドラマなどで知ってはいたが、実際に体験したのはこの時が初めてである。タイムスリップして百年ほど前の映画館にもぐりこんだかのような不思議な感じがした。何より、フィルムだけではなく活動弁士という職業が今日まで受け継がれていることに心を動かされた。

覆面番組を担当された活動弁士・尾田直彪（おだ・たかとら）氏には、プログラムの解説文[5]の情報だけではなく、終了後に「週刊読売」12月17日増大号（収蔵番号：1447）[6]の記事もご教授いただいた。この世界ではレジェンドと言われる活動弁士・澤登翠氏からは「（50年前なので今日どうなっているかは不明だが）上富良野の郷土館とは特別な契約を結び、館内限定で上映許可を出したと聞いたことがある」と伺った。全て初めて知ることばかりであった。後日調査してわかったことを今回覚書として記した。

小樽新聞や北海タイムスなど、引用文の漢字は原則として旧字体を用いたが、パソコンで変換できない場合は適時新字体を使用した。

前述の通り澤登翠氏には貴重な証言をいただいた。北海道博物館学芸部長・三浦泰之氏には後述する栃木栄吉について様々なことをご教授いただいた。いずれも突然の問い合わせであったにもかかわらず丁寧なお答えをいただいた。感謝の念は尽きない。

上富良野町役場・浦島啓司氏、尾田直彪氏、そして株式会社マツダ映画社・松戸誠氏には、それぞれご多忙であるにも関わらず様々なご協力をいただいた。心よりお礼申し上げる。

・フィルム発見時の報道記録

６月に入り「週刊読売」12月17日増大号を国立国会図書館で閲覧したところ、以下の記事とグラビアを確認できた。

大槻茂　十勝岳大爆発［大正15年５月］の秘録フィルム発見！　p166-168

巻末モノクログラビア　十勝岳大爆発　※

ページ番号記載なし(p176-177)

大槻氏の記事は全部で3ページある。見開き2ページ(p166-167)で当時の被害状況の説明や被災者証言が掲載されており、3ページ目(p168)にフィルム発見の経緯が記されている。

1977年10月、無声映画鑑賞会を主催する松田春翠氏(二代目)の元にカビだらけの35㎜フィルムが届いた。戦前、大阪で映画館を営んでいた女性が疎開先に預けたままになっていたらしい。カビや錆を除去し、16㎜フィルムにリプリントして上映した映像が「十勝岳大爆発」であった。

松田氏は、活動弁士・松田春翠氏の長男で、株式会社マツダ映画社の創業者である。父の跡を継ぎ、活動弁士・松田春翠として活動する傍ら、無声映画鑑賞会を主催していた。

澤登氏の証言を裏付ける文章があるため、以下に引用する。

町教委は十二月二日、さっそくフィルム提供を松田さんに申し入れることに決めた。とかくスローモーといわれるお役所にしては、驚くべき身の軽さである。それだけ、泥流のこわさを知っているのだ。[7]

上富良野町郷土館では、翌日12月7日付読売新聞夕刊(収蔵番号:1451)も所蔵している。こちらも国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを確認したところ、道内版4版5面に以下の見出しを見つけた。

秘録　大正15年「十勝岳大爆発」　泥流〝恐怖のドラマ〟

「週刊読売」12月17日増大号の発売は12月6日[8]であったが、今日でも、北海道では雑誌発売日が都内より1日～2日程度遅れることがある。12月の北海道は雪の季節であり、昔は今より道路事情も流通状況も良くなかったであろう。雑誌よりも7日の夕刊記事の方が先に読まれたことは想像に難くない。やや大きめの扱いで、当時の被害状況がわかる写真も三枚掲載されている。雑誌発売にあわせてこの記事が掲載された理由としては、同年有珠山が噴火し、道内では泥流による二次災害が懸念されていたからである。

さて、「十勝岳大爆発」鑑賞後、浦島氏に第790回無声映画鑑賞会で上富良野町のことや「泥流地帯」映画化プロジェクトが紹介されたことと共にこのフィルムを鑑賞したことをお伝えしたところ、後日次のような内容のメールをいただいた。

浦島氏は「昔の人は仕事が早かった」と驚かれていたが、1978年初には上富良野町教育委員会とマツダ映画社との間でフィルム上映について契約を締結、2月5日には「十勝岳大爆発」16ミリフィルム(複製)が納品されたことが判明した。納品時期と郷土館資料に記された年代は年月日が一致している。

フィルム「十勝岳大爆発」を元に作成したビデオ映像は10月ごろに完成。残念ながら郷土館開館には間に合わなかった。また、映像が初披露された時期についても不明だが、もし映像完成と同時期にビデオ機器が設置されたとすれば、連載中の『続泥流地帯』は「鶏の声」が掲載されたあたりとなるのではないか、とフィルム発見のタイミングの良さに驚かれておられた。[9]

なお、単行本『泥流地帯』(新潮社)は1977年3月25日に刊行され、『続泥流地帯』の連載が北海道新聞日曜版で始まったのは、同年2月26日のことである(～1978年11月12日)。

三浦夫妻が、このフィルム発見の報道を知っていたのか。また上富良野町の郷土館で視聴したとすれば時期はいつか。管見の限り、二人の著作ではフィルム「十勝岳大爆発」に関する言及を見つけることは出来なかった。余談だが『天北原野』では糸屋銀行倒産が描かれており、『嵐吹く時も』では登場人物たちが上富良野町の被災者を案じる場面があるが、本稿では紹介のみに留める。

・撮影時期について

では、このフィルムはどのように撮影されたのだろう。当時の新聞報道も一部紹介しながら見ていきたい。

25日の小樽新聞4面には「美瑛川大氾濫村民避難す」[10]「硫黄山の大鳴動」[11]とあり、読売新聞朝刊3面では「十勝嶽大爆發　死者多數出づ―温泉場も全滅」[12]とある。いずれも写真はないが泥流発生の翌日には報じられている。硫黄が取れることから当時は「硫黄山」の表記が使用されていたようだ。

写真入りで被害状況が大きく報じられるのは26日以降である。一例をあげると、北海タイムス8面には「上富良野惨害グラフキツク」[13]として10種類の写真が紹介されている。9面右上には「硫黄山爆發し上富良野原野泥の海」[14]という見出しがある。この面のほとんどが噴火時の状況や死傷者数、鉄道や電話が不通であることや義援金募集のお知らせなど、被害状況に関する報道である。

この面の右下を見ると「本社活動寫眞班　昨朝富良野の現場へ」[15]の見出しがある。どうやら新聞社の人たちは、写真だけではなく活動写真(＝映画)の撮影も行っており、5月末には道内の活動写真館(＝映画館)で上映されたことがわかる。

当時はテレビどころかラジオすら普及していない。ちなみに日本初のラジオ試験放送が東京高等工芸学校の一室にて開始されたのは、前年1925(大正14)年3月1日のことである。[16]

つまり、撮影されたフィルムは十勝岳噴火の被害状況を伝える報道番組、今日でいわばニュース番組を見る感覚で上映されたのである。

撮影開始から官報に記録が残るまでの状況をまとめると下記のとおりである。

5月26日(水)、早朝、北海道庁保安課警部・浅野、社会課嘱託・西田、上富良野町村役場書記、青年団員、消防組員、北海タイムス社・小樽新聞社の記者および写真班ら20余名は上富良野村を出発。十勝岳に登山し、平山硫黄鉱業所の災害状況、爆発火口を視察。富良野川泥流通過跡を沿って下山。罹災状況の調査を行った(～5月27日)[17][18][19]

5月27日(木)、上富良野町村役場書記ら一行が帰村。[20]

(同日夜、函館で上映[21][22])

5月28日(金)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が札幌市内の活動写真館・美満寿館および松竹座にて開催。[23][24]

5月29日(土)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が活動写真館・美満寿館および松竹座(札幌市)、八千代館および電氣館(小樽市)、美満寿館(旭川市)にて行われる。[25]

5月31日(月)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が活動写真館・若松館、富士館、手宮館(小樽市)にて開催。[26]

6月1日(火)の夜、「十勝岳大爆発」の上映会が室蘭市、帯広にて開催。[27]

6月2日(水)、上富良野村の被害状況が同日付官報に掲載。[28]

※前川公美夫氏の『大正期北海道映画史』(亜璃西社)には、5月27日の函館日日新聞に広告文が掲載されたことが紹介されている。[29]

5月28日の北海タイムス8面に掲載された「本社活動寫眞班硫黄山へ強行登山」[30]の内容を読むと27日晩の上映は撮影スケジュール的に厳しいように思われた。だが、私の方で該当広告文の調査と本文の確認まで力が及ばなかったため(　)で紹介するにとどめたことをお詫び申し上げる。

※尾田氏から下記のご指摘をいただいた。ご指摘の内容は論理的かつ妥当であり、全面的に同意する。今後様々な面で検証がなされることを願う。

お尋ねしたい点は、「小樽新聞」や「北海タイムス」の活動写真班が撮影・制作したニュース映画が、現在残っている「十勝岳大爆発」のフィルムと同じものなのかという問題です。つまり、小樽新聞・北海タイムス・堀内商会がそれぞれ別々の撮影班を派遣し、それぞれ別のニュース映画を製作していた可能性もあるのではないかと思います。したがって、北海タイムスによる上映の記録や撮影の記録によって、堀内商会制作であるところの『十勝岳

大爆発』の撮影日および上映日を推測することは難しいように思います。

・フィルム「十勝岳大爆発」概要

［概要］

・制作年＝１９２６年

・制作＝合資会社堀内商会

・カメラマン＝宮崎潔、アシスタント＝栃木栄吉[31]

・上映時間：7分

・所蔵＝株式会社マツダ映画社

・リプリント初回試写会：１９７７年12月１日　東京都足立区　主催＝無声映画鑑賞会（会長＝二代目松田春翠）

・上富良野町教育委員会への納品日：１９７８年2月5日

［補足］

堀内商会は、１９２１（大正10）年にM・パテー商会出身の撮影技師・堀内喜一が創設。[32]

合資会社設立は１９２５（大正14）年２月14日（登記は同月16日）であることが官報にて確認できた。[33]

北海道帝国大学、北海道庁、樺太庁の指定映画製作所であり、主な事業として、学術・教育・宣伝映画の貸付、販売、出張映写。映写機および附属器具の販売などを行った。[34]

上富良野町郷土館には所蔵がないが、フィルム発見の続報が「週刊読売」１月１日新年特大号に掲載されていることを国立国会図書館で確認した。

制作が合資会社堀内商会、カメラマンは宮崎潔、アシスタントが栃木勇吉と報じられている。[35]

栃木栄吉氏については、三浦泰之氏のご論考「戦前・戦後の北海道を生きた撮影技師・栃木栄吉の生涯：北海道記録映画史序説」に詳しい。[36]

「週刊読売」の記事本文のアシスタント「栃木勇吉」は「栃木栄吉」の誤記と思われるがもしかしたら栃木姓の従業員が複数人いたかもしれない。三浦氏に問い合わせたところ、「当時、堀内商会で撮影助手が出来る栃木姓の人物は、栃木栄吉一人だったと考えられますので、誤記の可能性は高いのではないかとは思います。」というご回答をいただいた。[37]

なお、三浦氏のご論考には、堀内商会の創業者・堀内喜一、宮崎潔、栃木栄吉の三人が一緒に写った写真が掲載されている。[38]

調査を始めた時は、この三人の顔写真を特定するのは無理だと思っていたので「この人たちが命がけで撮影したのだ」と静かな感動を覚えた。

堀内商会については、上記三浦氏のご論考および先に述べた前川公美夫氏の著作に詳しい。いずれも北海道映画史を知る上で必読の資料である。今後、堀内商会および従業員に関する調査が進めば、フィルム「十勝岳大爆発」についても何らかの新資料が出てくることが期待できよう。

最後に気になった方もおられるかもしれないので、鑑賞経緯を記す。

たまたま尾田氏がXに投稿[39]を目にした私は、添えられた『泥流地帯』『続泥流地帯』文庫本の表紙を見て、こう考えた。

『続泥流地帯』は村葬の日の様子から物語が始まる。作品に描かれてはいないが、十勝岳爆発罹災救済会編・発行『十勝岳爆発災害志』（１９２９年）には、当日の夜に活動写真が上映されたことが記されている。[40]

従って、覆面番組は村葬の日の夜に上映された内容に違いない！（できればチャンバラ映画希望！）

当日「十勝岳大爆発」を見終えた後にうろたえたのは言うまでもない。

この無声映画鑑賞会では、大切に保存されてきた様々なフィルムが定期的に上映されているが、「十勝岳大爆発」も複数回上映されてきた。[41]

活動写真を愛する人たちがフィルム「十勝岳大爆発」を大切に保存されてきたことにより、上富良野町の方々だけではなく『泥流地帯』『続泥流地帯』の読者にとっても大切なフィルムが今日に至るまで鑑賞できるのである。

従って、映画「泥流地帯」が上富良野町で上映される時には、是非ともフィルム「十勝岳大爆発」も活動弁士の解説付きで一緒に鑑賞できるように願って、拙文の結びとする。

主要参考文献

当時の時代背景および風俗等に関して参考にした図書資料は多数あるため、主要なものにとどめた。また、国立国会図書館所蔵の小樽新聞、北海タイムスの報道やインターネット検索による調査結果も同様に件数が多くなるため最小限にとどめた。

図書

片岡一郎『活動写真弁士　映画に魂を吹き込む人びと』共和国、2020 年 10 月 30 日

上富良野百年史編纂委員会編『上富良野百年史』上富良野町、1998 年 8 月発行日記載なし

国際映画通信社編『日本映画事業総覧　昭和 2 年版』国際映画通信社、1926 年 12 月 24 日

札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫 49　札幌と映画』北海道新聞社、1999 年 6 月 27 日

更科源蔵編著『北海道映画史』クシマ、1970 年 9 月 15 日

田中館秀三 編『十勝岳爆発概報 ： 大正一五年六月二五日』,田中館秀三,大正 15. ※国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/981513（参照 2024-06-07）

田中純一郎『日本映画史発掘』冬樹社、1980 年 4 月 25 日

田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』中央公論社、1980 年 2 月 20 日

田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ　活動写真時代』中央公論社、1980 年 3 月 20 日

田中純一郎『日本映画発達史Ⅴ　映像時代の到来』中央公論社、1980 年 6 月 20 日

田中純一郎著、本地陽彦監修『秘録・日本の活動写真』ワイズ出版、2004 年 12 月 25 日

十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929 年 3 月 25 日

西川昭幸『日本映画一〇〇年史　明治・大正・昭和編』ごま書房新社、2016 年 3 月 30 日

西村正美 著『小型映画 ： 歴史と技術』,四海書房,1941 年 12 月 15 日 ※国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1871324（参照 2024-06-11）

前川公美夫『大正期北海道映画史』亜璃西社、2023 年 8 月 31 日

吉原順平『日本短編映像史――文化映画・教育映画・産業映画』岩波書店、2011 年 11 月 29 日

紀要

三浦泰之「戦前・戦後の北海道を生きた撮影技師・栃木栄吉の生涯 ： 北海道記録映画史序説」（所収「北海道開拓記念館研究紀要」第 42 号、2014 年）、p143-202

新聞・雑誌記事等

官報

北海道上富良野附近と秋田縣北浦町の災害　内務省警保局 「官報」第 4131 号附録、大蔵省印刷局編、1926 年 6 月 2 日、雑報 149、p3-4

大蔵省印刷局 ［編］『官報』1926 年 06 月 02 日,日本マイクロ写真 ,大正 15 年. 国立国会図書館デジタルコレクション（参照 2024-06-07）

https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282（参照 2024-06-07）

https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/17

https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/18

官報第 3835 号附録　大蔵省、1926 年 6 月 6 日、p13　大蔵省印刷局 ［編］『官報』1925 年 06 月 06 日,日本マイクロ写真 ,大正 14 年. 国立国会図書館デジタルコレクション

https://dl.ndl.go.jp/pid/2955983（参照 2024-06-07）

官報第 1727 号附録　大蔵省印刷局 ［編］『官報』1932 年 09 月 30 日,日本マイクロ写真 ,昭和 7 年. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198（参照 2024-06-07）

https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198/1/26

雑誌記事

大槻茂　十勝岳大爆発[大正 15 年 5 月]の秘録フィルム発見！ 「週刊読売」12 月 17 日増大号、第 36 巻第 53 号、通巻第 1525 号、読売新聞社、1977 年 12 月 17 日、p166-168

巻末モノクログラビア　十勝岳大爆発 「週刊読売」12 月 17 日増大号、第 36 巻第 53 号、通巻第 1525 号、読売新聞社、1977 年 12 月 17 日

「十勝岳大爆発」の記録制作者がわかる 「週刊読売」 1978(昭和 53)年 1 月 1 日号、第 37 巻第 1 号、通巻第 1527 号、読売新聞社、1978 年 1 月 1 日、p33

田中純一郎　連載　日本教育映画発達史(6) 「視聴覚教育」1969 年 11 月号、第 23 巻第 11 号、通巻第 265 号、日本視聴覚教育協会、1969 年 11 月 1 日、p96-99　※国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/6068181（参照 2024-06-11）

新聞記事
1926 年 5 月 24 日～5 月 31 日　小樽新聞および北海タイムス（国立国会図書館所蔵）※膨大になるため、註にてご確認をお願い申し上げる。
1926 年 5 月 25 日　読売新聞朝刊 3 面
　十勝嶽大爆發　死者多數出づ－温泉場も全滅
1977 年 12 月 6 日　読売新聞朝刊 14 版 22 面（東京）
「週刊読売」12 月 17 日号広告
1977 年 12 月 7 日　読売新聞夕刊道内版 4 版 5 面
　秘録　大正 15 年「十勝岳大爆発」 泥流〝恐怖のドラマ〟
株式会社マツダ映画社・無声映画鑑賞会について
公式サイト
株式会社マツダ映画社ホームページ
https://www.matsudafilm.com/
図書
松田豊編『活狂たちの半世紀―無声映画鑑賞会 50 年史―』無声映画鑑賞会、2009 年 8 月 8 日
映画プログラム
「クラシック映画ニュース」第 790 号、マツダ映画社内無声映画鑑賞会、2024 年 5 月 1 日
※説明　尾田直彪　覆面番組　制作年不明　堀内商会制作記録映画　十勝岳大爆発 「クラシック映画ニュース」第 790 号、マツダ映画社内無声映画鑑賞会、2024 年 5 月 1 日、p11

---

[1] 第 10 章町民とスポーツ・文化活動　郷土館の建設　上富良野百年史編纂委員会編『上富良野百年史』1998 年 8 月発行日記載なし、上富良野町、p1204 参照。1 か月間にわたり無料開放がなされた。
[2] 「十勝岳爆発フィルム」収蔵番号：2851　年代：1978/02/05
[3] 「16mm フィルム」収蔵番号：2851　年代：1978/02/05　岩男註：16mm フィルムケースに「無声映画」「貸出禁止」「十勝岳大爆発」の文字があり、「上富良野町教育委員会」シール貼付されていることが画像で確認できる。
[4] 株式会社マツダ映画社　主な所蔵「記録・実写」映像リスト（matsudafilm.com）（参照.2024-5-30）　岩男註：「十勝岳の大爆発」とあるが、本稿ではフィルムタイトルにあわせ「十勝岳大爆発」とした。
https://www.matsudafilm.com/matsuda/e_pages/e_a_lj.html
[5] 説明　尾田直彪　覆面番組　制作年不明　堀内商会制作記録映画　十勝岳大爆発 「クラシック映画ニュース」第 790 号、マツダ映画社内無声映画鑑賞会、2024 年 5 月 1 日、p11
[6] 「週刊読売」12 月 17 日増大号　第 36 巻第 53 号、通巻第 1525 号、読売新聞社、1977 年 12 月 17 日
[7] 大槻茂　十勝岳大爆発[大正 15 年 5 月]の秘録フィルム発見！ 「週刊読売」12 月 17 日増大号　第 36 巻第 53 号、通巻第 1525 号、読売新聞社、1977 年 12 月 17 日、p168 参照
[8] 「週刊読売」12 月 17 日号広告は、1977 年 12 月 6 日　読売新聞朝刊 14 版 22 面（東京）で確認した。「本日発売」の文字や「十勝岳大爆発（大正 15 年 5 月）の秘録フィルム発見　グラビアとも」という見出しが確認できた。
[9] 2024 年 6 月 5 日、上富良野町町役場企画商工観光課・浦島啓司氏を通じ、上富良野町郷土館の回答を得る。
[10] 美瑛川大氾濫　村民避難す　小樽新聞 4 面、1926 年 5 月 25 日
[11] 硫黄山の大鳴動　村民避難す　小樽新聞 4 面、1926 年 5 月 25 日
岩男註：「美瑛川大氾濫　村民避難す」の小見出し
[12] 十勝嶽大爆發　死者多數出づ－温泉場も全滅　読売新聞朝刊 3 面、1926 年 5 月 25 日
記事全文は下記の通りである。

> （旭川二十四日發）數日前より鳴動中であつた十勝嶽は廿四日午後五（原文ママ）時頃突如爆發し中腹に在る硫黄採礦所は岩石の爲め埋歿し多數の死者あり目下山下の空知郡上富良野村より消防青年團等出動し死體収容に向つたが同所の温泉場も全滅した由

[13] 上富良野惨害グラフヰツク上富良野原野泥の海　北海タイムス 9 面、1926 年 5 月 26 日
[14] 硫黄山爆發し上富良野原野泥の海　北海タイムス 9 面、1926 年 5 月 26 日
[15] 本社活動寫眞班　昨朝富良野の現場へ　北海タイムス 9 面、1926 年 5 月 26 日
[16] ラジオ放送開始 ｜NHK 放送史（動画・記事）（参照.2024-9-30）
https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009060001_00000
[17] 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929 年 3 月 25 日、p55 参照。本稿は. 国立国会図書館デジタルコレクションを参照。https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387（参照 2024-06-07）
以下の本文があるが、「十勝岳大爆発」（マツダ映画社所蔵）の映像の時系列は同じである。

> 此の日道廳保安課淺野警部、社会課西田嘱託、上富良野村役場書記、青年團員、消防組員、北海タイムス社、小樽新聞社記者竝に寫眞班等一行二十餘名は、早朝上富良野を出發して、十勝岳に登山し平山鑛業所災害の状況、爆發火口を視察し更に富良野川泥流通過の跡に添つて下り罹災状況を調査し翌二十七日歸村した。

[18] 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929 年 3 月 25 日、p441 に「殊に北海タイムス社および小樽新聞社は各活動寫眞班を組織し、災後の危險を冒して實況を撮影し、之を道内各地に於て影寫して實感を深からしめた」とある。
本稿は. 国立国会図書館デジタルコレクションを参照。
https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387（参照 2024-06-07）
[19] 本社活動寫眞班 昨朝富良野の現場へ 北海タイムス 4 面、第 12672 号、1926 年 5 月 26 日
[20] 十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929 年 3 月 25 日、p55 参照。本稿は. 国立国会図書館デジタルコレクションを参照。
https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387（参照 2024-06-07）
[21] 前川公美夫『大正期北海道映画史』亜璃西社、2023 年 8 月 31 日、p20 参照。5 月 27 日の函館日日新聞に広告文が掲載されたことを指摘。
[22] 説明 尾田直彪 覆面番組 制作年不明 堀内商会制作記録映画 十勝岳大爆発 「クラシック映画ニュース」第 790 号、マツダ映画社内無声映画観賞会、2024 年 5 月 1 日、p11
[23] 第 4 章大正時代の上富良野町 第 10 節十勝岳大爆発 上富良野百年史編纂委員会編『上富良野百年史』1998 年 8 月発行日記載なし、上富良野町、p563 参照
岩男註：本文の旭川市内の活動写真館・美満寿館および松竹座は札幌市のものを指すと思われる。また 5 月 29 日付北海タイムスにて 28 日に行われた「十勝岳大爆発」の上映会について報じられたとしているが、29 日の記事内容は上映会案内である。
[24] 硫黄山爆發の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隋を許さぬ絶品 北海タイムス 4 面、第 12676 号、1926 年 5 月 30 日
[25] 硫黄山爆發の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隋を許さぬ絶品 北海タイムス 4 面、第 12676 号、1926 年 5 月 30 日
[26] 硫黄山爆發の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隋を許さぬ絶品 北海タイムス 4 面、第 12677 号、1926 年 5 月 31 日
[27] 硫黄山爆發の驚異的寫眞上映 本社直榮活動寫眞班撮影 他の追隋を許さぬ絶品 北海タイムス 4 面、第 12677 号、1926 年 5 月 31 日 岩男註：「映写するる」は原文ママ
記事に「明後一日は室蘭市帯廣に於て映写するる事に決定しました」とある。
[28] 北海道上富良野附近と秋田縣北浦町の災害 内務省警保局 「官報」第 4131 号附録、大蔵省印刷局編、1926 年 6 月 2 日、雑報 149、p3-4
大蔵省印刷局 ［編］『官報』1926 年 06 月 02 日,日本マイクロ写真 ,大正 15 年. 国立国会図書館デジタルコレクション（参照 2024-06-07）
https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282（参照 2024-06-07）
https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/17
https://dl.ndl.go.jp/pid/2956282/1/18
[29] 前川公美夫『大正期北海道映画史』亜璃西社、2023 年 8 月 31 日、p20 参照。5 月 27 日の函館日日新聞に広告文が掲載されたことを指摘。
[30] 本社活動寫眞班硫黄山へ強行登山 北海タイムス 8 面、第 12674 号、1926 年 5 月 28 日
【二十七日特派員電話】とあり、当初 27 日夜公開の予定であったが、学者らからの助言で市街地や原野だけでなく十勝岳に登山した映像も撮影したことが記されている。
[31] 1932（昭和 7）年 6 月 1 日、この二人が合資会社堀内商会を退職したことが官報に記載されていた。参考までに記す。
大蔵省印刷局 ［編］『官報』1932 年 09 月 30 日,日本マイクロ写真 ,昭和 7 年. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198（参照 2024-06-07）
https://dl.ndl.go.jp/pid/2958198/1/26
[32] 田中純一郎 連載 日本教育映画発達史（6）「視聴覚教育」1969 年 11 月号、第 23 巻第 11 号、通巻第 265 号、日本視聴覚教育協会、1969 年 11 月 1 日、p96-99
国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/6068181（参照 2024-06-11）
p99 に以下の本文あり。岩男註：M.パテー商会は梅屋庄吉が創業した映画会社の一つ。
合資会社堀内商会（主宰者堀内喜一）大正一〇年創立。主催者は M パテー出身の撮影技師、道庁依託映画の一手引請で知られる。
[33] 官報第 3835 号附録 大蔵省、1926 年 6 月 6 日、p13 大蔵省印刷局 ［編］『官報』1925 年 06 月 06 日,日本マイクロ写真 ,大正 14 年. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2955983（参照 2024-06-07）
岩男註：合資会社設立：1925（大正 14）年 2 月 14 日（登記は同年 2 月 16 日）
[34] 国際映画通信社 編『日本映画事業総覧』昭和 2 年版、国際映画通信社、1926 年 12 月 24 日、p543 ※本稿は国立国会図書館デジタルコレクションによる。https://dl.ndl.go.jp/pid/1225228（参照 2024-06-11）
https://dl.ndl.go.jp/pid/1225228/1/281
[35]「十勝岳大爆発」の記録制作者がわかる 「週刊読売」 1978（昭和 53）年 1 月 1 日号、第 37 巻第 1 号、通巻第 1527 号、読売新聞社、1978 年 1 月 1 日、p33
岩男註：堀内啓治氏（堀内商会創業者＝堀内喜一氏のご子息、川越市在住・当時 52 歳）から連絡があった。

[36] 三浦泰之「戦前・戦後の北海道を生きた撮影技師・栃木栄吉の生涯 ： 北海道記録映画史序説」（所収「北海道開拓記念館研究紀要」第 42 号、2014 年）、p143-202
[37]三浦泰之氏に照会したところ、2024 年 9 月 30 日付メールにてご回答をいただいた。なお、国立国会図書館デジタルアーカイブで「栃木勇吉」および「栃木栄吉」の双方で検索し、ヒットした記事は一通り確認したが、訂正文を見落とした可能性があることを付記する。
[38] 三浦泰之「戦前・戦後の北海道を生きた撮影技師・栃木栄吉の生涯 ： 北海道記録映画史序説」（所収「北海道開拓記念館研究紀要」第 42 号、2014 年）、p189（図 2、図 3）参照　栃木吉彦氏所蔵。図の解説は p188
[39] 尾田直彪 X アカウント 午前 0:15・2024 年 4 月 30 日（参照.2024-5-2） 岩男註：覆面番組は、当日会場に行くまで上映タイトルが明らかにされない。
https://x.com/Oda_takatora/status/1784964798482124801
[40] 『続泥流地帯』作品冒頭文は、「大正十五年七月十一日――」であり、村葬の様子から始まり、章名も［村葬］である。作中では記念講演会以降は描かれていない。
十勝岳爆発罹災救済会編『十勝岳爆発災害志』十勝岳爆発罹災救済会、1929 年 3 月 25 日
※本稿は. 国立国会図書館デジタルコレクションを参照。（参照.2023-7-12） p198-200 の内容をまとめると以下のとおりである。
https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387/1/126
https://dl.ndl.go.jp/pid/1242387/1/127

7 月 11 日、9 時～10 時 30 分、十勝岳大爆発による犠牲者 144 名のため、村葬が上富良野尋常高等小学校屋内運動場にて執行。施主＝上富良野村、美瑛村両村長および上富良野仏教団。来賓および一般参列者 1,500 名が訪れる。弔辞は、上富良野村長・吉田貞次郎および美瑛村長・熊倉兼が述べた。
11 時 30 分～13 時 30 分、追悼法会を同会場にて執行。
14 時 30 分より、記念講演会「爆発と復興」（講師＝北海道帝国大学理学士・田中舘）、大谷派北海道教務所案居堯正が追悼を述べた。
夜、北海道庁社会課より派遣された社会主事捕・高松義克、池浦俊彦らが慰安および社会教育の意味で活動写真の上映を実施。
[41] 松田豊編『活狂たちの半世紀―無声映画鑑賞会 50 年史―』無声映画鑑賞会、2009 年 8 月 8 日
巻末の「無声映画鑑賞会開催記録」により、以下の上映年月日を特定できた。回、年月日、会場、（掲載頁）の順で記す。
・344 回　1987 年 3 月 12 日、あやせ活動写真館（p250）
・589 回　2007 年 8 月 30 日、門仲天井ホール（p228）

児童生徒の部

泥流を知ってもらうために

（ペンネーム）　ごりら

「泥流地帯」という作品を読んだ私の意見です。

この作品は、上富良野町に住んでいる一家について書かれており、登場人物に共感をしながら作品を読むことができるところがよいと思いますが、正直「泥流地帯」という題名にふさわしい内容だとは思いませんでした。

作品の主な内容が、一家の家族内の問題、人間関係や恋愛にかかわることなども書かれています。しかし、泥流が起こるのは作品の後半であり、それからも泥流地帯についてはほとんど書かれていないということが私は疑問に感じました。

三浦綾子さんがこの作品を通して何を伝えたかったのか、どんな人に読んでほしいと思い出版したのか、私にはわかりませんが、もし上富良野町の歴史を知ってもらうためという思いがあるのだとしたら、今も使われている言葉で書いたり、重要な場面だけを切り抜いた作品を出版したりするなど、少しでも多くの人に手に取ってもらえるよう改善すべき点もあるのではないかと思いました。

実際に上富良野町の町民でも、この町で起こった泥流地帯について知っている人はごくわずかです。そのため、この作品との出会いが自分の町を知るきっかけや、いつまた起こるかわからない泥流の恐ろしさを理解するきっかけになるとよいと思いました。

節子の復讐

（ペンネーム）　ひじり

１９２６年５月２８日

福子の訃報が届いた、自宅に向かっているところで何者かに後ろから首を絞められたのだ。

耕作「なんで福ちゃんが死ななきゃいけならないんだ。」

節子「福ちゃんどうして…」

拓一「どうしてお前が…」

皆福子の死を悲しんだ。特に福子を愛していた拓一は鬱状態になった。

耕作が言う。

耕作「いったい誰がこんなひどいことを…。」

拓一「犯人は俺が殺す！俺がこの手で。」

節子「協力するわ！」

犯人は福子に何らかの恨みがあり、体には複数殴られた跡があった。

福子の顔はひどく腫れていて原形をとどめていなかった。

拓一と耕作は殺害現場に残っていたロープを手掛かりに犯人を捜した

拓一「まったく証拠がない」

耕作「実は、俺、心当たりがある」

拓一「なんでもいいから教えてくれ」

それはずっと節子の目が拓一に好意を寄せているものの目だったという。
拓一「それが本当なら俺らの結婚を阻止したくて殺害したのかも」
拓一と福子は結婚を控えていたのだ。
耕作「節子が怪しいな。」
拓一「間違いない」
節子を捕まえるには証拠が少なかった、二人は節子の友達である、良子に事情を話し何か知っていることはないか聞いた。
良子「何も知らないわよ」
良子の目はなにか知っているようだった。
拓一「なんだってするから教えてくれ」
良子「好きだったのあんたのことが」
やはり耕作の予想は当たっていた、間違いない犯人は…。
拓一、耕作「節子だ！」
二人は節子のもとに向かった。
節子は待っていたかのように立ち尽くしていた、拓一と耕作はその異質な空気に圧倒されていた。
節子は自分の首に刃物をあてていた。
節子「よくわかったわね、そう福子を殺したのは私よ」
拓一「生きて罪を償え」
節子「あなたが私と結婚してくれればね」
拓一「それはできない、俺が愛してるのは福子だけだ。」
節子「そっか、じゃあね。」
拓一と耕作に節子の血が付く
目の前の光景に二人は唖然とした

二人は翌日行われた福子のお通夜に向かった。
節子の死体は土に埋められた

泥流地帯の感想

（ペンネーム）　あお

拓一については、家族を助けようとして泥流に飛び込んだのがかっこいいなと思いました。泥流に飲み込まれたら死んでしまう可能性があるので、自分だったらできない行動だなと思いました。生きて帰ってきたときは、感動しました。農家で生まれたので、小学三年生から大人と夜遅くまで働いているのがすごいなと思いました。拓一が福子のためにお金をためていましたが、泥流で流されてしまい可哀想だなと思いました。

耕作については、小さい頃から農家の仕事を手伝っているのが偉いなと思いました。節子に石をぶつけてしまったときに言った（深城）「嫁のもらい手がなかったら、どうしてくれるんだ」に対して（耕作）「俺がもらってやる！」と言ったのが印象に残りました。私よりも年齢が下なのに、「俺がもらってやる！」と言っているのが小学生では言わないことだなと思い、かっこいいなと思いました。

でも、福子と節子どっちを好きなのかがあいまいでわからないと感じました。

福子にいいことがあるようにと言って、白い

石を返そうとしたところに感動しました。
福子については、耕作がお金を落としてしまい、五銭玉一枚しか持っていないのに、耕作に渡すのが優しいと思いました。拓一のことを好きなのに、福子は夜の仕事をしているため好きという気持ちを言えないのが切ないなと思いました。
節子については、最初出てきたときにあまり話さなかったので静かな印象だったが、ぐいぐい耕作にアタックしていて驚きました。

悲惨なぶんぽーさんと一緒の

レオン・S・ケネディ
（ペンネーム）　ぶんぽーさん

これは泥流に巻き込まれた人の物語…ぶんぽーさんという男がいた。ぶんぽーさんは33歳独身、仕事は真面目に切なくこなすが今一つ情熱のない男……なんかエリートっぽい気品漂う顔と物腰をしているため、女性社員にはもてるが会社からは配達とか使い走りばかりさせられている。そんな毎日を続けていたぶんぽーさんだったが、ある会社で雑務をしていたとき、突然けたたましい音がなった。ぶんぽーさんは驚いた。周囲も何があったのかと辺りがざわめいていた。気になったぶんぽーさんは外に出て様子を見てみた。ぶんぽーさんは驚いた。眼の前にものすごく早いスピードで、泥流が迫ってきていたからだ。まずい、そう思ったときにはもうぶんぽーさんは泥流に飲まれてしまった。最初は意識がはっきりとしていたがすぐに苦しくなった。泥流はひどく苦しく、身動き一つもとれなかった。そのままぶんぽーさんは泥流に飲まれたまま意識を失った。その様子を2階のマドから見ていた同僚のレオン・S・ケネディは酷く取り乱した。隣に金属性のでかい倉庫があったため泥流に流されずに済んだが、ぶんぽーさんが流されてしまった…その事実にレオンはひどく悲しんだ。泥流がやんだ後外に出て周りの様子を見てみた。外は悲惨なものだった。ここには家があったはずなのになくなっていた。外はガラスが落ちているところもあり非常に危険だった。歩いていると避難所がありレオンはそこに行った。そこでレオンは自分の目を疑った。死体が置いてある場所にぶんぽーさんがいたのだ。ぶんぽー！レオンはひどく悲しんだ。泥流はどれだけ危険なものか、レオンは理解した。レオンは目の前が真っ暗になった…。

拓一に対して思ったこと

（ペンネーム）　あみろ

私が拓一に対して思ったことは、まず家族を助けようと泥流に飛び込んでいった勇気がすごすぎると思いました。窮地に立たされた時人間ってやっぱり自分を守っちゃうと思うのですが、すぐに飛び込んで行けるのは、かっこいいですよね。もちろん飛びだすことが正しいとは思いません。生きていて、人助けもしました。結果的には素晴らしいのですが、もし拓一が亡くなっていたら、あいつは泥流に飛び込んだ馬鹿だとか言われてしまうのでしょうか。世の中結果が全てかと思うと、なんだか嫌な気持ちになります。そして拓一はその後町の復旧のために、その土地に残り、3年頑張るといっています。みんなにどう思われようと、関係ない、なんの報われることのない苦労を、自分の人生における宝だと言ってしまうのですね。どうやって生きたら、そんな事を言えるのでしょうか。

やっぱり拓一はかっこいい長男ですね。そうかっこいいのですよ、福ちゃんを自由にするためにお金をこつこつ貯めていたり、絶対に福ちゃんが好きなのになかなかはっきり言わない感じも、結局顔を赤らめながら好きだって言う感じも、完璧スマートではない感じが拓一の魅力だと感じました。私も拓一のように先を見据え行動できるようになりたいと思いました。

泥流地帯を読んで感じたこと

（ペンネーム）　あゆ

わたしは泥流地帯を読んで物語がまず長いなと思いました。けれど長くても凄いなと思った部分が二つありました。

一つ目は、耕作が皆より早く九九を覚えたことです。九九は覚えるのに時間がかかるのに、耕作は二年生よりも先に九九を覚えていたことがびっくりしました。なぜ耕作は頭がいいのか不思議に思いました。勉強が好きなのかそれとも普通に頭がいいのかなと思いました。私は九九を早く覚えた耕作が羨ましいと思いました。なぜなら、私は九九を覚えるのが遅かったからです。今は完璧に覚え言えるけれど、耕作みたいに早くは覚えられなかったのでいいなと思いました。

二つ目は、拓一が泥流に飛び込んだことです。私だったら大切な人が泥流の中にいても飛び出す勇気はないけれど、拓一は普通に泥流に飛び出したのが凄いと思いました。最初はもしかしたら自分も死んでしまうかもしれないのになぜ泥流に飛び出すのかと不思議に思ったけれど、よく考えたら、大切な人が泥流の中にいたら助けたいという気持ちが出てくるだろうな

と感じました。自分も死んでしまうかもしれないけれどそれでも泥流の中に飛び出したことがカッコいいと思いました。

　それ以外にも心に残ったところがあります。それは、「いいか、よく聞くんだ。自分たちのふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことなんだ。君たちはいつの日か、この村を離れて、ほかの町に住むようになるかも知れない。しかし、そこに楽しいことが待っているとは限らない。」というところです。この文章を読んで自分のふるさとは大事という気持ちになりました。私は将来自分のふるさとを離れることを考えているので、今のうちに自分のふるさとを胸に焼きつけておこうと思いました。

ジャンケン殴打

（ペンネーム）　豊褒（ゆほ）

　深城家の娘に「俺がもらってやる！」と啖呵を切った耕作のことが、嘘逆家の長男である、嘘逆勇征に知られてしまった。

　実は嘘逆勇征はその娘のことが好きだった。

　ここから、嘘逆勇征の復讐が始まる。

「耕作のやつ、どこにいる」

　嘘逆勇征は耕作を探していた。

「やっと見つけたぞ」

　嘘逆勇征は耕作を見つけ勝負を仕掛ける。

「俺と勝負しろ。」

「いきなり来てなんですか」

　耕作は言った。当然の反応だろう。

「お前、俺の女を奪おうとしただろ」

「なんのことですか！？」

「深城家の娘のことだよ！！」

「あれは、流れで…。」

「信じられるか。」

　嘘逆勇征は疑うのをやめなかった

（この人に何を言っても聞かなそうだな）

　耕作は弁明することを諦めた。

「ところでその勝負とはなんですか。」

「もちろん、深城家の娘を賭けた勝負だ。」

「わ、かりました。ところで勝負の内容はなんですか。」

「今回行うのは、『ジャンケン殴打』だ。」

ルール説明

・勝利条件１　相手が気絶や死亡、またはギブアップを宣言すること

・勝利条件２　五回ジャンケンで勝利すること

・ジャンケンで敗北すると相手から殴られる

・敗北したときに出していた指の数だけ殴られる

＊グーで負ければ０回殴られる

　チョキで負ければ２回殴られる

　パーで負ければ５回殴られる

・不慮の事故でジャンケンが中断されてしまった場合、もう一度行うこと

＊周りの騒音、人の邪魔が入った時など

・ジャンケンは右手だけで行うこと

「ルールはわかりましたけど、何で右手だけなんですか。」

「不正を防ぐためだ。左手を使えるとなると後出しのタイミングのずらしが容易になってしまうだろ。」

「なるほど。」

「％＆＃＄％％＆＄＆」

「どうしたんですか。」

　嘘逆勇征は急に不可解な動きをした。

「悪い、たまに発作として自分の意思とは関係

なく動くんだ。」
「大丈夫ですか。」
「大丈夫だ、そ、それじゃあ始めるぜ。」
『ジャンケン殴打』が始まった。
（このジャンケン殴打は、簡単に言えばリスクをとるか安全をとるかの心理戦だ。）
　頭がいい耕作は冷静に分析した。
（リスクをとれば多く殴られる可能性は上がるが、勝つ確率は上がる。）
　相手が安全なグーを選択すれば、リスクの高いパーで勝てる
（この勝負は結局、グーを出し続け、相手のチョキを待つことが最も強い作戦だ。）
　ノーリスクで相手が地雷を踏むのを待つことが一番安全かつ最強だからだ
（だがそれは相手も同じこと、そして勝負が終わらないと意味がない。）
　お互いが同じ考えならば、互いにグーを出し続けて終わりがない
（ただ相手は僕の頭がいいことを知らない、ならば相手は素直にグーを出す。）
　これは嘘逆勇征が持ち掛けた勝負だから、一番強い選択は知っているだろうと耕作は推測した
（僕は、パーを出し、回数で勝利を収める）
「それじゃあ、始めるぜ」
「「ジャンケン、ポン！！」」
　次の瞬間、耕作は驚愕とともに激痛が走った
「うわぁー！」
「悪い、発作だ。」
　嘘逆勇征は耕作の指をグーで殴り折っていたのだ。
「これは不慮の事故だなぁ、もう一度だ。」
　嘘逆勇征は少し微笑みながら言った。
「ひ、卑怯だぞ！」
「発作だよ、しょうがないことだ。」
「くそ…。」
　耕作は指が折れているためグーしか出せない。
「ぎ、ギブアップします」
「俺の勝ちだな、耕作。」
　嘘逆勇征は深城家の娘を耕作から奪い、ゲームは終わった。
　翌日、耕作は昨日のゲームのことを思い返していた。
「よくよく考えたらあのゲーム、いや、あの嘘逆勇征って人、最初から正々堂々勝負する気なんてなかったんだ。」
　嘘逆勇征は、『ジャンケン殴打』という名前にすることで、殴るという行為を意識させた。だからこそルールのジャンケンで敗北したときに出していた指の数だけ殴られるというところに着目する。それにより、敗北すると殴られるという固定概念にとらわれる。
「今思えば、ジャンケンは右手だけってルールも違和感があった。」
　言い換えれば右手を封じれば、ジャンケンに勝ち目はない。
「くそ…、嘘逆勇征にしてやられた。」
　耕作は指とともに心も傷つけられた、あの嘘逆勇征に。

泥流地帯の当時の様子と読んでみた後の私の考え

（ペンネーム）　まなり

私はこの本を読んで、当時の時代の不便さや格差、それらによっておこる今の時代では考えられないような悲惨な出来事に、十勝岳の噴火による被害やその後の復興の苦労などがあったことを学びました。その例を三つほど挙げます。まず一つ目は、拓一と耕作の母に深城という裕福な家の人が無理やり結婚を迫ったため、母が旭川まで逃げ出したこと、こういう出来事は現代でいうストーカーに似ていますね。しかし、現代のストーカーよりたちが悪いのは、財力や権力などを使って追ってくるところ、しかもそこら一帯での影響力が強いせいで警察も介入できない。なので、その人の影響力が及ばない場所まで逃げるしかない。そのせいで、母は二人を置いて逃げていくことになってしまった。続いて二つ目は、福子が父親に深雪楼という、先ほど出てきた深城が経営している店に売られてしまったこと、今の時代では衝撃的な出来事ですね。この深雪楼は女性が男性に、ここでは書けないようなことをしなければならない場所です。そのような場所に自分の娘を売ることは、今の日本ではまずありえないことです。これを見ると、やはりこの時代ではまだ女性の社会的立場が弱かったことがよく分かります。最後の三つ目は、耕作が生徒である松坂愛之助の父親と四季堂が連れてきた若い男二人に襲われたことです。そのせいで耕作をかばった拓一が骨を折ってしまうことになった。現在の日本でも似たようなことがあるが一般人が平気でここまですることはあまりないと思いますが、この当時は今よりもひどかった。今紹介したほかにも福子のように深雪楼のような店に売られた人をごけと北海道では言われていたようです。それから立ち直ってもごけ上がりだといわれ差別や迫害にあったりしたようです。このように当時の時代の暗い部分もしっかりと書かれているところがこの本の魅力の一つです。

次はこの本で書かれている当時の十勝岳の噴火の様子についてと、その後の復興の様子についてです。当時、十勝岳が噴火したときは山の上の様子が全く見えなかったらしいです。そして、その直後に大噴火が起こって、山からものすごい勢いでなだれ込んできた泥流によって家や人が流されていった。それにより多くの人が亡くなっていった。その中にはこの小説の主人公である拓一と耕作の祖父母や妹、嫁に行った姉もいた。このように十勝岳の噴火は大きな被害をもたらしました。復興の時は土地が泥流地帯になっていてとてもじゃないが田んぼや畑を作れそうになかったが、拓一はこの土地に田んぼを作ろうとした。もちろん耕作を含めたいろんな人に止められたがそれでも拓一は泥流で埋まったこの土地に田んぼを作ろうとした。拓一以外に当時の村長含めた人たちがあきらめずに復興に力を入れていた。この本に登場する拓一や村長たちのような人たちがあきらめずに復興を進めたからこそ今の上富良野があることを我々は忘れてはならない。

私が個人的に思うこの本の最大の魅力は、当時の時代のつらさや十勝岳の大噴火の悲劇の後でも、あきらめずに復興を進めていった人たちの気持ちや苦労、そして何が起きてもくじけず頑張っていくことの大切さが描かれていることだと思います。私たちはこの本に登場する先人たちがこのような苦労の末に作り上げてきたこの土地をしっかり受け継ぎ守り抜いていくべきなのだと私は思いました。

上富良野の過去

瀧本　希望

私は、生まれてからずっと上富良野町に住んでいるが、泥流地帯について詳しく知らなかった。これを機に泥流の恐ろしさ、家族がいることの大切さを改めて思い知らされた。

拓一は、人一倍正義感が強く、家族や友人が危険な目にあっていたら、自分を犠牲にしてまで相手を優先し、たとえ相手が泥流でも自ら飛び込みに行った。もし私が同じ時代に生きていて噴火を経験したら、とても拓一と同じような行動には出られなかったと思う。自ら泥流に飛び込み節子を救い出したときはとても感動した。たとえ母がいなくなっても弟や妹などの兄弟を引き連れて家まで走り出すほど、人間の鏡のような、人のお手本になれる人だ。私も見習おうと思う。

耕作は、人一倍家族思いで、兄弟愛がとても強い子だ。生まれながら頭がよく、成績も優秀でとても多彩な人である。また、耕作と深城が口論になった際には、誤って深城の後ろにいた節子に石ころが当たってしまい、けがをさせてしまった。責任と深城の圧から、耕作は

「おれが結婚してやる！」

と断言した。

この二人の出来事から、泥流地帯は読めば読むほど話の奥が深く、理解力や知識が向上し、良い経験となると思った。

～拓一と福子の恋愛物語～

（ペンネーム）　ふくこ

「拓一さん。ありがたいけど…私やっぱり諦めるわ。」申し訳なさが勝って諦めようとしていた福子だがそれに節子は、

「なんで？どうして諦めるの？好きなのでしょう？拓一さんのこと。」節子が不満そうに福子を見つめた。すると拓一が

「福ちゃん。僕は君が好きで水商売をしていないことは知っているよ。僕は、そんなこと気にしないよ。福ちゃんは汚れてなんかいないさ。」福子が少し俯いて悲しそうな声で言った。

「拓一さん。もし私と結婚して拓一さんは幸せになれると思う？」拓一が微笑を浮かべて言った。

「当たり前だろう。僕はね福ちゃん、君と結婚して今の苦しい生活から幸せにしてあげたいんだ。それが僕の思いだよ。」すると節子が

「拓ちゃんもこうやって言ってくれているんだし、自信を持ってもいいんじゃないかしら？」耕ちゃんも節子ちゃんも拓一さんも皆私を励ましてくれた。

「福子ちゃんはどうしたいの？」節子が改めて福子に聞いた。

「私は…本当は拓一さんと結婚して幸せになりたい。いろいろな男の玩具になるんじゃなくて、一人の男性に愛されたい。愛してみたい。」拓一が自信満々に福子に言った。

「福ちゃん。僕なら福ちゃんを大切にできる。たくさん愛してあげることができるよ。一度僕の言ったことを信じてみてくれないか？」福子は少し戸惑ったが、何かを決心した顔をした。

「拓一さん！私、拓一さんを信じてみるわ。こんなに汚くなってしまった私を大切に愛すると言ってくれるのは拓一さんだけよ。」少し涙目になって嬉しそうに拓一に返事をした

「本当？僕と結婚してくれるってことでいいのだろうか!?」拓一が声を上げて笑みを浮かべた。そして福子も微笑み

「はい！よろしくお願いします！」こうして両思いだった二人は晴れて結ばれることになった。福子が言った。

「節子ちゃん本当にありがとう。私のような人間が幸せになっていいのかわからないけど、拓一さんと幸せになります！」節子は少し悲しそうに福子に言った。

「うん。拓一に選ばれたからにはちゃんと幸せになってね。おめでとう！」

～その後二人は結婚した。節子は、

「本当は私も拓ちゃんが好きだったけど、負けちゃったね。本当におめでとう拓一、福子」

僕の泥流地帯

（ペンネーム）　動かす　と痛い

どうしよう。何を書けばいいかわからない。泥流地帯を重要なところだけ学校で読んだ。しかし、あまり頭に残らなかった。なぜなら、読み手がふざけ倒し、面白おかしく物語を読んだからだ。腹筋が痛くなるほど笑ったが、このことを今は後悔している。

話は変わるが、最近寒くなってきた。でも、ブレザーを着ようとは思わない。なぜなら重いからだ。ブレザーは思ったより重く、面倒くさい。ネクタイも面倒くさいから嫌いだ。しかし、そろそろ冬服正装で学校に来なくてはならない。面倒くさい。とても面倒くさいのだ。ネクタイなど首を絞めているものではないかと思う。

そろそろ泥流地帯に話を戻す。僕は泥流地帯のことをずっと泥流が来て大変な思いをしている人たちの物語だと思っていたが、違った。なかなか泥流が来ないのである。大半が人間関係の人情物語だった。しかし、ふざけ倒した物語の中では、耕作が同級生の面白い人、拓一が体育教師、福子が国語表現の先生などめちゃくちゃである。節子は覚えていない。許してほしい。深城も覚えていない。

この物語の感想としては、長いと思った。

噴火するまでのいろいろな話が僕には分からなかった。僕は登場人物の名前を覚えることが苦手で、誰が誰だか今もわかっていない。あと話が複雑でよくわからない。わかったことといえば、拓一がすごいということだ。例えば勉強が出来るところで、数学の時間に頭がオーバーヒートしてスリープモードになっている僕とは大違いだ。

泥流地帯はきちんとと読めば、よい物語なのだろうと思う。しかし、僕はきちんと読めなかった。それが理由でこの作文はよく言えばユニーク、悪く言えば滅茶苦茶なものになってしまった。僕がこの作文で言いたいことは、「授業はちゃんと受けよう」それだけだ。

自分の考えについて

（ペンネーム）　ZETA Zachary

私は、書くことがない、とりあえず拓一が死ないのが意味わからない。いなくなった方が物語的には面白かった。

泥流はお話の中で実際はそんなにあまくない、突っ込んで死なないは現実では絶対にありえない。

でも、私たちの住んでいる近くには活火山があり、いつ噴火するかわからない。

実際そんな他人事ではないことをこの本を読んで思った。

私が住んでいる山は三年周期で噴火すると言われており、でももう三年以上経っているのでいつ噴火してもおかしくないと思う。

これ以上噴火したらおそらく復興が不可能なくらい噴火の勢いがすごいと思う。

噴火したら農作物がすべてダメになり泥流で畑はすべてダメになるだろう。

そんな風にはなってほしくないのであらかじめ私は友達とシェルターのようなものを造った。そこには、発電機と発電機を動かすための燃料がおいてあり、他には冷蔵庫、食べものなどを保管している。だが、そこに入るれるのは二、三人が限界だろう。なので入れる人は友達と私のみだ。

生き残るために、シェルターには1ヶ月分の食料がある。それ以外にベットやソファなどおいて娯楽もできる。シェルターの場所は土の中なので、その上にはいろいろなもの敷いて、大丈夫なようにしてある。

本当に噴火したとき、怖いので冷静さを忘れないようにしようと思った。

泥流地帯から学んだこと

（ペンネーム）　田中

私は泥流地帯を読んで、十勝岳の噴火によりたくさんのものを失った中でも、将来のことを考えて行動できる拓一が凄いと思いました。例えば今、何か大きな災害が起きたとして、私であれば拓一のようには動けないと思います。これはあくまでも物語の中の話ですが、実際に十勝岳が噴火したときに拓一たちのように頑張ってくれた人たちがいると思うと感謝の気持ちで一杯です。私は今まで、自発的に頑張るということをしてきませんでした。それができない人間だからです。人から指示されたことをこなすことで精一杯でした。ですが、泥流地帯を読んで、自分も拓一たちのように努力したり、頑張ったりできる人間になれたらいいなと思いました。

この物語で心に残ったことは他にもあります。耕作の「いいか、よく聞くんだ。自分たちのふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことなんだ。君たちはいつの日か、この村を離れて、ほかの町に住むようになるかも知れない。しかし、そこに楽しいことが待っているとは限らない」「いや、つらい目に会ったり、

苦しい目に会ったりすることが、多いかも知れない。そんな時にな、ふっとこの広大な景色を思い浮かべて、勇気づけられるかも知れないんだ。人間はな、景色でも友達でも、懐かしいものを持っていなければならん。懐かしさで一杯のものを持っていると、人間はそう簡単には堕落しないものなんだ」というセリフです。私も辛いことがあったとき、昔あった楽しかった記憶を頭に思い浮かべると少し心が軽くなるのでこのセリフに共感しました。これからの未来で私が生きていく中で、辛いことや悲しいことがたくさんあると思います。そんなときは思い出を頭の中に浮かべて頑張りたいと改めて思いました。

総じて、泥流地帯という作品は人生において大切なことは何かを学べる素晴らしい作品だと思いました。

つぶやきの部

【X（旧ツイッター）】

多くのユーザーに利用されるSNS（ソーシャルネットワークサービス）のひとつで、１４０文字以内の短文（つぶやき＝ポスト）投稿による高い拡散性が特徴です。

優秀作品審査は「一般の部」「児童生徒の部」のみであり「つぶやきの部」は審査対象ではありませんが、様々なSNS媒体を通じて多くの三浦文学ファンが交流していますのでいちど覗いてみませんか？

橋宮香也子
（ 三浦綾子『果て遠き丘』）
@KayakoHashimiya

この悔しさをばねに今年も『泥流地帯』作文コンクールだけど、『果て遠き丘』ネタを混ぜて応募してみた。アニメ化とかドラマ化のために手段は選ばない。
#三浦綾子　#果て遠き丘　#果て遠き丘を盛り上げよう

Tomomo
@tomomo_journal

【失せし、動く】
幼少期、大正泥流についてしばしば聞かされた宅は、主なくし十三年、昨秋突如他の人の手へわたる。

壊される寸前、真暗で空の家屋を訪れ感謝のち、三重へ墓参報告を。

それからわたしは綴れなくなった。

無くし物。

されどいま、優し（書きなさいよ）と祖母の声。

資料編　史実としての『泥流地帯』

～上富良野村、壊滅ス～
“二度の開拓”を果たした奇跡の町・上富良野の壮絶な実話から生まれた『泥流地帯』『続泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきっかけでした。三浦夫妻の住む旭川と上富良野は一時間足らずの距離。近郊での出来事でもあり営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町（被災当時は上富良野村）を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心に話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実の「上富良野」と「十勝岳噴火災害」についてご紹介します。

「泥流地帯」文学碑（草分地区）と三浦夫妻

■上富良野町（上富良野村）

上富良野町は北海道中央部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区（物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域）に足を踏み入れたことが始まりです。

初夏を彩る町花ラベンダー、盆地特有の寒暖差で甘みが増したメロン、ビール原料となるホップと大麦、全国のホテルやレストランで愛されるブランドポークや和牛などの豊かな農畜産物、そして道内最高標高、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など、広大な火山帯特有の、大自然の恵み豊かな地域です。

■活火山、十勝岳

十勝岳（上富良野町ほか／二〇七七m）は大雪山国立公園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。連峰ではもっとも若い（新しい）山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。

■大正噴火（大正十五／1926年）

豊かな恵みを享受する一方で、大自然は時として人知を超えた脅威をもたらします。

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に起きた十勝岳の大規模な爆発です。山体崩壊とともに溶岩や熱せられた大量の地下水などが噴出し積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となって麓の村を襲いました。

大正15年9月爆発時の噴煙

巨木の“とんぼ返り”

最も甚大な被害をもたらしたのは「富良野川」に沿って流下した泥流です。平常では水量が少なく穏やかな川ですが、下流域では長い年月をかけて沢地を形成していました。拓一や耕作らが住む日進の沢のモデルとなった「日新の沢」です。小説にもあるように狭いところで幅百メートルほどの沢に押し寄せた泥流は高さ十メートルを超え、火山噴出物だけでなく土を削り岩を砕き、その勢いを増していきました。根こそぎ引き抜かれた巨木が数百、数千と「とんぼ返り(縦回転)しながら押し寄せた」と多くの被災者が語っています。

拓一が飛び込んだ「泥流」の威力

土砂や樹木を飲み込みながら押し寄せる泥流の威力は凄まじく、ひときわ高く土盛りされた線路は泥流の勢いを大いに弱めたものの、レールは枕木ごと飴のように捻じ曲げられ【写真①】、七十トンに迫る巨岩は旧石村家よりやや下流まで流されました【写真②】(現在この巨岩は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に設置されています)。泥流の脅威を象徴する二枚の写真からは、泥流に飛び込む拓一を目の当たりにした耕作の深い絶望が感じ取ることができます。

【写真①】捻じ曲げられた線路

【写真②】泥流に押し流された巨岩

【写真③】僅か4日後に仮運行した鉄道

【写真④】流木で埋め尽くされた田畠

【写真⑤】軍用トロッコを借上げて客土作業

人海戦術による驚愕の復興速度

鉄路の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が仮運行されました【写真③】。これにより各地から支援物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。

二度の開拓～奇跡の復興で取り戻した美田

また、作中で描かれるとおり田畑の復興作業は困難を極めました。マッチ箱をひっくり返したように辺り一面流木で埋め尽くされ【写真④】、さらに一メートルを超える泥土に埋まったかつての美田の復興には、近隣の丘や被災を逃れた農地から土を運搬し、上に敷き詰める「客土」という方法がとられました【写真⑤】。さらに強い酸性の土地を中和し作物が芽吹く土に改良するための作業が何年も続けられ、ついに耕作が「死んでいる」と嘆いた泥海に再び青々とした稲を根付かせることに成功しました。

現在の上富良野の、豊穣な稔りと風光明媚な景観は拓一や耕作が思い描いた「百年後のふるさと」そのものです。

■石にかじりついても
～ 上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中は実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(一級町村制)に就任し、四期十六年にわたり近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。

吉田貞次郎村長

■実在の人物とエピソード

作者三浦綾子さんの緻密で膨大な取材にもとづいて描かれたこの作品には、吉田村長以外にも実在の人物や出来事、地名が数多く登場します。

○吉田てい、弥生姉妹・・・吉田村長の子。ていは晩年、上富良野町内で災禍の語り部として多くの教訓を残す。

○菊川政雄(菊川先生)・・・日新尋常小学校の人望篤い教師、菊地政美教諭がモデル。検定試験で留守中に十勝岳が噴火し泥流により家族や教え子を失う。

○和田松右エ門・・・後の上富良野町長和田松ヱ門(昭和四十六～五十八年在任)。拓一と同年輩の青年団長として登場。

○その他実在する人物・・・飛沢先生、船引武、水谷甚四郎、小林八百蔵、沼崎重平、久野専一郎、佐野文子 など

○三重団体・・・三重県からの入植者団体。勤勉実直、村民からの信頼が厚く、開拓のみならず政治・経済など多面で上富良野の発展をけん引した。

○日進分教場(日進の沢)・・・日新尋常小学校(日新地区)。泥流により流失したが六月に四キロメートル下流に移転し授業を再開した。

○上富良野尋常高等小学校・・・現上富良野小学校。作中登場する小学校では唯一現存する。

○旭川中学・・・耕作が受験した旧制中学校。現旭川東高等学校。

○絲屋銀行倒産事件・・・大正十五年五月二十四日、奇しくも十勝岳噴火と同日に経営破綻した旭川の銀行。市街の者や農民にも預金者が多く泥流災害に加えて村民に甚大な経済損失をもたらした。

実際に災害記録に記載されている逸話

・下半身のみ発見された炊事婦 (正「煙」の章)
・身内が近づくと鼻から血を流しだご遺体 (〃)
・逃げられぬと観念して家に残り助かった老夫婦 (〃)
・屋根に乗って全員が助かった家族 (続「移転」の章「大川くん」)
・9人全員が犠牲になった家族 (〃「佐戸部」家) など

〈参考文献〉
『十勝岳噴火泥流災害九十年回顧誌』『郷土をさぐる (第三号、二十号)』(上富良野町郷土をさぐる会)『十勝岳爆発災害志』ほか

第 5 回『泥流地帯』作文コンクール作品集
2025 年 3 月発行
発行:『泥流地帯』映画化を進める会
事務局　北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11
上富良野町企画商工観光課内